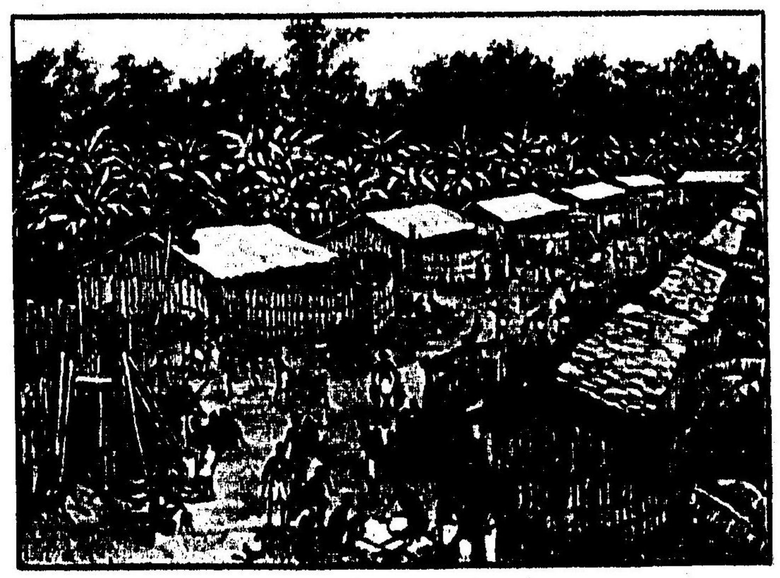
夜來の部隊に於て余等は遂に退却の事に一決せり。即ち是れより十八日間の旅を以てイプウィリに歸り、先づ彼處に强固なる柵を設けて、然る後健全なる一隊をイルトに送り、鋼鐵舟、荷物、士員幷に病氣回復者等を迎へ來り、而して又一隊をウガロータの酋に送つて同樣の事を處置し、其後更に少佐パーチクット幷に後隊の安否を確め、凡て企勢を捕へて十分の用意を爲し、再び救に來つてエミン、パシャに逢するの目的を企ふせんとに決せり。

翌十二月十六日、激しき暴風雨の爲に、余等は九時迄合營に止れり。平原の地質堅て堅くして水を吸收するに懶うく、斯くて余等は最初一時間程は留水、膝を沒するの邊を渉り、其れより靜に高まりたる平原を進みしが、此邊の草は僅に三寸許の高さにして數十ヤード毎に一二の低き木あり、恰もロンドン市内に見る所の公園の風致に異ならず。須臾にして湖水を去る一哩半許の所に來りしに、野獸の一群を認めければ、余等之を獲て糧食に宛てんと欲し、種々の奔走を爲せしの後漸くに一匹の「クド」を得て其肉を分てり。此間ヨート、ダトーは又一匹の牝鹿を獲て來る。カセンヤの上陸所を去ること二哩許の所に於て余等は一同其歩を止めぬ。

余等が茲に止りし所以はカトンザの土人に向て余等の所在を示さゝらんとを欲せしに由る。夜に入りて余等は其旅を續け、岡陵の麓に達する道に由つて、曉の頃はひに峻坂を上り、以て頂上に達せんと

東部イニヤ河に於ける懸橋



ウナイ村の森

を期せり。彼の如き頑迷なる土民と戰爭を爲すも寸毫の益なきを以て、余等は成るべく非衝突を避けんとを欲せしなり。

午後三時頃に、余等獲物を人衆に分與せるに際し、忽然土人の叫聲を聽き、又五六の矢余等の頭上に注ぎ來るを見る。人を放つて之れを檢するに、彼等の數は僅に十人に過ぎず、以て余等が一百七十の銃手に當らんとせるなり。彼等は殆ど思慮なきの人民なり、飢餓の獸類だに斯かる小數を以て大數に當るとは爲さゞるなるべし。

一行中の獵師を以て任ずるセート、ダトーは一匹の水牛に負傷せしめて之を追ひ廻はし居りしに、忽ち一匹の巨大なる獅子に會す。セート、ダトーは之を見て少しく躊躇せる間に、獅子は彼れに代り水牛の後を追ふて馳せ去れりと言ふ。

北東の方に向ふに從つて湖上の風景は次に非趣を添へたり。一面、數多居住に堪へ得べきの場所を夾みて白沙數哩に渉り、岸には絶えず漁翁の去來する樵唄白し。後部には青草綠葉を以て蔽へる小島あり、非近邊には種々なる野獸の棲放するを見る。

午後五時三十分に至り、余等は全隊を一所に集め、靜に山麓の方に向つて進むべきの命令を傳ふ。一行中三人の病人あり、中二人は久しき以前より白山の運動を爲す能はざるものなりしが、他の一人は

夜來の風雨に犯され、新に熱病を惹き起したるものなり。

午後九時に至て余等は端なく一村落の後に出でしかば、遂に土人等に衝突するに至るべきやを恐れしが、側らに一高壇の屹立せるあり、今更此歩を廻らすと他はず。依て余等は何れも昔朔遊の思出を夢びて此村を通過し、尚も頓りに此歩を續けしに、遂に一同非常の疲勞を感ずるに及び、余等も人衆と共に路傍の草上に倒れて、前後も知らず、暫ばし夫平の夢を結べり。

曉に至て余等は夜露の身に徹するを覺へて眠を覺ませしが、仰ぎ見るに、余等の周圍に四個の岡陵は六百尺の高さに於て絶壁を築けり。余等は山麓よりして僅かに二哩を上り來りしに過ぎず。余等は是れより其歩を急いで更に一山の下に達し、晴雨計を取つて之を檢するに、湖面を去ること一百五十尺、海面を抜くこと二千四百尺にして而して彼の馬鞍形の岡よりも低きこと正に二千五百尺の所に在るなり。」

余等一同昨日獲たる獸肉の殘餘を食し去りしの後、三十の强勇なるものをして先づ山頂に上らしめ、目を四方に注いで以て後部衛を免ふものゝ到着を待たしむ。

半時間の休憩の後、余等は再び峻坂を攀ぢしに、何れも强たく疲勞を加へたり。困難なる夜行の後、露に由り、雨に由り、朝來の寒氣を冒せしの後更に二千五百尺の高きに上らん事は固と是れ容易の業に非らず。而して今や又東方よりの大陽は余等の背を照らして、其熱石より反射し來る所の暑氣は、

恰も余等の顏に向つて熱鏡を加ふるが如きを覺ふ。病人中の一人は進行に堪へずして何れの所にか身を隱くし、他の熱病患者は其身を地上に擲げて其生を終らんとを期す。而も余等實に之れを救ふの道なし。余等が殆ど路の半ば頃に達せし時、カトンザの土人十二人許、遙か下部の平原よりして遽に隊を追ひ來り、其後部の足弱き者を捕獲せんと企てたり。彼等は恐くは彼の病人等に追着して以て其時に死なんとするの生命を、餘を以て奪ふに至りしならん。然し事物に機敏なるスチーアス中尉自ら後部を率ゆるとなれば、疑もなく彼等土人は他に其術を施すの道を見出すと他はざりしなるべし。

第二の岡陵に於て、余等は一小清流を見出し、爲に燒くるが如きの身を洗ひ、燃ゆるが如きの渴を慰するを得たり。彼等が疲勞の極は一體に顏面を蔽ふて、汗はしたゝれ、呼吸は迫まり、三々五々離散して一樣の列を爲す能はざりしを以て見るに足る。併し此場合に於て、余等が先きに强壯者を山頂に向はしめしは大に一行の心を安んずるに足るものあり、然らざれば數十の土人他く余等に向つて非常なる危害を與ふるに至りしなるべし。

第三の岡陵の頂に於て余等は小憩を爲せり。余等是れよりして下部後隊の上り來る有樣を見るに、彼等は未だ第一の岡陵にだも達せず、其下五百ヤード許の所に、十二三の土人あり、頻りに槍を振つて一物を貫くあるを見る、後に中尉より聽けば是れ則ち彼等が我が病人の屍骸に對して槍を加へしもの

なりと言へり。

是に於て余等は彼等の行爲を所罰せんとを欲し、ヰート、ダトー幷に四人の狙撃家をして亘大なる岩石の後部に身を伏せしめ、以て彼等の上り來るを待つ。

二時幷に四十五分間を經て、余等は高丘の頂に達せしに、先きに遺したる壯夫等は能く其務を全ふして、土人等を遠方の方に却けたり。須臾にして伏兵の所爲として旋條銃の烟を揚ぐると見る。見る間に土人の一人は死し、一人は負傷するに至りければ、彼等は驚いて散亂せり。

暫時休息の上、前部の人々をして近所の村落に糧を爲さしめしに、幸に好結果を得、其持ち來りたる穀物幷に豆類を分つて各人に與へしに、何れも五日分の糧食に供するとを得たり。

午後一時余等は一行に向つて、何れも整然たる列を造り、故なく生命を失ふの際に出づるなからんとを飛め、後出發の途に上る。最前より一行の前部に當り、許多の土人等爲す所を圍り居りしが、余等の出發を見て、兩翼より後部の方に廻はれり。又彼等の一隊は繁茂せる長草の間に潛伏し、以て余等の通過を待ちしが、余等は故らに短草の邊を選んで進みければ、彼等は遂に目的を達するとを能はず。

此失敗は彼等の憤怒を扇いて更に他の策を講ぜしめたり。

一行、岡陵に近き一淡流を越ゆるに當り、土人との小衝突は始まれり。我が中堅幷に後部は四面を敵

へる群類の爲に遮ぎられて其進退を自由にすると能はず、三列四列に隊を破つて歩めり。此時我が最後の病人は最早や其身を運ぶの氣力を失ひ、身を草上に伏して以て自然の運命を待つに至れり。前部に於ける余等は全隊を編制せんが爲に止りしに、此時恰も四百の土人一齊に鬨を挙げて飛び來るを見る、思ふに彼等は是れ路に倒れたる彼の病人に向つて「名譽」の一槍を加へんが爲めなるべし。彼等は又進んで我が後部に迫れり。此時後部は僅かに疲勞の足を支へて重荷を負ふ有様なりければ、事甚だ危ふかりしが、此瞬間に於て一人の狙撃者は前部を離れて後部に向ひ、三百ヤードの距離に於て、勇んで飛び來る一群の土兵を狙撃せり。第一丸は命中、一人の土人を地に横へ、第二丸は他の一人の胸を通じて側腹を一貫せり。彼等は止まれり、同時に前部は後部に應援せんが爲に突き出でしかば、土人等は驚きに驚きを加へて退却せり。

此所より一時間旅行の後、余等は四方の形勢を見るに足るべき一丘の上に於て會營せり—其疲勞、足痛の甚しきと余等の未だ曾て經驗せざる所。

此日午後に於て余は獨り心に思へり。彼土人等は實に奇怪の性質を有す、彼等は死を恐るゝと尤も甚しきにも拘はらず、好んで自ら死地に入るなり。道理あるの人は何人も、彼の十日、十一日、十二日迄に十三日の經驗後、再び余等に對して危害を加ふるの念を止むべきの筈なり。余等は時としては機砲を

爲して彼等の注意を促し、時としては平和の旅行を爲して、彼等先づ襲撃を爲すに非れば、余等は敢て効害を加へざるにも拘はらず、彼等は毫も其心に顧みる所を知らず。余等は忍堪に忍堪を重ねて今や第五日に及べり。余等は已に人を失へり、此上に人を失ふことを得ず、前途爲すべきの業務は多々なり。余等は尚ほ數々此間を往復せざるを得ず、イポトより、ウカローワより、人衆と荷物と銅鐵丹とを取り來つて以て再び湖畔に來らざるを得ず、尚又後隊なる少佐パークットの扶助を爲さゝるを得ず。依て余は後來の爲めに此際斷然たる處置に出でゝ、彼等に再び手を出すの道なからしめんことを欲せり。思ふに彼等をして余等と戰を爲す時は必ず其家産財産を失ふに至るべきことを知らしめば、恐に目のなき蠻人等は遂に其手を收むるに至るべきか。

此等を以て翌日未明に余は義勇隊を導りしに、八十の人直に之れに應ぜり、余は彼等に左の如く指揮せり—

「汝等の知れるが如く土人等は絶へず余等に向つて効害を與へたり。今日の事白人を要せず、余等は強たく足痛疲勞を感ぜり、故に遠近に馳驅すると能はず。汝等は汝等の酋領に從つて働くべし。行け、而して昨日余等の部下を殺せしものを搜索し、直に其村に亂入して牛、羊、山羊其他の穀物類を盡く掠め來るべし、併し彼等の小屋に放火すると勿れ。汝等は十分の注意と機敏とを以て土人を四方に驅逐し歩るべし。因廚を獲ば之を余の前に致すべし、余は之れをして村人に傳言を爲さしむべし。

此間余等は少閑を得て各自の行裝を調へたり。靴、衣服等、破れて修繕を要する所少なからず、余等は數時に渉つて靴工、幷に裁縫師を學べり。

午後五時に及んで義勇隊は歸り來れり。得る所のもの許多の家畜に、五六の小牛を以てす。余等は命じて六頭の牡牛を屠り、各人をして十分に之れを喫せしめしかば、何れも强弗利加遠征以來の大饗應なりとて其香を打ち鳴らしぬ。

「第三時」の綽名あるセート、タトーは曰く「遠征隊の生活は實に世の尋常のものに異るものあり、今日は高粱の饗應を受け、明日は飢餓に泣かんとす。來た甘て二日間同樣の有樣を持續するとなし。食し得べき時には飽く迄も之を食し盡くべし、來月は又類の豆、澤の間に、三粒九粒せざるを得ず」と。余も又斯か思へり。亞弗利加の生活は一分の快樂に向つて九分の苦痛を賭するものなり。

十九日、余等は又例の如く土人と晩走を爲せしの後、二十日に至り、ウンドゥスマの谷に進み入る、此村落は則ち余等が去る十日十一日に於て燒却せし所のものなり。此邊は至て繁榮にして、且つ豐饒なる土地なればにや、村落は戸々已に皆新築を仕げて盛く殷盛に復せしが、再び余等の來るを探知せるにや、土人は皆山上に集つて以て俄ふる所ありし。彼等は敢て前日の如くに呼ばず、叫ばず、又

戰を挑まず、余等も又平靜の間に旅行を爲せり。斯くの如くして再三往復するに至らば、彼等も余等の性質を悟り得て遂に懸觀を結ぶに至るを期べし。廣大なる眺望に實は已に熟せり、彼等は樂んで之を收むるの國あるなり。

翌日余等はアンシャの國に入り、イースト、イチュリ河を越へて其右岸に會營す。

二十二日は滯在す。スクーアス中尉も余も共に足痛の爲に旅行する能はず。二十三日に至り、少しく快愉を覺へければ、余等はイチュリの本流に遡せしに、一艘の小舟だも見出すと能はず。依て更に岸に沿ふて流水、一小島を夾むの所に至れり。二十四日の午後二時に至り、余等は彼の島に向つて强固なる懸橋を造り、二人を一組として島上に渡らしむ。此間船頭ウンダは十三の獨拔したる一隊を率ひ、施條銃を肩にして右岸に泳ぎ上りしが、茲にも又一艘の舟を得る能はず。同時に天幕に雨を降らし、其形マーブルの如く、激しく余等の天幕を打ちしかば、人皆其肌に粟を生ぜり。氣候はクーレンヘートの七十五度より急に五十二度に下りしが、凡そ十五分時を經て再たび日光を見るに至り、始めて蘇生の思を爲せり。

クリッスマスの朝早く、余はウェアンン井に頭領ウンダを送し、河を横切り、芭蕉の林を以て筏を作ることを指揮す。一行皆河中の一小島に集りし頃に於て、筏の落成を告げ、れば、先づ四人丼に其荷物を一組として河を渡らしめ、次に其安全なるを認めしに由り、六人を一組として之に乘らしむ、斯くて家畜等をも殘らず渡し終りし後、セート、タトーは一打に截つて懸橋を落したり。

二十六日の正午に於て遠征隊は遠くイチュリ本流の右岸に在り。クリッスマスの麵麭に供へん爲め六頭の小牛を屠れり。翌日部下頭領の一人、山上に於て感冒したる寒冷の爲に、激烈なる肺炎衝を起し、爲に死せり。二十九日に山て余等はインデンユクに遡し、是れよりしてイユクに近き一小村の方に向へり。千八百八十八年一月元日、余等はインゲ、トンゴに會營し、而して翌日林間に於ける巨大なる花崗石の間を通じて進めり、此所は曾て土人等が内亂の際、隱れ家と爲せしものなりと首へり。

一月六日に至り、余等はインデムクェに沿ふて竹て一人のザンザーバル人が水より落ちて死せしの所に來れり。赤色の蟻は大群を以て彼れの屍骸を襲ひしものと見え、肉は已に腐敗に喰ひ尽つて、其殘りたる骨の形は恰も大なる駝鳥の卵の如くなり。則ち唯脚骨を止むるのみにて四肢は其骨をも併せて喰ひ盡されしものなるに似たり。翌日余等は一同イブウィリに到着し、ボルローの村に入りしが、不幸にも村落は已に土人の爲に燒却されたり。余等は少しく失望せり、余等は此地を以て尤も住み易く且つ豐饒なるの故を以て再び歸り來りしものなるに、斯くの如き有樣ならんとは實に意外の事共なりし。併し余等が爲には不幸中の幸にも家屋を構成するに足るべき木片等は、注意して林藪の中に收め

あり、又磨滅の許多を近邊に於て發見するとを得しかば、急きて之を假小屋の中に運び、須臾にして余等は一四手を扱つてボドー島岩即ち「平和の島岩」を飼育するとに從事せり。

第十三章　ボドー島岩の生活

余等の食物○ボドー島岩の水槽○スチーアス中尉への命令○キロンガ、ロンガの領土に向て被れの出發○風雨に敵の襲撃○夜陰に「リーマー」を解する敵船に於ける○琥珀色の大軍○熱帶風雨制御に於ける絶○沒及國の國旗を掲へて○外科醫パーク并にキルソン大尉、イボトより來着す○後藤がマンユエマ人と共に帶中の報告○スチーアス中尉獨舟を收めて來る○余等は直に河水に進まんとを決せり○バーナクット少佐に書翰を送りんが爲めの後藤船○余等にキルソン大尉の歡迎○ウレグ、婦人種の女王を供養す○余等が穀物の敵○ボドー島中の生活○余等再びアルバルト、ナイアンザ湖に出發す。

余のイブウイッに到着するや、其心事の多端なる恰もロンドンの市人が祭中の休暇を爲して浴場若しくは大陸の漫遊より歸り來り、遽に事務停滯諸物堆積の間に座せしが如し。是等の事皆秩序的に而も敏活に處理せざるべからず、然らざれば恐くは將來の手續を長へに誤るに至るべし。余等の目的は速にアルバルト湖畔に州令エミンを訪ふに在り、之れが爲に余等は少佐バーナクットをして後隊を引率せしめ、病んで伴ふ能はざるものをウガロータ並にキロンガ、ロンガの屯營に托し、荷物の負擔に堪へざるものは之をキルソンが「飢餓の倉營」に近き沙中並にイボトに藏し、潮蝕舟アドヴェンス號は個々に區別して之を林藪の中に隱くし、而してキルソンと外科醫パークとは之をマンユエマ人に托して、以て凡ての重荷を輕め、凡ての障害を除き、急きに急きて漸く救に至りしなり。

併し余等は今止むを得ざる事情の下に、エミン、パシャの側に遺する能はず。此間余等は凡ての事物をして其緒に就かしめざるべからず。依て余は左の事柄を確定せり—

「余等はチルンン並にパーク其他の病氣全快者、鋼鐵舟アドヴェンス號、ナキシュ自動銃並に一百十六の荷物をイボトより持ち來さゞるべからず」。

「防衛に足るべき堡壘、閃地を造り、唐黍、豆類、烟草を植へ、以て防禦者をして安全に住居せしめんが爲にボドー蠻砦を築造すること」。

「少佐パークラットに使を送り、若しくは余自ら彼等を迎ふべき事、并に病氣全快者をウガロータの下より引き取ること」。

「若し鋼鐵舟にして腐蝕され、或は打破されたるに於ては、適當の樹木を以てナイアンザに浮ぶべき舟を造ること」。

「若しパークラットにして進行の途に在らば、余等は糧食其他荷物を運ぶべき人夫を送るべき事」。

第一に余等の爲さゞるべからざることは此地の周圍に柵を廻らすこと則ち是れなり。之れたに成就せば人衆は安んじて此中に種々の建築を爲すことを得、又銃を肩にして土人等が不意の襲撃に供ふるを要せざるべし。

一月十八日に至て此事は全く功を奏へたり。一百の人は山林より樹木を伐り來つて深く之れを地上に植へ、三列の堅牢なる柵は強固なる蔓草を以て之れを編み、而して其外圍には一林に平板を打ち附けて盡く之を蔽ひ去りしかば、蠻中の人々、夜間の靜閑を樂むに際して又敢て危害なる矮人并に殘虐なる土人等其目的を達ふすることを得ざるなり。蠻砦の三隅には一丈六尺許の高櫓を建て、同一の方法を以て之れを強固安全にし、晝夜共番兵を置いて四方の狀況を視察せしむるの所と爲し、又更に一層高き櫓閣を築いて以て事あるの際に、物視の用に供せり。余等は十分の注意を加へて山來得る丈け強固に爲せり。蓋し余等に迫るべきものは實に土人等が弓矢を以てするのみならず、又マンニュマ人等が銃砲を以て襲ひ來るの虞なきに非るを以てなり。

已に障柵の成就を告げゝれば、余等は更に幾多の木材并に蔓草、雜木等を集め來つて本營、庫園の居宅、穀倉、荷物倉等の建築に向つて供へたり。是に於て諸事蠻内の方針も調ひければ、十八日の夜に至り、余はスターアス中尉を招きて左の事を依托せり—

「君は明日一百の銃手を率ゐてイボトに向ひ、チルンン。パーク其他の病人を訪ひ、非生存せるものは盡く茲に連れ來るべし。君は又アドヴェンス號并に諸荷物を山來得る丈け此所に運び來るべし。チルンン并にパークよりの此頃の書翰に依れば、マンニュマ人の待遇に就き不快の事多きに似たり。併し

其後余は斯くなからんとを恐む。何れにせよ、君は一百の銃手を率ゆ、彼等はアルバルト湖への旅行に伴て戰爭に馴れ、堅鍵を加へたり。彼等はマンユエマ人に對して宿怨あり。今や彼等は獨立の地位を占めたり、取てマンユエマ人等に報復を假るとを要せず。併し好んで事を起すと勿れ。若しサルンン并にパーク等にして唯不愉快の待遇を受けたりと言ふに止まらしめば、默して彼等を誘ひ來るべし。若し銅鐵舟にして安全ならば、一日間の滯留を爲し、後非に之れを負ひ來るべし。然れども若し生存者にして君に對し、マンユエマ人の爲めに部下の白人若しくは黑人を殺害されしの實を告ぐるものならば、君は彼等と相談の上よろしく臨機の策を取るべし。成るべく君は此行を慎がれよ、余等をして再び股肱と相失するの嘆を爲さしむると勿れ。余等は已にパークット。バンヤ。サルンン。パーク等に對して十分の心痛を懷くものなり」。

スクーアス中尉の一行に向つて三匹の牝牛を屠り、又各人に對して一百二十個宛の唐黍を與へ、更に山羊、雞類、芭蕉實等を以てスクーアス并にサルンン。パークの爲に供ふ。斯くて彼等は十九日に於て、キロンガ、ロンガの屯營に向つて出發せり。

スクーアス中尉の一隊は左の如し—

人夫	八十人
頭領	六人
吏員	一人
使僕	一人
料理人	一人
マンユエマ人	一人
合計	九十八人

又後隊に殘りし人數は左の如し—

人夫	六十人
料理人	三人
使僕	四人
白人	三人

スチーアス中尉の出立の後、余は再び工事を續けて三百ブッシェルの唐黍に向つて穀倉を築造し、本體の内部に隔壁を加へ、此間サエフメンは更員室の装飾を爲すに於て怠がはし。人衆は粘土を運び來りて壁上に塗抹し、或はフレニアの大なる葉を集めて屋根を蔽ふの料に供す。或は堀を穿つものあり、或は開地を掃蕩するものあり、而して各建築の成就せるを待ち、灰汁を以て各戸を洗濯せしかば、恰も一種の白色ペンキを塗りたるが如く、外觀至て美麗を加へたり。

二十八日に至り、本營は最早や使用するを得るに至れり。余等は又三十ヱークルの地面を伐り開き、蕪菁より四方二百ヤードの距離を平にし、翌日是れ迄使用し來りたる天幕を收めて各居宅の中に移れり。サエフメンは之を見て「非常に能く出來た」と言へり。最初の中は少しく濕氣を感ぜしかども、盡夜間斷なく炭を焚きしの故を以て、頗る快にして此憂を除くことを得たり。

二月六日に至る迄、余等は開地を擴し廣げ、開墾掃蕩の勞を取りしが、土人等は往々にして近邊の芭蕉林に侵入し、或は鍬中を地上に植へ、或は毒矢を弄するとさへありしかば、此日余等は人衆を二隊に分つて芭蕉林并に周圍の林間を搜索せしめたり。

新鋪の營内に在ること數日、余等は甚しく鼠、蚤并に細小なる蚊の大軍に由て苦しめられたり。鼠は穀物の畝を荒らし、余等の足を噛み、夜間には幾度か余等の顔の上を飛び越へて、夜具の中に盲目遊觀を爲す。彼等は其先天の性を以て土人が村落を燒き拂ふべきことを豫知し、相率つて林藪の中に避け去りたるものと見えたり。然るに余等の建築新に成り、至極結構なる住家を見出すに至り、且つ穀倉の中には許多の唐黍あることを氣附きければ自他相誘引して以て來り集るに至りしなり。余等は豫め是等の事を圖り周圍に堀を穿ちたるものなれども、何れの處にか、彼等は道を求めて入り來り、以て其子孫を繁殖せしむることを勉む。

同時に熱を含みたる乾燥せる土は數萬の蚤を發生せしめ、余の獵狗ランダーは之れが爲に非常の煩悶を爲せり。余等も又殆ど同樣の有樣にて、每朝衣服を更ふるに際し、數百の蚤は四股を蔽ふばかり。余等は之を退治せんが爲に、絶へず床上を濕し撒き、一日數回の掃除を爲せり。

通常の蚊張は此地の蚊を防ぐに足らず、恰も小魚の大網を脱するが如くに、自由に此間を通行す。依て余等は木綿の「マスリン」を以て蚊張を造り、漸く此蚊を防ぐを得しが、但し就眠の間其蒸し暑きに苦めり。

石鹸は久しき以前に欠乏を告げたり。余等は種々のものを代用し居りしが、何れも皆十分の功を奏ず

る能はず。是に於て余等「カスター」面丼に灰汁を以て之を製するとを試みしに、遂に好結果を得て何れも皆喜べり。

ヤンブヤより此地に來る迄、余等は毎夕「ッーヤー」と名くる猿屬の叫聲に由つて睡眠を妨げられぬ。其群は至て高くして鋭く、殊に靜寂なる森間の半夜に在つては恰も耳を貫くばかりの響を放ち、友を呼び妻を求めて、北數五六の多きに至れば、非常愈よ喧しく、晝夕の疲勞を以てしても眠り難く、物思ふ余等の爲には少なからざる妨害を與へたり。

余等の此所に駐歩を結きしとを知るや否や、更に赤色蟻の大軍は四方の間地より堀を渡つて以て攻め來れり。其數頗に幾億なるを知らず、恰も軍隊行軍の狀を爲して一列に家の周圍に押し寄せ、高きに上り、低きを超へ、戸隙より、屋根の間より、或は公道に出り、或は間道に出て、以て一隊は前所を襲ひ、一隊は本營に向ひ、或は庫員の室、或はヴンターバル人の小屋に入り、而して彼等は往々夜襲を爲すとありて、知らず識らざるの間に人衆の身体に集り、肌膚の中に潛み、一時に立つて肉を噛むに至るが故に、人衆は爲に不時の叫聲を擧げて苦痛の爲に飛躍、狂舞するものあるに至る。斯くの如きは當に人衆のみに止まらず、鼠、甘口鼠、蛇其他の虫類も同じく彼等の襲擊を蒙るなり。余等は遂に四方に火を焚きて以て此幾億軍を燒殺するの法を取れり。

余等は又此地に於て始めて、熱帶亞弗利加に許多の蛇類を棲息せしむるとを知れり。余等が旅行の間に於ては二萬四千哩の長きに沙つて格別是等の虫類に遭着するとなく、唯之れが爲に噛傷を負ひしものは二人のみなりし、何れも死に至らず。併し今や此間地を伐り開くに際して至る所に、或は岐の中、或は倒木の間、種々の蛇類を繁殖せしめて其數數十種の多きに渉るとを知れり。

鳥類も又少なからず、殊に此邊の間地を通じて去來するものは蔦を以て尤も多しとす。余等にして若し博物學者ならしめば十分の觀察をも遂げ得しならんか、見角余等の心は目的の爲に、境遇の爲に思を勞すること多く、唯目前に見はれ來るものゝ外は、又探索を爲すの暇あらざりし。

二月七日、余等は人をして駐歩の入口に達する迄の路を測量せしむ、人衆は數日以來廣大なる道を直線に、東西に伐り開きて、以て事あるの日に當り進退に便ならしむるの用に供す。互大なる樹木は盡く伐り倒して之を側に積み上げ、道を平坦ならしめて、一物の此間を遮るものあるを許さず。又壘の西部なる一小流には橋を架して、視察隊が夜、耕作場を巡視するの便に供せり。個は盡し土人等を防ぐに於て尤も便益なる道なり、彼等が狐疑猜疑の性質は林藪の間若しくは大木を蔭に取つて徐に歩を移すに非らざれば、公然敵の方に進むとを能はず。故に今は彼等が容易に近寄るの便なきに至れり。」

黎明余等は五十尺の高さある旗竿に向つて埃及の國旗を掲け、ソーダン人をして二十一發の祝砲を放

たしめたり。

彼等が此儀式を終るや否や、西方の路端に於て發砲するものあり。物見臺に於ける兵卒は叫んで曰く「來ました〳〵」。彼等はイポトよりスクーアス一行の歸り來りしを知る。

最初に驛舍に到着せしものは外科醫パークなり、彼れは至て健全の樣子なるが、一時間許後れて入り來りたるアルメンの方は今も足痛を感ずる由にて、其顏はやつれ、眼は曲つて昔て見しよりは十年の歲月を加へたる老人の如くに爲れり。

彼等がマンユエル人の中に滯在せし間の有樣は頗る困難を感じたるものゝ如し。ドクター、パークの報告に由て考ふるに、彼等はアルメンを始め、幾多の病人を擁して之れが給與を爲すに道なく、衣服を賣り、裝飾品を賣り、器具を賣り、以て辛ふじてマンユエル人等が侮辱嘲罵の下に其生を保ちしなり。彼等は耐來アルバルト湖への旅行に由て少しく困難を重ねたれども、食物等は到る所に充滿して之れに飢するとはなく、且つ種々變化ある接遇に立ちしを以て在留の心痛はなさゞりしも、彼等の境遇に在つては毎日〳〵一も爲すべきことてはなく、飢餓の間に其日を送り、服虐の下に其情を忍びしとなるを以て、其心の煩悶は實に一方ならざるものありしならん。然るにも拘はらず、彼等が目的の爲に、敢てマンユエル人等と紛擾を醸すに至らず、最後迄平和の交際を爲し來りしは實に稱賞すべき

たしめたり。

彼等が此儀式を終るや香や、西方の路端に於て發砲するものあり。物見櫓に於ける斥候は叫んで曰く「來ました〳〵」。彼等はイルトよりスターアス一行の歸り來りしを知る。

最初に歩哨に到着せしものは外科醫パークなり、彼れは疲て倦怠の樣子なるが、一時間許後れて入り來りたるサルソンの方は今も足痛を感ずる由にて、其顏はやつれ、眼は曲つて昔て見しよりは十年の歳月を加へたる老人の如くに爲れりの。

彼等がマンユエマ人の中に滯在せし間の有樣は頗る困難を感じたるもの〳〵如し。ドクター、パークの報告に由て考ふるに、彼等はサルソンを始め、幾多の病人を擁して之れが給養を爲すに道なく、衣服を賣り、裝飾品を賣り、器具を賣り、以て辛ふじてマンユエマ人等が侮蔑嘲罵の下に其生を保ちしなり。彼等は附來アルバルト湖への旅行に由て少しく困難を重ねたれども、食物等は到る所に充積して之れに缺ずるとはなく、且つ種々變化ある境遇に立ちしを以て在來の心痛はなさいりしも、彼等の境遇に在つては毎日〳〵一も爲すべきことてはなく、飢餓の間に其日を送り、服虐の下に其情を忍びしとなるを以て、其心の煩悶は實に一方ならざるものありしならん。然るにも拘はらず、彼等が目的の爲に、敢てマンユエマ人等と紛擾を醸すに至らず、最後迄平和の交際を爲し來りしは實に稱賛すべき

の價値あるなり。

新にィポトより來りし人と、余等の艱難に在るものとは其容貌体力に於て非常に相異る所あり。彼等の肉は落ち、筋は見はれ、見る所落しく昔日の姿を偲じて、果して其同一のものなるや否やを疑ふ程なりし。

二月十二日に至り、スクーアス中尉は一隊と共に、彼の鋼鐵舟を安全に持ち來せり。彼れは二十五日間を以て全く彼れの使命を終へたり、以て彼れが驚嘆感意に、寸時も怠るとなく、事を執行せしを見るべし。

此夜余等は一同將來の方針に就て熟議を爲せり。部下の諸士個は何れも捕舟を以てナイアンザに赴き、エミン、パシャの踪跡を確めんとを望めり。余の考は則よりエミンに逢に會はんとを願まざるに非れども、此際に於ては少佐バークロットの安否に就て非常に心を痛めたり。併し更翻も又人乘も即りにエミンの方に赴かんとを主張して止まざりければ、余は敢に仲裁説を取り、一方には人を派し、余等の通過し來りし道に由て書を少佐バークロットに致さしめ、其間にエミンに逢ずるの道を明にせんとに決せり。斯くて此事を決行せんが爲に、余はスクーアス中尉をしてウガロータの屯營迄彼等使者を送らしめ、而して中尉は歸路、去歳九月十八日に於て病氣の爲に同地に道し倒きたるものを携へて此

蠻裝に來らしめ、又特にスクーアス中尉に對しては、彼れをして「ヱミン、バンヤに會合するの來を得せしめんか爲に、余等は三月二十五日迄此處に待ち合はすべきことを以てしたり。此間余等は穀物、豆類等の獻を擴げ、食物の十分を貯へて以て萬全の策を取るべきことに定めぬ。

此ボドー蠻特よりイボト迄は七十二哩、則ち往復哩數にて一百五十八哩なる所を、スクーアス中尉は二十五日間に爲し終れり。一日六哩三分の一の割合なり。併し彼れは往程に於ては七日間を以てイボトに達せりとの事にて、サエフンン丼にウレヂも同樣の旅行を爲せしとあれば、一日十一哩の割合を以て進むに難からざるべし。今ウガロークはイボトより一百〇四哩の距離なれば、ボドー蠻特よりは一百八十三哩の距離と爲る。則ち之を往復する時は三百六十六哩、之を行くに一日十哩四分の一の割合を以てすれば三十四日間に於て之を爲し終るとを得。勿論個は至て嚴酷なる見積なり、此林間を通ずるに向つては尚ほ十分の餘裕を與へざるべからず。併し斯くして余等は三月二十五日迄彼れの歸着を待ち、若し來らざるに於ては靜にナイアンザの方に進むも、其ヱミンに會する頃には彼れ又遲着するに至るべきことを思ひしなり。

二月十六日の朝、余は人衆を點檢し、二十の壯尖をして書を少佐パークットに運ばしめんが爲に五十弗の賞金を約せり。余は彼等に告げて曰く「汝等は何れも皆ヱミン、バンヤの方に向はんとを願め

り、併し余は少佐パークットの事をも心配せり。汝等は已に經驗に於て知れるが如く、亞弗利加の林の旅行は危難を以て滿せり。彼隊の人衆は今將た如何なる境遇に立ち、如何なる扶助を要するやも知るべからず、余等は余等の忠を以て彼等をして死地に就かしむるとを願はず。此行汝等はよろしく此言を體すべし、飢餓の合禁に在つて圍らず、扶助の來るに遇はゞ彼等の喜悅は其れ將た幾許ぞや。スクーアス中尉は汝等の知れる如く、剛毅にして機敏に、未だ曾て疲勞と嘆息とを爲さゞるの人、余は彼れをしてウガロータ迄汝等に伴はしむべし。汝等は十分の穀食丼に彈藥を以て供せらるべし、汝等はよろしく汝等の爲し得べき所を爲すべし。書翰は是非とも少佐の手に渡さざるべからず、以て汝等の同胞を救はざるべからず。誰れか能く此使命を全ふして以て五十弗の賞金を得るものぞ」。

個樣なる場合に於てはザンゼーバル人は、容易に其情を激して各自皆壯丈尖を以て任ずるに至る。忽ちにして凡そ五十以上の人起つて前方に進み來れり。彼等は各自皆强健にして必ず此事を果すべきとを述ぶ。是に於て余等は一々其人格を檢査するとと爲し、一々鄭重に之を吟味して遂に如何の心に滿足を與へたるもの二十人を撰拔したり。余等は更に彼等に對して、彼等を以て遠征隊中の功勞者に數ふべきとを以てし、ザンゼーバルに歸りし後、其れ〳〵相當の賞與を爲すべきとを約せり。スクーアス中尉は彼等を率ひて、此朝九時、イボト丼にウガロークに向つて出發し、余等は彼等に向て十分の餞

類、山羊、唐黍、芭蕉實等を供せり。

十八日に至り、數日來痛を感じたる余の左腕は遂に腫上れり。パークの首に出れば膿瘍なりとの事。」

二月十九日より三月十三日に至る迄余は病床に在り。十九日の夜に於て余は胃の腑に疝痛を起し、痛苦尤も激烈にして、最初一週日の間は、唯腕と胃との痛みの爲に他事を考ふるの暇だになかりし。ドクター、パークは注意に注意を加へて余の必要に應じ、慈愛なる婦人の手を以てしても之れには及び難かるべしと思はるばかり。余の周圍に在る所のものは何れも懇切の情を見はせり。パーク。サエアンは殆ど床側を離れず、サルメンは「飢餓の倉營」に閉ぢ籠りし以來今以て病人なるが、時には腰を屈めながらに來つて余の心を慰め、午後に至ればドクターは諸處の見舞に來るものを容れて共に與に其情を分たしめぬ。

此二十三日間の間、余は多くはモルヒヤの力を假りて苦痛を慰し、而して時には無感覺の中に此時を送れり。併し今や徐ろに回復の運に向へり。二日前に膿瘍は已に十分に腫れ上りければ、ドクターはナイフを以て之を切開し、爲に大に苦痛を減却するを得たり。此間余の日々の食物は唯一「パイント」の牛乳のみ。余は今に至つて尚は十分に運動を爲すを能はず、蓋し大に氣力を減殺せしものあるに由る。

余の病床に在るの間、常に有用の材として知られたるサルミニ并にカムウニーアの兩人は土人の矢に由て殺され、他に一人の頭領は重傷を負へり。彼等は茲を去ると十四哩許なるイムニルの近邊を探檢せる間に此危難に際會せしなり。ウレヂ并に其一隊は矮人の一群が余等の芭蕉林に侵入せるを發見せり。

ウレヂはインングラ酋長の妻なる一人の矮婦人を虜にし來れり。彼の女は三條の磨きたる鎖の環を首の周圍に掛け、其端は胸の上部に於て數重の渦線を爲す。尚は又三個の鎖環を双方の耳に掛け、其色は淺黒色にして、額は廣く、眼は大く、口は小なる方なり。被服は唯木皮を以て、彼處此處を蔽ふに過ぎざれども、擧動は閑雅の所なきに非らず。身の高さは四尺四寸にして年齢は十九或は二十ならん。」

三月十三日より四月一日に渉り、余等は格川の祀すべきものなし。二十五日に於て、余は漸く五六百ヤードの所を散歩するを得るに至りしが、余の腕は尚は重くして、非常に衰弱を感じたり。サルメンも又少しく彼れの長病よりして回復の徴を見はせり。

次第に病氣の回復するに際して、余が尤も愉快を感じたるとは、唐黍の畝に對して日々其生育の樣を打ち護ると見れなり。余等の畝は今は廣大なるものと爲れり。之を鋤き、之を耕し、之れに施すに種を以てすれば數日を出でずして、地上一面に若芽を吐き、其樣恰も彼の奇跡に傳ふる如く「茲に穀物

あれ」の命令の下に等しく發生を仕ぐるに弱ならず。僅か四日の事なりし、余は白色の岩礁が堅き土を破つて發出せしを認めしは。然るに今は已に其葉を開き、次第に大に、次第に高く、期くて一日一日と其生育を遂げて、枝と爲り葉と爲り、一樹に微風に搖つて其頭を起伏する樣、恰も海面に漣漪の渡るに似たり。

余は日々に之れを讀り、之を樂んで以て、刻々快方に赴く所の心情を喜ばしめ、時には書を讀み、時には眠り、危險の小天地に於て病餘圖らざるの愉快を覺えぬ。

今や磨黎は已に十分に生長して、其中に豆莢をも蔵ふを得るに至り、花は開けり、實は結べり。稍作數年の狀況は余等の心を滿たずに喜悅を以てし、他日又再び飢餓を感ずるのことなからんことを思へり。」

同時に余の病氣も全く回復しければ、余は明日船を以てナイアンザに向はんことを決せり。余は已に二十の壯夫を少佐バーククットの許に送れり。スクーアス中尉が自ら率ひたる部下は七人なりし。今は彼等の出發より已に四十六日を經過せり。余は今チルソンと共に四十九人を此島嶼に止むることとし、殘り一百二十六人を率ひ、銅鍊舟を具してナイアンザに向ふ都合なり。

後隊に關して思ふに、クプラアは恐らく彼の約に背きしものならん。故に少佐は許多の御物を以て一日數回の往復を爲し、爲に落しき進行を爲す能はざるものなるべし。余等の送りたる二十の壯夫は其道を急ぎしことなるべきを以て已にサボコの邊に達せしならん、左すれば遠からずして少佐に遭遇すべし。又スクーアス中尉はウガロークに於て尚ほ病弱のもの多きの故を以て、之を率ゐて旅するに其行を急ぐ能はざるの狀況あるならん。當時余等の處置にはチルソンと同樣なる心者多し、余は一百六十人を以て再びエミン、パシャの搜索に向つて準備を爲せり。ドクター、バークは獨りに余等と同行せんことを求められしを以て余等之を許せり。

第十四章　アルバルト、ナイアンザに再度の旅行

鋼鐵舟を曳ぶの困難○瓦弗利加林間の旅行○蟻塚土人の生活非に彼等に就ての記述○余等イチュリ河を横切ず○森林を開るに際してドクター、パークの遭難○ペッケに於て余等ヲ○ザンビーバル人の狩猟○再びウンビリ、カムの間に出る○土人との交際○マレヒル間を隔のあるもの、是れユニミンに関する最後の噂なり○酋長マザンボニ非に彼れが部下の兵隊○ムコンゴーの種族○酋長ガビラの来訪○ムヒムヤの酋長ムソリン、マザンボニと戰鬪の約を結ぶ○鬼卿サスター非にムリガ○コンゴーの種族○酋長ガビラの来訪○ムヒムヤの酋長○バビラ非にアヒムラの種族○種々なる瓦弗利加人の狩猟○ムヒンガとの戰鬪○ガビラと狩○余等カバリに達ず○酋長「マレヒル」の舟輪を求す○ニミンの舟輪○ロコマンン非にパーク鋼鐵舟を切水に曳ぶ○余よりロコマンンを通下てニミンに興へたる舟輪の寄○土人より平和の談判

千八百八十八年四月二日、余等は朝來の雨、其止むるを待つて、正午頃に再びニミン、バレヤの近況を知らんが爲に、ボート曳船を山發せり。余等は今十二個に減進したる鋼鐵舟を所持せしが、其中前後の二個は幅ひろ、厚さあるを以て容易に狹小の道を通過すると能はず、狂炎にして余等は激しく斧、鶴嘴を振はざるを得ざるに至れり。一行喘渇物を飲ふのみにしては自由に此道或は彼の道に出で、樹木の間に身を横にして通過するとを得るも、前後両個の船体は時々雨水の間に夾つて之を越ゆるに由なし。斧を振はざるを得ず、斧を振はざるを得ず、掘くては此行又數日の徒消を免れざるべき

なり。

前部は力を盡して行路を整へたり、諸所に例の鋼車を植へし所ありしが、余等は已に之を處置するに馴れしを以て格別の危險を感せず、文明の人士は彼等が一様の手段には永く其恐を傷けざるべし。

一行矮人の村落を渉り、而して四日に於てインダムリュに達せり。翌日余等は更に他の矮人部落を通過し、近所の芭蕉林に於て、ヒート、ダトーは五六の女人と共に矮人を生擒し來る、四人の女、一人の兒童なり。余等は之を見て中に二様の種屬あるとを發見せり。ヒート、ダトーの言に由れば、彼等は二十人許の仲間と共に芭蕉の實を取り居りしものなりとの事。彼等の丈けは何れも四尺前後にして中にも一人の女は、寧ろ矮人種と言はんよりは、通常の女子の早婚の爲に、發育を杜絶したるものに似たりき。併し今是等のものを以てザンザーバルの兒童に比し、又其側に通常の土人を立たしむるときは何人も一見能く其異人種なるとを悟るを得べし。

十八日に、余等はインダベスに進し、其れより二日を過ぐてビメガ山の麓に到れり。土人等は各其動産類を携へてイチュリ河の左岸に逃れたり。余等が右岸に沿ふて平原の方に出づるや、淺黄色の土兵等一隊林藪の間より見はれ、一百五十ヤードの河を隔てゝ矢を注ぎしが、余等の近所に到達するものは少なく、彼等は須臾に、余等の鐵砲に驚いて散亂せり。是れより一時半許を經て遠征隊は無事にイ

イユッを渉り、数に土人が逃去の際、遺失したる食糧十磅許を見出せしが、余等は恰も食糧に欠乏を告げし時なりければ一同之を借て大に喜べり。

イチユッを渡りしより三時間半の旅行に由つて、余等は森林より再び平原の中に出でたり。ドクター、パークは林間に在ること二百八十九日、始めて今滿目緑野の風色を見るに至りしとなれば、其喜は実を以て如何ぞ。地をも飲さんばかり。余等は已に再度の旅行なれども一同又等しく身心の輕快なるを覺へたり。

余等昨に森林を出でんとするの時に於て、途上象を打つの柏あるを見しが、其の尖は深く地中に入りて、之を拔き取るに三人の力を要せり。此勢を以てしては巨大なる象をも直に刺し止むるに難からざるべきなり。

午後に於て、草原に於ける余等が第一の會營よりしてビスガ山の風色を寫影せるに際し、余は一面の幾蜜西北より來り、前面に在る凡ての森林は、北が濃密なる蔭の下に嵌はるゝを見しが、平原の方は尚は殆なく日光の照すを見る。須臾にして他の熱蜜、南東の方よりマザンボニの嶺の南端に渉り、一面に青空を蔽ふて他の幾蜜に接續するに至り、数に雨は盆を傾くるの勢を以て降り始めたり。海面を拔くこと三千二百尺、イチユッ河を去ること七時間の行程に當り、ベッロの村あり。時は尚は午前なりしかども、此近邊には熱したる芭蕉實、唐黍、蕃薯、甘藷并に芭蕉酒等の充實せるを知り、且つ前方の村落其何嘯酔の所に横はるやを知る能はざりければ、余等は此處に於て會營せり。余等が會營を造るの間に暇は始まれり。平原の種屬に對する唯一の通辯人フェラーは胃部に於て重き矢傷を受けぬ。斯くて土人等は丈け高き雑草の間に身を伏せて以て種々余等を苦しむるの策を講ぜしが、余等又之れに應し、人を樹上に上らしめて狙撃を爲せしかば、彼等も遂に逃散するに至れり。

余等は部下のウガンダ人をして土人の一人と會話を爲さしめしが、其中に左の事柄を聞けり。

土人曰く「我等は若等無色なるものは我等と同一の人間なるべきを知る、併し其白色なるものは何物ぞや。何處より來りしにや」。

部下のもの物知りげに答へて曰く「彼等の顔は月に由て現るるなり、滿月なる時に宿りしものは我等の如く黑色と爲る。彼等白人は我等に異る、彼等は固と天より下りしものなり」。

「果して然るか、果して然るか」土人は驚きながら、其間きたる口を嚙はんが爲に手を挙げて答へり。

余等は次第に土人の性質を知るに從ひ、彼等も亦等しく道理ある人類なることを知れり。彼等は能く朝才に富む。或る時ザンジバル人は、土人が誤つて彼れに突き當りしを咎め、罵りて曰く—

「馬鹿め世間見ずめ」

之に對し土人は少しく笑ひながらに答へて曰く—

「御免ください、智識は凡て君の身に集るが故に」。

「そうよ、貴樣のやうな、馬鹿な奴は無い」。

「左樣で御座りましやう、君は萬事のものなれば」。

是等の問答は少しく爲樣の所なきに非らずと雖ども、文明社會に於て紳士等が自己の過をわびて、紛擾を避けんとする時の語に異ならざるを見るべし。

ペッヷを東方に進むと少許にして、余等は道を失し、止むを得ずウンデュスマの峠を目標として一直線に草原を横切れり。此日日光は強て暑く、草は深くして容易に進行すると能はざりければ、余等は大に疲れたり。午後に於て余等は一個の冷泉に潤ふたる林間の開地に到着せしが、此流れは是れより五哩許の上なる、ウンデュスマ山脈の溪間より出で來るものなるに似たり。

十四日に於て、余等は六時間進行の後、再びウンセラ、カムの頂上に會營を爲せり。去歳十二月十日并に十一日に、余等がマザンボニの部屬と戰爭を爲せしの所は、依然として、一早く余等の眼中に入れり。唯旅行の有樣は以前に比して大に弱る。余等は今挑戰の聲を聽かず、拒戰の勇士を見ず、併し余等にして一夜敵に止まらんと欲する以上は豫め爲す所なかるべからず、依て余は部下の通解人をして遙か離れたる對面の丘上に在る土人を呼ばしむ。種々協力を爲せし後、午後五時頃に至り、彼等は岡を下りて漸く近附き來り、遂に余等の會營に入れり。是れよりは容易に懇親の情を結ぶを得べし。

余等は彼等の顏を見、彼等も又余等の顏を見、互に書を讀むが如くに自他の心情を讀む。余等は余等の意見を述べ、亦も此地の人民に寇するものに非らず、余等はアルバルト湖に旅行するものにて、唯一夜の宿を需めんが爲に、此地に止るものなるとを告げしに、彼等は頗りに前非を悔ひ、其過りは全く誤解に出でしものにて、皆てカベンガの兵卒なる、クラ、スクは此地に侵入して掠奪を爲せしとありしを以て、余等も亦此種の暴徒ならんと思ひ、斯くは敵對を爲せしものなりと言へり。

今や余等は互に其心情を知悉するに至りしかば、彼等に明かすに一人の白人をウンヨロの海の邊に搜がすものなるとを以てし、且つ彼等は此人に就て聞きしとなきやと問ひしに—

彼等は答へて曰く「君等が最初此地に來りしより凡そ二箇月を經て一人の白人「マンユ」則ち「長髯者」なるもの凡て鐵を以て造りたる大なる船に乘り、カトンザに來着せしと云ふ。

船は鐵にて造りたるものなれども、尙ほ能く水上に浮び、其中央に當て一の大なる黑水あり、其中よりして煙と火とを吐き、船中は一村落を爲せるにや、許多の奇妙なる人間あり、山羊の遊ぶと鶏の鳴くと、恰も我等の牧場に於けるに異ならず。「マンユ」は大なる程にて君の事を尋ねたりと抱きしが、

カトンザが之に對して何と答へしや我等知らずと雖ども、「マンヨ」は再び元來し道に引き返へし、其船は煙と火とを密中に送りて火事の出來たるかと思はるゝばかりなりし。疑もなく君は違からず彼れに遭ふことを得べし、マザンボニは案内者を以て君等を湖邊に誘ふべく、而して明日の夕刻に至れば、君等はカトンザに到着することを得べし」。

翌日、余は終日繁雑の間に葬られたり。四方の土人等は、貴族、百姓、牧畜、木丁の區別なく皆余等の舍營に來り、種々様々の様子を爲して親の意を表せり。余は此間を脱し去るも氣の毒に思ひければ、忍堪して一々應接を爲せり。余の椅子は中央に在り、炎熱燒くが如くなるを以て三人の部下をして交る〳〵大なる傘を持たしめしも、暑さは格別減却することなく、大陽の次第に移るに從つて前部より後部を盛く照らされしが、夕刻に至て冷氣の來ると共に、彼等も家の方に立ち去りければ、余は漸く蘇生の思を爲せり。

此日酋長マザンボニは早朝に於て、幾多の從者を率ゐて來れり。余等も鄭重に之を迎へて舍營の中央に座せしめ、過ぐる頃銃を取つて彼等を四方に追逐したるザンゴーベル人等も、今は奮時を忘れて彼れの前に伏拜の禮を取れり。實に恐怖加の酋長に應接を爲すとは骨の折れたるものなり。彼れは恰も神聖なる偶像の如く、殆ど毫も語ることなく、笑ふことなく、唯時に侍人を顧みて何やら耳語き、侍人は之れを大なる破るゝが如き聲にて公衆に申し渡すなり。

暫らくにして侍人は、前回に余等と戰を交るに至りし次第を告げ、白人ありと聞きしを以て戰を見合すべしとの說、多く老人輩の間に行はれしが、少壯の徒は余等を目してクク、スクの徒に相違なしと爲し、以て一回を集め、戰を爲すに至りしも、其後に至り、「マンヨ」がカトンザに來つて余等を葬れるとを聽くに及んで、意よ余等のクク、スクに非ることを知り、今回平和の條約を結ばんことを欲するに至れるなりと告げたり。

余等之に答て曰く「過去の事は言ふも益なし、君等にして交館を結ばんと欲せば、余等は喜んで之を諾すべし。酋長の血と余等の血とを同一にして、以て同一の人民たることを誓ふべし。此間又決して隔意あるべからず、君等—君等勇士幷に盛くの妻子眷族は共に平和なることを祈て、何人も又君等の所有物を劫ぐることを爲さゞるべし」。

彼等は喜べり、喜んで以て「中々感心なことを言ふ」と言ひ、且つ曰く—

「マザンボニはクク、マ[illegible]の子たることを得べきか」。

「然り、固より然り」。

「我等は果して能く、眞に君等と平和の條約を爲すことを得べきか」。

「然り、眞に然るを得べし」。余等は應ぜり。

斯くて酋長マザンボニと余等の間に兄弟の約を調ふると爲せり、余等の側に在てはウニアンゾとして之れが任に當らしむると爲せしに、續て土人の醫者は針を以て雙方の腕より血を流し、彼等は直に地上に膝付いて頭を伏するの間、白色の粉を生したる僧侶の如きもの、小石を取りて四方の山と谷とに投げ付け、遂にウンセラ、カムの頂上よりして左の呪文を誦せり。

「此約束を破るものは災厄あるべし。

「私に怨を懷くものは災厄あるべし。

「彼れの兄弟に對して頭を持くものは災厄あるべし。

「紛擾の日に於て、彼れの兄弟たるとを肯がはざるものは災厄あるべし。

「己に血を以て盟約を約せしものに向つて危害の計畫を爲すものは災厄あるべし。

是れよりして彼の僧侶は此約束を破りしものは、獅子に喰はれて死すべく、病に罹つて起ざるべく、其妻子に至る迄矢を受け、或は槍の爲に貫かるべきと呪を唱げ、遂に弱樣なる木片を取りて酋長并にウエファン等の頭を撫で廻はし、此間絶へず種々の呪文を唱へて果ては口、泡を吹き、恰も狂人の如き體を爲して、彼處此方を馳せ廻はり、漸くにして此式を終へたり。

ザンザーバル人の一人はスワヒリ語を以て余に告げて曰く「此芝居は何と申すのです、御意に御りましたか」。余も又大に其狀況のハムレットが狂人の躰を裝ふ所に酷似せるとを思へり。

マザンボニはウンデユスマに於ける專制の君主なれども、其政府は自ら一の法則を以て支配せらるゝものなるに似たり。彼れの內閣員とも稱すべきものは彼れの親族にして、外交、內務等の事、事ら其處置に任せ、酋長は自ら之に携はると雖て少なし。彼れは唯趣に就て默して時を過るもの、其役目も甚だ煩瑣なりと言ふべし。蓋し此邊一帶部落の有樣は皆斯くの如きものなれば、依て以て察するに、アルバルド、ナイアンザより太西洋に至る迄、コンゴー溪谷に在る數千の部屬は何れも皆其組を同ふするものなるべきか。

彼等は一酋長より通常の土民に至る迄至て慈愛き人民なり。彼等今回の如きは心の底より平和を願みしに相違なきも、一は余等よりして珍奇の贈物を得んとの心より出でしものにて式の終るや、心を傾けて之を待つものゝ如くなりし。余等は彼等に與ふるに、反錆片の一把并に見事なる象牙を以てせしに、彼等は久しきを經て僅に一頭の小牛と五頭の山羊を贈り越したり。ウクマンジア并にブウェサの如きは鱗と鱗とを以て此邊に稱れなる村落なるが、其酋長等の余等に贈りしものは一頭の小羊と二羽の雞とに過ぎず。

此日東部ベヒラの酋長ガヒラ并にムヒユマの酋長某余等の會盟を見舞へり。此ムヒユマの酋長は赤色の羅紗にて製したる上衣を着し居りしが、是れ彼れが余等と平和を結ぶを名として去歳十二月に携へ行きしものなり。彼れは之に對して報酬も爲さず、又敢て心に敵づる所もわらざるが如くなりし。

余等は此近傍に在つて二種の部屬絶へず相戰鬪を爲し居ることを發見せり。一はベヒラにして專ら農耕を事とし、他はワヒユマと稱して牧畜を以て其生を繁ぐものなり。此二者の間柄は時々必爭の爲に交鋒を爲すとあれども、其心に於ては互に仇敵視し、未だ曾て其子孫を以て姻戚等を爲さしめしことなしと言へり。

ベヒラの酋長は余の所に來つてワヒユマの操屋なる樹を告げて曰く「彼等は一所に住居を有せず、常に水草を逐ふて轉居し、時に我等の部落に侵入して以て我等の有する所を奪ひ去るを以て恐とするものなり」と。

偖余は今余等の一行に就て記さんに、余等は十六日に於てマザンボユより十二人の輸車者を得、かヒラ並に五十の勇士に由て、伴はれ、去歳非常に困難を感ぜしの道を進めり。余等は今凱旋の途に在るが如く、到る所に土人等平和の牒を掲げて迎迎す。マクンクの村よりしてウザンザに至り、此村よりして余等は、一面にアルバルト湖上を眺み、南にはパンガの岡あり、西にはビスカ山の高く雲間に聳

ゆるを見る。

ベヒラの酋長ガヒラは、其体格小き方にて中々面白き人物なり。好んで種々の事を話し、他の酋長の默々たるに異る。彼れ并に部下等はマザンボユの如く、余等と懇親の約を結ばんことを希望し、又其領内を通過するの間、一物も余等の行を防ぐるものなからしむべしとの事故、余等も喜んで之れを諾し、例の通り、長槍の式を以て兄弟の約を遂げたり。

夜に至り、カバリの酋長ベビアレの部下、二人余等の會盟に來り、余等に告ぐるに、彼等の酋長は白人「マレユ」より余に宛てたる一個の包物を所有することを告げたり。個はナイアムサンのムビンマより彼れに依托せるものなりと云ふ。

翌日余等は又復た土人の見舞を受けたり。彼等は余等白人が如何なる顔付を爲し居るかを見んと欲するものゝ如く、余等の居る所、動く所に群り來る。彼等は薪を集め、甘蔗並に粟等を持ち來つて以て余等に供す。此日は余等の部下も又客人と爲り、土人等が火を焚き、水を汲ひの間に、安んじて地上に横はり、以て暫ばしの休息を爲せり。余等は土人等に與ふるに飾玉、眞鍮片、鐵片等を以てせしに、何れも喜んで感謝の意を表しぬ。

酋長ガヒラは此日飛ひ立つ如き赤色羅紗の新衣を着して余等の會盟に來りければ、部下の卿個等は鄭

率に之れを導きて種々の人々に紹介を爲せり。後に至り、頭領は彼れに示すに一の鏡を以てせしに彼れは之れに對するや否や、從者と共に驚きて數間を飛び除けり。彼れは其顏の鏡面に寫つるを見て、何物か向ふの方より進み來り、彼等に當らんとせるものなりと思ひ、暫くは驚きしなり。頭領にして其人を見ず、人々は依然として座し居りしかば、彼れは再び、恐る〳〵鏡面に近寄つて漸くにして之を打ちながめ、互に語つて曰く「是れは私共の顏に似て居るやうだ」。部下のもの側に在つて「其通り、君等の勇壯なる顏が寫つるものなり」と告げゝれば、カビラも始めて其れと悟り、尙も進み寄つて熟視するに至りければ、愈よ其顏の濃厚に映射するを見たり。彼れの從者等も又彼れの周圍に集り、共に鏡面に對して「其れ其傷跡が其儘に、廣き鼻、大なる口、あゝ〳〵其頭の冠の毛が動いて居る。是れは奇妙だ。水のやうだが、流れもせず、裏は黑い。是れは〳〵偉なものを拜見致しました、我々の先祖に倒ふいふものを一目見せたかつたものを」。

ウヤンザの峠は猛烈し、其噴火の樣は天の四方に沙つて驚くべく喜ぶべきの觀を盡せり。日沒に至り、湖上より吹き來る冷風は遽に寒氣を加へ、余等は種々の衣服を集めて之を着たりしも、尙は寒きに堪へず、遂にバビラの小屋の中に入つて漸く少しの暖を取れり。

余等は湖畔に向つて直行することを止め、路を南東に取りてカベッの村に進めり、蓋し彼の「マンヨ」より余に宛てたりと言ふ街輪を見んが爲なり。此邊の草は許多の獸畜に由て喰はるゝが爲に、一面恰も人工を以て刈り揃へたる庭園の如く、唯諸所に沼池の類ありて之を絶つあるを見るのみ。

余等は今此平原を通じて旅行するに當り、前回に比して大に其勢の變れるを見る。彼等は皆て何れも隣人、隣人へ傳へて戒備を促し、相率つて諸所に屯集し、矢を飛ばし、槍を振つて余等を屠殺せんとを企てしものなるに、今は全く其形を變にし、隣人、隣人へと傳へて互ひに相誘ひ、以て余等に從ひ、余等を送るに至れり。余等の一行として一百五十のバビラ人は前隊を擇成し、後部にも又同樣の人數あつて、九十の荷物は更に彼等の護身隊に由て其勞を分たれ、何れも皆相後れざらんとを勉むるに至れり。

一行カベッの地に着するや、酋長ムヒニマは余等を迎へて余等が會禁すべきの地を指示せり。彼れは丈け高くして、痩せたれども強健の体格を有し、至て誠實の風あり。「マンヨ」の街輪に就て問ふに至り、彼れは鄭寧に仕舞ひ置きたるものを取り出し、余に告げて曰く「我は此街輪を秘密に貯へ置かんが爲に、部下の二人を除くの外は、何人にも之れを知らしむることを爲さゞりし」と。蓋し何事も秘密を伺ふ此地に在つては余等は彼れが配意の勞を謝せざるを得ず。

包は亞米利加製の油紙なり、余は之を解いて左の街輪に接せり—

スタンレー君足下、此湖水の南端に於て白人を見しものありとのことを聞き、余は此語を確めんが爲に來れり。余は漁船を以て南端に近づきんとを期せしが、部下のものはカペ、レガの土人が襲撃せんとを恐れ、遂に之れを與さいりし。

併し今日、恰もナイアムサンなる酋長ムビクワよりの使者來り、彼れの妻は、其故郷なるウンドムスマに於て君を見しとを告げ、又余の手紙を君に渡すの勞を取らんとを申出でたり。依て余は更に一人の同盟者、酋長モゴをして彼の使者に伴はしめ、ムビクワの許に至て此書翰を足下に致さしむるの道を求めしむ。

若し此書にして足下の許に到着するを得ば、足下は書翰に由て余に足下の所在を告げられよ。余は直に酋長ムビクワの許に來り、漁船を以て足下を迎ふべし。餘は面會の上に熟議を期せん。

カペ、レガの土民に就て注意せよ。彼等はキャプテーン、カサクを殺害せしものなり。

足下の親友なる

ドクター、エミン

湖畔のタンクルに於て、千八百八十八年三月二十五日午後八時之れを認む。

余は書翰の大節を翻譯して之れを人衆に傳へしに、彼等は何れも驚嘆奮躍せり。カペリの土民等も又

大に喜べり、蓋し其注意に注意を加へて秘藏に貯へ置きたる書翰が斯くの如き功を奏するに至りしを以てなり。

各酋長より糧食を贈り越せり。余は更に書を〻ビアンに傳へて各地より持ち來る糧食に對しては各相當の報酬を爲すべければ、成るべく多く之を致さんとを求めしめたり。

二十日に於て余はエミン、パシャに送るの書翰を認め、中には、先きに使者を以て送りたる書翰の屆かざるべきとを慮り、更に最初よりの經過を記述し、又先きに此湖畔に到着せし模樣を告げ、又余等は糧食に窮し居るを以て、漁船にして之を運ぶの力あらば、一萬二千乃至一萬五千磅の穀物を持ち來たさんとを請め、之をサエフソン並にパークに托し、五十の銃手に附するに二人の指揮者を以てし、銅鍋舟アドヴェンス號を以て湖畔に向はしめたり。聽く所に由れば湖の南端よりパシャの屯營なるムスワ迄は、二日間の航行を以て達し得べしと云ふ。

余等がカペリに、滯在するの間、數百の土人は近隣の部落より來つて余等を見物ひ、酋長も勇士も皆余に服從すべきとを申出でたり。彼等曰く「國は足下の有なり、足下の命令は如何なることをも承從すべし」と。彼等の心は固より深く頼むに足らずと雖ども、糧食等を十分に持ち來りしとを見れば、虛妄に出でたるに非るとは明なり。余も亦彼等に與ふるに種々の物品を以てせり。ムビアンは日々、奇形な

る木製の器に牛乳一杯酢を盛りて余に贈れり。

第十五章　エミン、パシヤとの會合

パンゲに於ける余等の會談○カペリの酋長ムピアン○ベレガの殺害○カトンザ井にエミンとの兩酋長悔悟の誓を結ぶ○バンゲアの窓○ロエフンレよりの書○エミン。カサテ井にロエフンレ、古カバリに於ける余等の會談に滿る○エミン、パシヤ、井に歸る長カサテの脱逃○パシヤのソーダン人○余等のザンビーバル人○遠船ケイディブ岡○ベーカー井にブルー山○エミンに關するドクター、ロヤンカー井にフォルキンの脱逃○カペ、レガの最寄り○エミン井に赤道諸州○エミンに關するドクター、ロヤンカーの報告○余エミンと共に將來の方向を談ず○隊長カサテの逃遁○ウンサベに於ける余等の會談井に糧食○隊長カサテ井にエハムト、ビリに對するカペ、レガの待遇○マブルキ水小の角に陣る○エミン、パシヤ井に彼の兵卒○余がエミンに對する眺望井に彼れの答辞○エミンの地位○マホメタト、アチメット○コンゴー州○外勢者よりの公書。

二十五日、余等はカペリを出發して、海面を去ること四千九百尺の所なるペンゲに於て會樂せり。パンゲの本村は遥れより四百尺の高所に在りて、コンゴー井にナイルの兩谷を分つ所の一丘の上に横はれり。此西部よりして彼のイースト、イチユリ河始めて源泉を發す。他の側なる狹き划石の間に又一流あり、流れてアルバルトの湖に入る。余等の會樂は恰も高原の一端に位し、アルバルト湖の南端全般を眼下に見下すことを得。

カペリの酋長ムピアンは余等に伴ふて以て彼れの領内を過み、此日ペンゲの土民に命じて余等に糧食

を致さしむ。彼れは又彼を此邊の勇將―頗る強なるカベ、ンガに對して唯一の勇將を以て任ずるニムンに送り、他日カベ、ンガを討伐するに際し屈強なる應援をも爲すに足るべきものなれば、此際來つてスタンレーに誘すべしと言へり。

廿六日、余等は廣原を下ると二時間と四十五分にして、バレカの村に達す。村人は已に去れり、併し此處はカベリの所屬なるを以て余等は酋長の承諾を受け、玆に在りたる穀物を人衆の間に分與せしに、何れも五日間の糧食を貯ふるを得たり。

廿七日、余等は十二月十四日に於て、余等の贈物をも受けず、其十六日の會談に向つて夜襲を爲さしめたるカトンザの酋長は、使を送つて是非とも余に面會せんとを需む。彼れは今マザンボニ。カビラ。カベリ幷に其他の諸酋長余等を歓迎せしとを知り、前非を悔ひ、進んで余等の歓心を買はんとを欲するに至りしなり。時に彼の知名の勇將コムビはカベリの言に從つて一頭の牝牛、數頭の山羊幷にビール、甘藷の幹多を以て、バンガの岡を下り來り、余に面會せんとを請へり。彼の十二月十三日に於て強く余等の後部を苦しめしものは則ち彼れの部下なりしなり。彼れは言を盡して、先きには余等を以てカベ、ンガの部屬ならんと誤解せしに由り、斯くは襲撃を爲せしものなるとを告げ、今日以後は余が言に從つて國を挙げ、身を挙げて盡すべしと言へり。余等は彼れと懇親の體を調ひ、時久しく會談の後に分

れぬ。カトンザの使者には嘗迫て沙汰する所あるべきとを告げたり。

四月廿七日、一同バヴァに止る。近隣に蚊多く、常に余等の頭上を飛び舞ふて肉類其他穀物類あるを見れば巧に之をさらひ去る。依て余等は閑暇を樂まんが爲に、肉類を手にして彼等の飛び來るを待つに、何時も能く之を奪ひ去らる。思ふに蚊に一種の神經あり、余等の心を察ふに妙なる所あるに由るものならんか。

余等の獵隊「第三時」は此日獵に出でゝ一匹の見事なる「クズ」を獲て歸る。

廿八日も滯在せり。ワヂは「第三時」と共に獵に出でゝ、午後に至り三匹の鹿を獲て來る。

二十九日午前八時に於て、余等將に湖邊に向つて出發せんとするに際し、一人の土人、ヤエアンンよりの書翰を以て來る。日附は四月二十三日にして、中には、彼等が安全に、エミン、パシャの屯營なるムスワに到着せしと、屯營長レヤクリ、アヤヤよりして此事をエミンに報ぜんが爲に使を派せしとを記せり。又レヤクリ、アヤヤよりして一能の葱を送られたり。

九時に至て、余等は湖邊に向つて出發す。二時間を經て、湖を去ること僅に四分の一哩許の所に余營す、是れ則ち古カベリの村跡なりと言へり。余等は五日間の穀物を所有し、肉類は自由に此邊に於て獲るとを得。平野は種々の歓迎を以て厳へばなり。

午後四時半に於て、余の天幕の入口より、余は湖水の北東面に當り、黒き物体の進み來るを見る。余は始めは土人の獨木舟ならんと思ひしが、少しく其形の大なるを感じければ、是れ恐くは側舷舟アドヴェンス號の歸り來りしものならんかと思へり。須臾にして船は愈よ大と爲れり、須臾にして甲板に烟の立ぐものあるを見る、蒸氣船に相違なし。一時間許を經て、今は明に船尾に於て一二の小舟を牽き來るを知る。六時半に至り、蒸船はナイアムサンなる灣形の所に於て投錨せり。此時都下のもの二十人許、余等が倉庫の前方、濱邊の方に在り、旗を振り、火を放ちしが、其距離は僅に二哩に過ぎざりしも、彼等は一向氣附かざるもの〻如くなりし。

是に於て余等は一隊の急使を派し、湖畔に沿ふて以て彼方に馳せしめ、余等の救に在るとを知らしめんが爲に、其近所に及んで發砲を爲さしめたり。然るに余等が使者の挙動、如何にも怠慢きものありしと見え、船上のソーダン人はカバ、レカの部屬なるべしと推し、忽ち又鉄砲を爲して救に戰端を開けり。併し自他相殺傷するには至らず、間もなく船中の水夫等は湖畔の人の言語を解し得て、敵に非るとを悟り、舟を下ろして一同上陸の事に着手せり。午後八時に至り、人衆は喜悦の叫びを擧げ、砲聲は愉快の音を響かすの間に、エミン、パシャはカサヲ。ヴェッソン幷に一人の吏員と共に、余等の倉營に入り來り、以て一同握手の禮を取れり。何れがエミン、パシャなるか「救にミストル、スタンレー」。丈け高く、身痩せ、眼に眼鏡を懸けたる人、精確なる英語を以て「茲に、ミストル、スタンレー、余は實に君の厚意を謝す、余は如何に、余が滿腔の感情を述ぶべきかを知らず」と。余曰く「是下がエミン、パシャなるか、斯か言ふと勿れ、願くは來つて營内に入れ、茲は暗くして相見るに由なし」。

天幕の入口に於て、余等は共に座を占め、蠟燭の光は一面を照らせり。余はエミン、パシャは古き埃及の軍服を着し、其容貌は堂々たる軍人の如くなるべしと思ひしに、左はなくして彼れは能く其身に適合したる純白色なる木綿服を着け、其容貌は寧ろ學者然たる有様を呈せり。黑色にして少しく寒縮したる彼れの髮はマジャー風の顏を染へども、一双の眼鏡は彼れをして仏太利人若しくは西班牙人の觀あらしむ。敢て彼れの心に於て非常なる心配ありしとも思はず、其身に於て病苦なる所あるに非らず、寧ろ健全にして平和を樂しみし人なるに似たり。キャプテーン、カサヲは之れに續り、年齢はパシャより若きものなるも、見る所彼れより年長なるが如く、其顏面著しく苦難の間を經過し來りしの跡を存せり。カサヲも同じく清淨なる木綿服を着け、埃及風の帽子を以て頭を蓋へり。

余等は旅行に關し、歐洲の事情に關し、イクエトルアル諸州に起りし事、自他個人に關する事等を相話して二時間の時を費し、最後に余は此愉快なる會合を終へんが爲めに「レヤンベーン」酒の瓶を傾け

て、以てエミン、パシャ并にキャプテーン、カサクの健康を祝せり。此酒はスカンレー、アールに於て余が次人なるクレンロッフの寄贈せしものに係る。

余等は彼等を湖畔に送り、是れより彼等は小舟に乗じて以て流船の方に向へり。

四月三十日、余等は一同ウンザベに進めり、此所は一体に緑草を以て焼きたる土を蔽ひ、湖水を去ること五十ヤード、ナイアムサレの島を距ること三哩許なり。余等流船の碇泊せる所を通過せる時、パシャがソーダン兵の一隊は湖畔に整列し、樂隊、樂を奏して以て余等に敬禮せり。此日パシャは軍服を着けて彼等を指揮せしかば、昨夜よりも一層立派なる風采を示せり。

余等のザンザーバル人は是等軍卒の側に立つては、恰も乞食隊の如く、身を纏ふべき余き衣服とてもあらざりし。併し余は之れを以て恥とせず。彼等の服装は如何なるにもせよ、余等が殆んど人力の堪へ得べからざる困難を越えて、以て今日に至るを併し所以のものは、則ち彼等の力なり。彼等は固と軍人に非らず、軍事上の事を能にするものに非らず、併し此遠征隊の爲には彼等は彼のソーダン兵に比して、尚は遙かに勝る所あるなり。此儀式を終りし後、余はパシャに三十一箱のシャンパン酒を贈り、而して流船の上に至り、彼れと共に「シャンパン」を以て捧げたる栗の菓子、并に新しき牛乳を以て朝飯を喫せり。

流船は則ちクイダイブ號なり、千八百六十九年にサムダ會社に於て鋳造せしものにて、九十尺長く、十八尺廣く、吃水は五尺なり。已に二十年を經過せしも今尚ほ用に堪ゆ、但し進行は遲き方なり。上部の方は舊時の儘なれども、下部船底の邊は已に一度修繕を加へしものなりと言へり。

船中にはパシャ。カサクの外にチュニスの鎮種團なるピタ、ハザン。五六の埃及人并に一隊の水夫の外に四十のソーダン兵あり。余は彼等が種々の話を爲すを聽き、其間皆に由て恰もアレキサンドリアの或は下部コンゴーに在るの思を爲せしが、眼を擧げて四方の風色を見るに及び、アルバルト湖上の流船内に立つことを感ずるが如くなりし。余等靜に船を馳せて湖畔より北方一哩半許の所を過むに、ウンロロの高峰は右方に在り、左方には同じく一列の岡陵併立し、余等は恰も對山絶壁の間に在るなり。ウンロロの山は一面に青黒色を帶ぶ、是れベーカー氏が「緑山」の名を與へたる所以。余等がナイアムサレの島を離るゝや、幾多の岩石水面と其顏を等ふし、日光之れに映じて恰も愚河の觀を呈す、ベーカー氏は又之れを呼んでカスケードと言へり。

ドクター、ヤンカー並にフェルキンの二氏は皆て余等に告げて、エミン、パシャは身の丈け六尺有餘にして、威儀的、敏捷の人物なりと言ひしが、其實パシャは其丈け五尺七寸に過ぎず。余は余がカイロ府に於て彼れが爲に調製したるツボンは或は短きに失しはせぬかと思ひしが、今之を彼れに渡す

に及んで六寸程削除せざるを得ざる程なりし。彼れは四十八歳なりと言へり、併し見る所頗て若く、其髭は黄黒く、挙動も活潑なるを以て三十四五の壯尖なりと言ふも、人敢て怪しまざるべし。

パンヤは甘てモンブッの邊を探検せしとありと言ふ。併しカサラ。ヤヤンカー等の諸氏と同じく、天文上の觀察を爲すとなく、偏に羅針盤に山て吟味せしなり。唯彼れは至て規則的の行爲を重んずるものなりければ各地の氣候等は精細に取調べたるものゝ如し。

正午に於て、余等はウンサベの近物に投錨し、余は陸に上りて人衆を指揮し、以て此處に堅固なる倉營を造るとに從事せり。蓋し此邊は尤も危險の地にして、カベ、レガは彼れが千五百の施條銃を以て何時に襲ひ來るやも測るべからず、又他にクガンダの如きも其掠奪の途上、奇貨置くべしとして不法の來會を爲すやも知るべからざればなり。

此夜エミン、パンヤ余等の倉營に來り、久しきに沙つて會話を爲せり、併し余は遂に彼れの本冒の存する所を知る能はず。余は彼れに漢文にケイダイブの詔書並に主相ヌーベー、パンヤよりの書翰を以てせり。

余は是れより二週間を待ち、再びウンダニスマの高原、粮好き場所を求めて茲に一の堡壘を設け、其出來上るを待つてパンヤに暇を告げ、後隊なるバーテラット少佐の扶助に赴かんとを思ひ、而して歸

來再びパンヤに會して以て一同ザンゼーバルに向はんものと考へたり。併し茲に困難なるはパンヤが方向の決せざると是れなり。余が埃及に歸らんとを勧むる毎に、パンヤは常に其職を、手もて輕く打つの習慣を以て、笑ひながらに「熟考すべし」と言ふ。彼れは彼れが久しく力を致せしの所を、今直ら斷然振り棄てゝ歸るに忍びざるものあるに似たり。

余は彼れに對して埃及政府は到底イクエトリアル諸州を統轄するの力なきとを告げしに、彼れは答へて曰く「我は明かに埃及が此地を支配するの困難なるを見る、併し余は未だ余の地位に就て明に決すると能はず。ケイダイブは余等にして埃及に歸り來らば、余等並に吏員人衆等の給料を拂ふべきも、余等にして此地に止る以上は自立して凡ての事を爲さゞるべからずと言へり。ヌーベー、パンヤの言ふ所も之れに同じ。斯くの如きは余に對する指揮に非らず、彼等は余に此所を去るとを命じたるには非らず、唯自由に任ずべしと言ふなり」。

余曰く「茲にはケイダイブも何ほ又ヌーベーも居らざれば、直接に君の言に答ふると能はず、依て余は一君にして若し之を許さば一彼等に代つて答辯を爲すべし。始めドクター、ヤヤンカーは埃及に來つて君が彈藥の欠乏の爲に困難なる地位に立つとを告げたり。彼れは又其詳細を説明して、君は今日の勢を以て非常なる戰爭若しくは災厄に罹かるとなければ、一年乃至一年半を支へ得べき事、君は能

く君の全力を擲てイクエトゥアルの諸州を防禦し、以て困難の中に世界の希望を擁ぎし事、又君は四囲の事情は如何あるとも、埃及政府よりの命令ある迄は飽く迄之を守護すべき事、又君は國を愛し、人を愛し、國は繁榮に赴き、人は安んじて君の配下に屬し、諸事皆正當の方法を得せしめたる事、又君は君が是れ迄力を盡したる土を此儘に棄て去るに忍びず、埃及にして若し之を支配するの力なしとせば之を歐洲諸國中、此地の爲に力を致さんとするものゝ下に屬せしめんことを欲する事等を示したり。此事は已にドクター、ロヤンカーよりして君に告げたる所に非らずや」。

「然り、彼れは此事を告げたり」。

埃及政府の吏員等も、此報告を基として君の狀況を察し、君の便宜を計りて今回の書翰を發するに至りしものならん。君が以上の如き考を有するものとすれば、埃及政府はムダに君をして此地を去るとを命ずるを得ず、故にクイダイアは君に指揮の自由を與へて君にして歸り、來らんと欲せば歸り來れよ、定額の給料を支拂ふべし。併し君にして強いて此土に止まらんと欲せば、再び埃及より救護を受くるとを望む勿れと言ひしなり。

余等遠征隊の職務は唯君に向つて彈藥を送致するに在るなり。今君にして余等に伴ひ、以て歸國の途に上らんと欲せば余等は喜んで君が爲に盡瘁の勞を取るべし、併し君にして歸るとを好まずとせば其

れ迄の事。

君今此亞弗利加に於て殘るとせんか。君は尚ほ壯年なり、君の身躰は健全なり。君は此間一の勢を以て十年若しくは十五年を持續すべし、併し歳月の人力を減殺するとは眞に非はれぬもの、君は遂に老衰するの期あるべし。其時に至て、君前途の事を考へ、以て歸途に上らんとす、恐くは時遲かるべし。君にしてコンゴーに達すべし、文明の國に近付くべし、君は如何にして君の部下の爲に衣食を爲さしむるを得べき。君は無事に海岸に達せしとせんに、其れより君は何を爲さんと欲するや。何人が能く君の人衆に家屋と糧食を與ふるものやある。埃及政府の君を迎ふるの時に於て君來らずんば、埃及はクイダイアの言の如く、將來に君等を助くると能はずと言ふに非らずや。

君にして終生效に止るとせば、其後此領土は如何に成り行くべき。君の部下は互に權力の爲に戰ひ、全土を挙げて破滅に歸せしめざるべきか。若し君の此領土にして海岸に近く、適當の地を占むるならんには、君は能く此地を護り、將來に雄策を爲して成功するとを得べきも、此處は是れ一面數百哩を隔つる森林に對する所の一僻地、此湖水を圍繞するものは皆暴虐無道なる獵獸の民君は何の目的あつて此地に滯在するとを欲するにや」。

パレヤ曰く「君の言實に是なり、併し余は極めて許多の人衆—婦人と兒童とを併せば一萬を以て數へ

ざるを得ず、如何にして是等を海岸に輸送するを得べきや之を運ぶ人のみにても許多を要す是れ余の困難を感ずる所なり。

「運ぶ人、何を」。

「婦女子と兒童とを。彼等は旅行すると能はず、さりとて之を此地に遺するとは爲す能はず」。

「婦人は步行せしむべし、自ら步む能はざるの兒童は之を驢馬の背に托すべし、君は許多の驢馬を所有すと言ふに非らずや。人衆は最初一箇月間許は十分旅行すると能はず、併し次第〳〵に之れに慣るゝに至るべし。余が曾て遐弗利加を通じて旅行したる第二の遠征に於ては、婦人も能く余等に從つて步めり、恐ふに君等の婦人も少しく之れに慣るゝに至らば敢て難きを覺えざるべし」。

「彼等は途上許多の糧食を要するなるべし」。

「聽く所に據れば君は數百頭の家畜を有すとの事、之れを以て十分の肉類を供給するに足る。穀物野菜等の如きは之を途上に需めざるべからず、而して余等にして若し交易を爲し得べきの土地に遇せし時は、余は十分之を爲すに足るべき物品を有し、已にムサワ、に遣せば效に余等の供へ數きたる荷物あり、依て以て安全に海岸に旅行するとを得べし」。

「然るか〳〵。併し尙は此事に關しては明日を期して熟議する所あるべし」。

五月一日、ウンサベに於て留る。

午前十一時頃にエミン、パシャは船より來る。余等は共に座を占めて後、更に前夜の酋長を續げり。」パシャ先づ曰く「君が昨夜聞りし所の言語は余をして此地を去るの方に傾かしめたり。併し實際の事情は頗る紛雜せるものあり。部下の埃及人は疑もなく歸らんとを欲するなるべし、其數は婦人と兒童との外に五十を以て數ふ、是等の徒は假令余が此地に止るとも、行くとを好むに相違なし、余も又數て彼等を要せず、彼等は數々余の命に背き、余の法を破るものなればなり。余は曾て彼等に告ぐるに、カートームは破れてゴルドン、パシャは殺されたりとの事を告げしに、彼等は之れを信ぜず、此語は余の撰造したるものにて遠からず、狀助軍は埃及より來るべしと言へり。併し常備兵則ち二大隊を擁成する所のもの共は、恐くは行くとを好まざるべし、彼等は此地に在つて自由の生活を爲し、妻あり、妾あり、一も不足を覺えざるべければ、埃及よりも却て此地の住み易きを感ずるならん。此他の凡ての人衆は、余にして歸る以上は共に從ひ來るべし。併し已に常備兵にして行くとを拒む時は、余の地位は、實に困難なるべし、彼等をして彼等の運命に放却せんか、彼等は共に墮落せざるを得ず、余は勢ひ彼等に、銃砲と彈藥とを與せざるを得ず、余の此地を去りし後は如何なる境遇に立ち到るべき。紛擾に紛擾を加ふべし、互に力を以て他を制御せんと圖るに至るべし、殺戮は之に從ふべし、而して

遂には一同共倒れの結果を見るに過ぎざるべきのみ。

余曰く「君の言の如んば實に恐るべきの事なり、併し君が此際に於て尤も重きを置くべきの點は君の義務なるべし、君が埃及政府に對する義務なるべし、ケイダイアの詔書は以て君の意見を決するに足るものなるべし。

故に今君の爲すべき所は、君はよろしくケイダイアの詔書を取つて之れを軍卒に讀み聞かすべし、而して君と共に歸らんと欲するものは一列に立たしめ、歸ることを好まざるものは他の列に立たしめ、而して直に出發の途に上るべし。此地に止まらんとを願ふもの半分ありとも、四分の三ありとも、敢に至ては決して躊躇すべきに非らず、個は彼等の自由にして實に止むを得ざるとなればなり」。

バレヤ曰く「君の言眞なり。併し彼等にして若し余を捕し、力を以て余を留めんとせば如何」。

余曰く「此事あるべからず、此事あるべからず、君は常に彼等を薙御訓練せしものなるべし、豈に君の命に從はざるべき理あらん」。

「然らば余は明日、ケイダイアの詔書を以て余の屯營に向け、凱旋を宣道すべし。君にして若し得べくんば余に一人の使員を假せ、余は彼れをしてダッフルに於ける軍卒に對し、彼れは埃及政府の使命を帶びて來り、彼等を呼び戻すものなることを說明せしむべし、思ふに君が部下のソーダン人をして之に

伴はしめば更に効用あるべし。而して彼等にして若し行くことを欲せば余は行くべし、否らざれば余も留るべし」。

「今君にして茲に留るとせば君は彼の埃及兵を如何にせんとするか」。

「余は君に請ふに、彼等を伴ふて歸らんことを希圖せんのみ」。

此時余は改めてバレヤに向ひ、「君は余に代つてキャプテーン、カサクの意見を問はれよ、余等は出來得る丈けの力を彼れに向つて致さんことを依托されたるものなれば」。

茲に於てカサクはエミンを通じて答へて曰く「余は一にバレヤの意に從ふべし、彼れにして行く以上は余も從ふべし」。

余はバレヤに言て曰く「見よ君の責任は重し、君はキャプテーン、カサクの運命をも共に荷ふものに非らずや」。

バレヤは笑つて之を彼れに飜譯せしに、更にカサクは言を爲して曰く「余はバレヤと共にせんとを願ふも、敢て彼れを煩はすものに非らず、余は余の意に由て運動するを得べきなり」。

余曰く「バレヤにして茲に留まらんと欲せば、君は君の遺產を如何にせんと欲するか」。

「遺產とは、何の」。

「君の給料の事なり、八年間の君の給料は已に巨額に上りしならん、君はそれをヌーバー、パシャに與へんと欲するか」。

ヌーバーに與ふるも可なり。僅か一萬弗前後の金なるべし。それを貯蓄するとも何事も爲すを得じ。余は今四十八歳なり、一眼は已に明を失へり。余にして埃及に留れば、一時は彼等も歓迎すべし、併し歸着する所はカイロ府の一隅に寂少なき纏の如きの餘生を送るに過ぎざるべし」。

午後に至り、パシャは再び余の天幕に入り來り、人衆の意に從つて進退を決するの外、他に道なきを言明せり。

余は又挨及兵が喜んで歸郷の旅に上らんとすることを聞けり。彼等の數は凡て六十五なり。常備兵中の第一大隊は六百五十人を以て數へ、第二大隊は八百人と稱せらる。而してパシャは七百五十のリミントン旋條銃を有し、他に幾多古風の銃砲を有すといふ。

五月二日、今朝蒸船クイダイブ號は北方に向て出發せり。其行程は第一にムスタ屯營、次にカンクルに向ふ、此間凡そ十四時間半を費すべし。而して二日を經て船はアブーレに達し、三日目にガッフルに着する都合なり。中にパシャの書翰を載せ、歸路一人の少佐并に六七十の兵卒、又集め得べき丈けの人足を連れ來らしむ。斯くて船は往復十四日を費すべし。

余は敢に一の記述を忘れたるものあり。パシャは余の書翰に從つて、來着の際に、數頭の牡牛并に牝牛、四十の山羊、許多の雞類、外に數千彷の穀物を準備し來り、以て余等に供するに三週日の糧食を以てせり。此平原に於ては時に獣類を爲すの外、容易に食物を得る能はざるを以て、是れ尤も必要のものなりしなり。

パシャはカサクと共に此處に止り、而して彼れが二十の兵卒は余等の舎營に換して南方三百ヤードの所に在り。彼等は何れも諸事の用意を爲せしものゝ如く、更に此際に於て不足を感ぜず、余并に余の庚閲等も此二週日の間パシャと自由に交際するを得て、尤も彼れの人と爲りを窺へり。カサクは英語を解せず、而して彼れの佛語は余よりも更に解し難きものありければ、彼れと相話すとは止めたり。余は併し、パシャよりして彼れの履歴を聞くことを得たり。彼れはウンロロに在つて非常なる災厄を蒙れりと言ふ。彼れはエミン、パシャの文部長としてウンロロに住居し、パシャの書翰をウンロロの宣教師マケイ氏に送り、又同氏よりの書翰、書物、雜品等を傳送するの用を爲せしなり。

時にウガンダよりして遽かに、余等が遠征の風聞傳はれり。カバ、レガは之れを聞いて油々敵大事なりと思へり、風説の傳ふる所に由れば遠征隊の强勢は凡て數千の壯尖よりして成立し、到着の上はパシャと力を併せて、ウンロロ并にウガンダを通じて、全土を併呑するの見込なりと言へり。

恰も此時に於て、余幷に支那等に宛てたる書翰は、カベ、レガの手に落ち、愈よ此事の眞なるべきを確めたり。依てカベ、レガは部下を派してカサクの家に侵入せしめ、其盛くの財産を掠奪せし後、彼れ幷に彼れの使僕を水に縛し、以て種々の嘲弄侮辱を加へたり。セハムド、ビリなるものはカサクとマクィとの間に書翰を往復するとを知とせしものなるが、此際に於て殊に彼れを冷遇したりと言ふ。カサク幷に使僕は暫らくの後、カベ、レガの支配に由てウンヨロより率き出され、國境外に於て、裸体の儘再び、樹に縛せられたり。

併し或る工夫に由て彼等は其縛を解き、潮邊に逃れ來つて道を求めしに、使僕の一人幸に一艘の小舟を見出し、共に潮水を横切つて西岸なるオンクルに至り、以てエミン、パシヤの扶助を求めんとを思へり。時に恰も一艘の漁船來るに會しければ、カサクは之に告ぐるに事情を以てせしに、船は其意を了して歸り、具に之をパシヤに報ぜり。是に於て數時間を出でずしてパシヤは自ら漁船ケィダイア號に搭し、一隊の兵卒を率ひて來り、暫らくの間東岸の方を捜索せしに、此時恰もカサクは漁船を見て歓呼を爲せしかば、パシヤも其れと知り、船を近附けて以て彼れを迎へたり。パシヤは又一隊の兵をして岸上に上らしめ、進んでキベロの村を焼却し以て其不法の罪を罰せりと言ふ。カサクは已に記せしが如く、裸体の儘にて逃遁を謀りしとなれば、凡ての財産、記錄幷に書翰等をも盛く失却するに至

りしなり。

彼れの告ぐる所に據て見るに、余の郵便脚夫は、去歳七月二十七日則ち余等がヤンブヤを出發せしの後一月にして、ザンゲーバルを出發せしなり。左すれば余等の書翰は九月十一日に於てムサラ、に達し、十一月一日にウガンダなる敎會の屯營に着し、而してキャブグーン、カサクは十二月一日則ち余等がナイアンザの西岸に到着の前、恰も十二日に於て六個の書翰を受け取りし都合なり。然るに彼れは千八百八十八年二月十三日に至り、カベ、レガの追遁する所と爲りしものなるを以て、彼れの都合に從ひ、余等の書翰は久しく彼れの手に留まり、パシヤの手に達するに至らざりしなり。

此朝セート、ダトーは今營に向つて糧食を供給せんが爲に、五六の部下を率ひて隈邊に出掛けたり。彼れは已に二頭の水牛を殺せり、併し三頭目のものは足に傷きしのみなりければ、一散に飛び去つて或る林藪の中に其身を潜め、以て追躡者の至るを待つものゝ如くなりし。時にマブルキなるもの、獨れの力を以て賞めて傷つきたる水牛にても獲べしと爲し、私に其跡に就て追みしに、彼れが林藪の側に至るや、水牛は心得たりと首はんばかりの意氣を以て突然潛伏所より突出し、荒々しき叫びを爲して彼れを突き上げ、右方の一角はしたゝか、彼れの股を貫けり。斯くて水牛は再び彼れを振り落し、頭を以て彼の体を打ち、側腹、腕、足の進所なく血を以て染むるに至れり。セート、ダトーは彼れの叫

を聴き、飛び來つて一丸の下に水牛を殺せしが、彼れの身命を全ふするに於ては殆ど遑かりし。負傷者は愁ぎて之を食餐に送れり。「第三時」は再び出發して更に四頭の大なる牛を獲、人衆をして之れを食餐に持ち歸らしめ、以て其れ〳〵各人の間に肉を分ちしが、不幸なるマブルヤは之れを味ふことを得ざりし。

四月三十日の夜、殆ど一夜を通じて暴風荒れ、バンヤはクイダイブ號に向て二個の錨を下すことを命ぜり。幸に碇泊所の良好なりしが爲に、船は損害を蒙らず。是れよりして引き續き余等は數々暴風の雨を吹き來るを見たり。

三月三日、ウンサベの食餐に在り。カバリの土民は恰も久しく他國に在りし所の彼等の主公を歓迎するが如きの風情にて、一同打ち集ひ、馬鈴薯十籠許を持ち來つて余等の前に供せり。

午後に至り、暫らくの間會話の後、バンヤは曰く「余は恐る余の人衆等は決して埃及に行くことを好まざるべきことを。併し君にしてサエフソン丼に君のソーダン人をして暫ばし余と共に留ることを許したらんには、又彼等を說き勸むるの道もあるべし。此他に余は、兵卒等に非違意を懷るの便を與へんが爲に、君自ら一篇の布告文を草し、以て君の見る所を指揮し、更に彼等の決意を促されんことを願む。余の知る所に由て觀察するに、彼等は決して埃及に赴かざるべし。埃及人は勿論行くならん、併し彼等

は數は少なく、且つ何の効用をも爲し得るものに非らず」。

バンヤの言如何にも不決意の所わり、今に至て斯くの如きの言を聽くは余の心に喜ばざる所。勿論バンヤの地位の困難なる所あるは余之れを知る、併し如何に困難なればとて、此場合に於ては一か二かの撰ぶ所なかるべからず。余は更に進んで左の言を爲せり。

「余は尙ほ他に二個の問題の君に告ぐべきものわり、是れ深く君を信用する人々より君に向て述む所のものなり、余は君が是等の問題に對して熟考わらんことを願む。

余をして之れを言はしめよ。第一の問題は已に數々君に告げしが如く、君はクイダイブの下に屬する忠誠なる軍人として、彼れの命に從ひ、余と共に埃及に歸るに在り。到着の上は君、君の直屬丼に人衆等は其日迄の給料を受くることを得べし。君が埃及政府に由つて更に任用せらるべきや、否やは余の茲に明言し難き所、併し思ふに、君の如き經歷を有するものは世に少なし、埃及の國境を守るに於て、實に必要の材たることは十目の見る所なるべし。此問題に對しては、君の已に言を爲せるが如く、君は一に君の人衆の意見に從はんと欲するものゝ如し。然らば其れにて好し、君が今君の人衆の欲するが如くに、此地に留ることとして領を立てんに、敢に第二の問題來る。

此問題はベルシュームの王なるレオポルド陛下より君に依托せんと欲する所のものなり。彼れは余に

告ぐるに、折角文明の萌芽を發出したるイクエトリアの諸州をして再び蛮昧野蠻の境に歸せしむるは遺憾の事なれば、若し故數一萬磅乃至一萬二千磅を以て之を支持するを得ば、余は彼の地をしてコンゴー州に連絡せしめんとを望むと言へり。彼れは此事に關して勿論君の手を假るの見込なり、彼れは君に向つてバンヤの地位に於て一千五百磅の年俸を支拂ふべしと言へり。君の意は果して如何。此場合に於て君の職務は、ナイルとコンゴーとの間に交信を爲し、領土内の法律並に秩序を保持するに在るなり。

第三の問題は以下の如し、若し君の部下にしてクィダイブの申出に係る、埃及に歸るとを斷然拒むとせば、君は唯君に信服する兵卒のみを率ひて、ゾルクトリア、ナイアンザの東北隅に來れ、茲に余は東方亞弗利加協會の名に由て、君が爲に一の屯營を設立すべし。余は協會の目的に對して適當せりと思ふの地を選んで一の要塞を起し、而して君の爲に必要なるものは銅鐵舟を始めとして皆之を君の手に送するを得べし。而して其れより余は直にマセー、クンドを通じて歸路を急ぎ、此事を東方亞弗利加協會に報じて以て其承認を得、君の地位をして堅固に且つ永久ならしむるとを圖るべし。併し此事は未だ確定せしに非らず、唯余が君に對する厚意よりして企畫する所に過きざれども、君の決心を聽く以上は余は必ず目的を遂するを得べきとを信ず。亞弗利加の將來に向て大なる希望を懷ける同協會の爲には、君の如きの人材は實に無限の價値あるものなればなり。

余は更に君に向つて告ぐべきとあり、請ふ當時の間余が爲に之を忍べよ。余は今君の參考に供せんが爲に、余が埃及政府の行爲に關する所見を開陳すべし。余の考を以てすれば、埃及政府の組織は、埃及本國よりアルベルト、ナイアンザに沙つて遠く其方針を誤れり。議論上に於ては間白く且つ確て自然的のものなりし。埃及政府は河の口よりして、ナイルの如き、コンゴーの如き水路を通じて以て領土を擴め、屯營を打ち立て、以て一政府の下に之を一貫せんとせしもの、自然的の事業なるには相違なし。此企畫は固と過しきに非らざりしも、如何にせん此途に當るの人を得ること能はざりしを。ペーカーの如き、ゴルドンの如き又君の如きは適當なる人材たり、但し其下に附屬したる吏員等は如何、兵卒は如何。埃及人に非れば則ち土耳其人―隨々の詭計を行ふとを知れども、一有用の業を擧ぐること能はず。故に彼等は其領土の念よ廣きに從つて意よ如何ともする能はざるの狀況を呈せり。文明は野蠻よりも好きもの、無政府の地は政府あるの民に如かず、併し此埃及の企畫に於ては殆ど一の政府なるものを立つるとを得ざりしなり。クドー並にコンドロコロより「ホワイト、ナイルの流」迄は勿論、瀛船はベルベーの地よりクドー迄文明の烟を吹き、道を開き、地を拓き、以て爲す所あらんとせしが如くなりしも、忽ち亞弗利加山中一陣の暴風の爲めに吹き倒されて又再び其跡を擧ぐる能はざるに至れ

り。僞瑪哈メット、アチメットは元と何物ぞ、一アラブの猾才たるに過ぎず、併し埃及政府が紛亂に紛亂を重ねたる失敗の跡は彼れをして一火能く五十萬立方哩の地を燒却せしめたり。ゴルドンは殺され、カートームは陷り、而して各地相次で敵手に入り、遠近殆ど全き地なきの間に、君は能く、獨り君は能くクドーより退却して以て此人衆と領土とを保持せしなり。故に將來に於て又此地に向つて金錢せんとするもの、同一の方針に由り、同一兵力を以て他を壓却せんとするが如き有樣にては到底埃及政府と同一の結果を免れざるべし。

今之れをコンゴーの組織に就て對照する所あるべし、其勢力の州内に加はりしとは埃及のスーダンに於けるよりも更に遠かなるものあり。然るに之れが創設者は未だ曾て一丸を用ゐず、力を以て土人若しくは商人を壓する如きなく課稅の如きも法に於て諸物品に賦課するの外は敢て其他を煩はすとなし。是に於てか土人との和合一致を得たり、酋長等は來つて其土を捧げ、而して綠色の旗は黃金色の旗と共に其色を合はすに至れり。何故に——土人は依て以て外人雜居の利益を得ると以てなり。彼等は第一に、近隣の强敵に對して白人の力を頼むを得べし、凡て彼等の耕作したる食物は之を白人に賣つて以て衣服其他の必要品を備むるとを得るなり。彼等が交易する所の象牙、樹脂、パーム油等一も課稅を課るとなく、彼等の習慣并に家内の事物に向つては一の干渉を加ふるとなし。是れ則ち平和を以て

創設し、平和を以て統治するもの、則ち其好果を獲たる所以は人民の平和なるが爲に非らず、乎段の平和なるに由るなり。若し同一コンゴー州に對し、埃及政府の執りしが如きの方針を以て、象牙賣買は政府の專有權と爲し、個に本國を益せんが爲に格外なる課稅を爲し、兵力を以て一時に彼等の風俗習慣を打破するの道に出でしめば、コンゴーの土人豈に又今日の如き平和の味を飲ふを爲さんや。正に憤然蜂起遂に全土を蔽ふに憤怒の焰を以てするに至るべし。彼のスタンレー、フォールスに於て如りたる一撥の如きは以て明らかに其地位を悟り得べきに非らずや。

惜て今君の此領土は將來如何に成り行くべきや。埃及政府が埃及人の手に由て運轉せらるゝ以上は、再び埃及に由て支配さるべきとは思ひも寄らず。埃及は斯くの如き遠隔の領土を支持するの力なきなり。玆に、世人の想像に上りしと言ふが如く、埃及が鐵道を以てクゲー、ハルフハとパルパーを結び付け、又之をカートーム并にメーキュムの方に延張せば、クドーは埃及領土の南端と爲るに至る。又更に鐵道を以てクドーとダッフルとの聯絡を通ずる時は、埃及の領地は此湖水の南端に及び、而して全土を通じて立派なる政府を打ち立つるとを得べし。併し此事は何れの時に至て實行せらるべきや、君は果して君の生時に於て之を希圖するとを得るか。

然らば何物か能く此地を占有するに至るべき。ベルゲニームの王なりとせんか。彼れも又恐くは其目

的を達するとを得ざるべし。疑問は歳入の多寡に關す。君は尤も此事を知るに於て適當の履歴を有するもの、一萬磅乃至一萬二千磅の金額は到底此州の政府を支持するに足らざるべし。此他に多少の增額を爲し得るとするも、此地よりヤンブヤ迄、六百五十哩の距離には、少くとも二十の屯營を設けて、五十乃至六十の吏員の下に一千二百の兵卒を殖はざるを得ず、而してコンゴーとの交通を頻繁にし、若々改良進歩を圖らんと欲せば、更に相應の器具、車馬等を供へざるべからず。

斯くベルヤニーム王にして成功する能はずとせば、誰れか此後を引き受けて君が爲に圖り、君が爲に供給を爲すものぞ。勿論世界には亞弗利加の爲に力を致さんとするものなきに非らず、君の必要に由つては二度や三度の遠征隊を派遣して多少の彈藥を供給するものなきに非るべし。併し是れのみにて君の目的を遂する能はざるとは君の已に熟に知悉せる所なるべし。

然らば則ち君は今將た如何せんとするか。余は君の意の存する所を知らんとを欲す。若し其れ多言の罪の如きは、余が君を思ふの情の溢れしに由る。率に恕せよ」。

バンヤ曰く「余は實に君の厚意を感せり、余は今之を附するの辭を知らず、余は滿意に君の言に答ふる所あるべし。

君の示されたる第一の問題に對しては余は已に返辭を爲し終れり。

第二の問題に關しては、余は伺はゝ埃及政府の義務の下に在るとを思ふ。余の茲に在るの間は此地は埃及に屬するもの、余は直に彼の國旗を撤して以てベルヤニームの旅を進つるに忍びず。余は三年の久しきに渉つて埃及政府の下に屬せり、併しレオポルド王に對しては未だ一面の識あるに非らず。余は今君に問ふ、君の經驗を以てすれば、君は能く此地とコンゴーとの間に、相當の費用を以て交通の道を開くを得べしと思ふや」。

余曰く「最初に於ては至難なるべし、余等の恐るべき經驗は今尚ほ忘るゝ能はず。併し余等は是れより再びヤンブヤに赴きて後隊を扶助すべきものなるが、歸路は往路よりも困難を減ずべきとを期す。先輩者は尤も苦まざるべからず、之に從ふものは非智識に由て大に利益を得るに過る」。

バンヤ曰く「果して然るなるべし、何れにせよ、余等は審信の性復に向つて二年を待たざるを得ず。故に余は深くレオポルド王の厚意を謝すると同時に、此事に關して敢て靜退を爲さゞるを得ず。

第三の問題に就ては余は尤も其好都合なるべきを思ふ、余の人衆は埃及に歸るとは好まざるべきも、ソルクトリア、ナイアンザに赴く事に就ては異論なかるべし。部下八千の人衆中四分の三は婦人と兒童となり、假令埃及に赴きたりとも政府は如何にして是等を養ふとを得べき。且つ又行路の困難を思はざるべからず、余は實に斯くの如きもの共をして續々道上に斃れしむるに忍びず。併しソルクトリ

ア地の旅行は爲し得べし、格別の迂路にも非らず、故に君が最後の問題は甚だ都合好きを思ふ」。

余曰く「此事は格別急ぐに及ばず、余は是れより後隊ベークフット等を扶助し來らざるべからず。君等に此間に於て熟考せよ」。

終つて余は彼れに示すに、彼れが甘てサー、ウロン、オルクに書を與へて、彼れは此地を挙げて英國政府若しくは他の諸國―亞弗利加の爲に盡さんとする權力の下に置かんとを望みしの新聞を以てせり。」

バンヤは之を見て少しく驚きたる樣子にて、個は竊盜のものなり、何故に活字に附せしにや。拔及政府は之れを見て定めて異樣の眼を爲せしなるべしと言へり。

余は之に答へて曰く「拔及政府は已に自ら之を支配するの見込なきを公言せるものなり。英國政府も又敢て之を處理せんとを欲するものに非らず。余の考にては此地はウガンダ。ウンロロにして文明の制度の下に立つに非れば、一政府の力を用ゆるの價値なかるべし。併し東力亞弗利加協會は此地將來の爲に大に目的を屬するものなれば、君にして志ある以上は、余は必ず成功すべきを信ず」。

第十六章　バシヤと共に（前章に續く）

領土内に於ける商業ある也嘗○ウンサベの暴風雨○鯨魚の子の寒○イブロム湖○ザンローバル人バレガ特に拔拳す○ドクター、ベーター二人の失踪者を搜索す○得びザンローバル人に就て○非常なる暴風○余等に對するバンヤの贈り物○ミーンの東貝に紹介せらる○ミーレが密密の國境○ケイダイブ國ムスタ也物に向て出發す○マブルキ非に戰れの給料○バンヤ非に六分儀の用法○地力調査員の出立○蒸船ケイダイブ國非にナイアンザ調査車を組せて來る○後隊の搜索に向て歸るべき方法を問す○埠車に對する余の使命○余等がバンヤの道○ザンローバル人が道別の無禮○使者ヘーゾの失踪○ルウムンゾリの前兆○アルベルト湖水の見前の還獻者○東部イトリ河に近き二個の高峯○カバ、レガに對し、ホーンに向ての應援○ミーン、バンヤよりの二通の書簡○カドンゴ非にムレリの兩酋長余等を誘引せんとの計畫すとの報に接す○新入失ヘーゾ○余等ウドンゴの食物を奪ふ○マザンガ非にガビクの助力を得て余等ムレリの食物を奪ふ、故郷は已に滅亡せり○マザンガ非の兵士の力除○亞弗利加大陸の實狀○ウンビク、カムの岡に於て食物す○酋長ムレリの酋長和を請ふ。

五月四日、バンヤは一層其意を決せしが如き風情にて、余に對し、ヴ非クトリア湖の方に移るべきとを述べしが、併し心底には依然一種の疑雰を包むものゝ如く、余は之を明解するに苦めり。

同六日、ウンサベに滯在。午前八時頃に於て暴風起り、激しく東北の方より吹き來る。此以前のものは東南の方よりして東方に向ひしなり。此間余等の東西兩側に於ける高嶽は一面に霧と蒸氣とを以て蔽ひ、忽ちにして黑雲加れり。湖水の全体は恰も泡沫を以て滿たすが如く、又白雪を細ずに似たり。

斯かる際に於て湖上に船を浮べなば到底覆滅を免るゝ能はざるべし。

五月七日、同じくウンサベに滞在。

此夜バレヤは余と共に食事を終すに際して、カサヲは頻りにウンゴクの道を取るとに反對し、センブッの道を取つてコンゴーに進するの安全なるに加かずと言ひたりとのことを告げたり。之れに由て見るにバレヤは尚ほ埃及に歸るの考を全く捨てたるには非るが如し。

同じく八日、前日來引續きて暴風雨あり、電光閃き、雷鳴轟き、四面の風色一時に壯觀を呈す。

此日余等は卵子より孵化せしのみなる三十七匹の鰐魚兒を發見せり。因に云ふ、此鰐魚は前足には五箇の爪を有し、後足には四箇を有するなり。其物を喰はんとするに際しては上腮を開きて之を容れ、下腮は動かずして唯腰輪の用に供するのみなり。

十一日に至り、糧食は欠乏を欠げたり。前日部下の五人は之を得んが爲に出で行きしが、今に歸り來らず。迫々又彼等の本性を見はすに至るべきか。

サムアメン氏は病に臥す。

バレヤの言に由れば、イブクヒムの湖は唯ツルクトゥア、ナイル位の小湖にして、四面には幾條の溝渠あり、中には幾多の小島ありて以て其郷を掩ゆと言ふ。彼れは自らゴルドンと共に陸に依て其右岸

に至りしことありと告げたり。

午後九時に至り、余は更に凶報に接せり。四人のもの、四時頃に於て湖畔に戯れ居りしが、遂に其跡を晦ましてバンガの村に掠奪を試みしものと見えたり。彼等は忽ち土人等の取圍む所と爲り、二人は殺され、他の二人は重傷を負ふて逃れ來る。

十二日の朝余はドクター、パークをして四十五の銃手を率ひて二人の失跡者を捜索せしむ。其中の一人は、一夜荒原中に彷徨せしの後、午前九時に歸り來りしが、背部には土人の爲に突かれたる大なる創を負へり。併し幸にも傷は急所を外れたり。彼れは余に告ぐるに、彼れが肉を以て穀物と交易せるの間に、突然銃聲響きければ、一同擾亂を告げ、土人は一方に逃れ、彼れは他方に走りしが、忽ちにして、數人の土人は彼れを追擊し來り、背部に槍を投じたり。土人等は尚ほも追躡し來りしが、彼れは漸くにして此場を逃げ延び、沼澤中の丈け高き草の中に潜伏し、今朝に至り漸く歸り來りしなりと言へり。

然れども彼れの言ふ所は必ずしも事實として信ずるに足らず、彼等ザンゾーバル人は已れ等の非を蔽はんが爲には巧みに言語を發明し、以て都合好き事のみを告ぐるに慣る。故に余は單に其結果に由て彼等の行爲を察し、一同を集めて左の事を告げたり—

「汝等は一日五砂乃至六砂の糧食を得しの間は手を束ねて何事をも爲さず、唯之れを喰ひ尽るを以て職務と爲すなり。滊船が十数日に沙つて他に航行せしとは汝等の知る所なり苟も思慮あるものは食物を節約するの法を講せざるべからず。汝等に物を與ふるは之を棄て去るに同じ、何人か能く絶へず之を供給するを得べき。汝等は許可をも待たずしてパレガの村に侵入せしもの、汝等の此運命に至るは固より自ら招く所、汝等の一人は殺されたり、余は一銃の施條銃を失ひ、而して負傷者は又久しきに沙つて職務を執る能はず。依て余は今汝等に新品を與へず、汝の隨意を以て受けたる創は汝自ら之を愈すべし。此上に汝等は若し回復するに至らば、余に一銃の施條銃を贈はざるべからず」。

十三日、ドクター、パークは歸り來れり、彼れは失跡者并に銃砲を見出すの目的を遂する能はず、唯僅かに問罪の爲に部下に寇したる土民の村落を焼却したりと言へり。

昨夜激烈なる旋風起れり。濤を流したるばかりなる暴雨は南東東并に北東より湧き出で、余等は已に暴風雨の來るべきを豫想せしが、併し之れが爲に余等を驚駭打破せらるゝに及ぶべしとは思はざりし。北將に來らんとするの際は恰も江河の堤を決したるに異ならず、雨は土人が矢を投ずるが如きの勢を以て余等を襲ひ、如何に防禦の術を施すとも効功を奏するに由なく、余等は堅牢なる天幕の下に在つて、恰も野外に立つに異ならず已にして余等は傾けり、支柱は折れたり、水は流れ、床は浮びて、

余等は唯一所に集り、唇を噛み占めて互に顔を見合すのみなりき。

十四日午後に至り、滊船ケイダイア號は許多の穀物并に數頭の乳牛を載せて歸り來れり。パレヤは慈善家の風采を以て喜んで之を余等の間に分ち、又余に堅牢なる一足の靴を與へたり。ヴェファンも彼れよりしてレヤッ。ズボン等を受け、パークは途上ザンザーバル人の爲に一切の器具を奪ひ去られしが爲に、殊に困難を感せしが、此日同じくパレヤよりして種々の衣類を受けたり。余等は此他に又鮮密、西瓜實、密柑、水瓜、惣并に嗅煙等を得、余は特に「ハチーアニー」の烟草并に一瓶の精物を供給されたり。パレヤが是等の物を所有するを以て見れば、彼れは聞きしが如くに非常に困難の地に立ちしにはあらざるべし。故に又必ずしも將來の方向を急ぎ決するにも及ばず。余等は凡て余等の物品をヤンヴヤに於て遺し來れり、蓋しパレヤの狀況を察する能はざりしを以てなり。而して余等は又後隊扶助の爲に、再びヤンヴヤの方に向はざるべからず、少佐パークラットは今那邊に居るにや、若し彼等にして來たヤンヴヤを離れずとせば、再び一千三百哩の行程を旅せざるを得ず。思ひ起すも恐るべく悲しむべきの事、余等は必定此間に於て、更に幾多有爲の人を失はざるを得ざるべし。是れ果して上帝の意か、固より余等は果行せざるべからず。

此日パレヤはヨリム、ペー。少佐アワレ、イッフェンヴ并に他の吏員を以て余に紹介せり。余は二三

日前に、彼れに求むるに、ナイアムサンに於て余が爲に一小屯營を設立せんとを以てせり、一は將來彼れに向つて通信を爲すに頗る便あるものあり、且つ余等が後隊を率ひて歸るに際し、十分糧食の調集を爲し置かんが爲なり。彼れは此日少佐アッシに告ぐるに此事を以てし、且つ言を爲して曰く「君は今スタンレー氏の前に於て、余に假すに四十の人を以てし、以てスタンレー氏が必要と爲す所の此屯營を建設するとを約すべし」と言へり。此言を聽いて余は實に驚嘆の感を爲せり、如何に新事を言とすればとて、一州の州令たるものが部下に對して斯くの如きの言を爲すは不都合ならずや。

再びパレヤと對話の際に於て、余は彼れの言に據り、余等は今一度アルバルト、ナイアンザに進り、其れより彼れの人衆を集め來るに於て二箇月間を費さゞるべからざるとを知れり。則ち彼れは余等の留守の間に其準備を調ふるとを爲さず、余等が後隊と共に歸り來るを待ち、以て余をしてダッフルに至り、彼れの人衆を說諭せしめんと欲するなり。彼れは又復た其方向に關して、彼れの人衆は挨及に行くとは欲せざるべきも、ヴ非クトリア、ナイアンザに移るとは爲し得べしと言へり。

余はパレヤに對し、聽く所に由れば、彼れは四方の獸畜多き土地に至りし時、一時に一萬三千の獸畜を調集し得しとの事なるが、此話は果して眞なりやと問ひしに、彼れは之れに答へて曰く—

「其は虛說なり、尤も久しき以前、ロープ、パレヤが此土の州令なりし時、其部下のペクヒット、ベーなるものマククカに於て、一時に八千頭を放牧せしとありしが、彼れは之れが爲に大に疲憊を蒙れりと云ふ、蓋し斯くの如き行爲は全土を荒滅せしむるに過るべきものなればなり。是れ則ち此地の歷史に於ける調集高の尤も巨額なるものなり。余も糧食を得るの必要に迫つて數々之れを爲せしとありしが、其中尤も多くの獸畜を得たる時にても千六百頭に過きず、他の場合に於ては五百、八百并に千二百頭を出でしとは稀なり。

昨今兩日共氣候は至て溫和なり。日陰に於ける寒暑の度は、フォーレンヘートに由て左の如くなり—

於午前九時	南東よりの微風	八十六度
於同十一時半		八十八度三十分
於午後一時半		八十八度三十分
於同七時		七十六度
於夜半		七十三度
於曙六時		七十三度

而して晴雨計はウンサベの地が海面を抜くと二千三百五十尺の所に在るとを示せり。

五月十六日、引き續きウンサベに在り。

漁船ケイダイア號は今朝ムスワ。タンシル并にタアレーの諸屯營に向つて出發す、余が部下の人衆は森林旅行の際、大に其數を減却するに至りしを以て、彼處に是等の補欠員を募らしめんが爲めなり。キャプクーン、カサク并にチユムスの蠻種間なるヒタ、ハザンは此船に由て行けり。

余は人衆をして無事に苦しましめ、過害の行爲を爲すの暇なからしめんが爲に、平原を通じてバンタの村迄、直經路を開かしむることを決せり。此道にして成就せば余等が後隊扶助の爲めに出發するに當り、ナイアムサンの島并に古カバヲの廢跡を迂回するよりは遙に捷徑なるを悟べし。

余等の通辯人なるフェラは、ベッセとの戰鬪に於て激しく胃腑に傷を受けしが、今は已に全快するに至り、其体量も日々に增加するを見る。

最日水牛の爲に大傷を蒙りたるマブルキは一時は到底回復の見込なかりしが、此頃に至りて少しく其好の徵候を見はせしに似たり。

ランドーの村に侵入の際、背部に重き槍創を受けたる一人も又次第に回復するに至れり。

余等は常時已に土人と同樣に、枯草を以て嚴ひたる小屋の中に住めり、其狀況恰もアルベルト、ナイアンザ州の土着の民となりしに異ならず。

十七日に至り、余等の切り開きたる道は、バンヤ村の方に向ひ二千三百六十歩を進むことを悟たり。

十八日、余等の運師等は遠に出掛くるとの事に就き、其れ〳〵彈藥を分與せしに、彼等は手より手に之を受取ることを爲さず。其何故なるかを問ひしに、斯くする時は運搬に於て困難なるべしと言ひ、一旦之を地上に置きし後、彼等は來つて之れを受取れり。奇なる習慣もあるもの哉。

余は前日來、バンヤに航海用に供する六分儀の用法を教へたり。彼れは從來航行を爲すに、三角錐形の羅針盤を用ゐ、而して其時に多少の變化を生ずることを知らざりければ、方針の上に於ても多少の錯誤を免れざりしならん。

彼の水牛の鼎りを蒙りたるマブルキは余が近々此地を出發すべしとの事を聞きしが爲にや、今朝余を床側に呼んで、彼れが受取るべき給料其他の遺贈に就て、遺言を爲し置かんことを求めたり。彼れは之れを友人マルフ并に兄弟なるサンゴロに分與すべしと言ひ、更に他の人々をも指名せんとする樣子なりしが、傍より徒らに多人數の名を擧げて主公を煩はすと勿れと告ぐるものありしかば、其儘にて止みたり。余は彼れの心を慰め、ドクトーの言を聞くに、汝は必らず回復すべし、余は至て重き樣なれども、急所を除けたれば危險のものに非らず、又余は再び旅行を爲すに至るも、留守中は親切なるバンヤが汝等を保護すべければ決して落胆するに及ばず、思ふに余の歸に歸り來るの日には汝は强壯なる身と爲ることを得べし。何ぞ今遺言を爲すの要やあらん、と言ひしに、彼れは答へて云ふ—

「併し我れは自ら到底助かるまじと思ふ、我が身体は破滅を告げたり」と。實に彼れの身体は見る陰もなき有様と爲れり。右の呎は殆ど飛び出で、二個の肋骨は破折し又右の股は非常に潰離せり。

カバリの酋長ムヒアレは二日前に自宅に向つて山歩し、ナイアムサンのムビンシマは昨日郷村に歸れり。カトンザも去り、マザンボニの人衆は、昨夜舞踊會を開きてバンヤ丼に其史員等を饗し、今朝出歩の途に上れり。

余等の護衛二人は、此日三頭の水牛丼に一頭の牝鹿を獲て歸る。

此四日間は、余等は亞弗利加に在りて實に比類少き愉快を覺えたり。氣候は少し暑き方なりしも、湖上よりの軟風は輕くして草木に至る迄も之を楽しむもの〳〵如く、夜は頗に冷氣を帯び來つて一層身心をして爽快を感ぜしむ。月は高峰の頂に上りて、空は一片の雲をも止めず、湖水は鏡面に水銀の海を現じて、微風之に加はり、漣漪月に踊つて百千のダイヤモンドを砕くの狀、殊に白沙數哩湖岸を噛むの所に於て奇なり。余等は靜閑を楽んで以て此風景に對す、何人も自然の妙味を感ぜざるものやあらん。去歳十二月に於ては敵と爲り、味方と爲り、非常の熱心を以て相殺傷せんとを勉めたるザンザーバル人も又土民等も等しく手を携へて以て、毎夜遲きに至る迄唱歌、舞踊の風流を學べり。

十九日に至り、バンヤに達する余等の道は三哩三分の一に過ぎず。此邊は平原にして唯雜草雜木を除

くに過ぎざれば、彼等の之を爲すは一の好遊戯なり。

二十日、余は余の倉庫に於て少しく銅色を帯びたる黄色の蛇二個を見出せしが、此種類は余等の始めて目撃せし所のものなり。

二十一日、バンヤは已に彼の六分備の川法を解知し、又更に「指日上」の訓練を見るとに熱せり。彼れは片呎にて且つ近呎なるを以て物を取り調ぶるに多少の困難あるにも拘はらず、熱心と注意とを以て之れに對するが故に、容易に成功を告ぐるに至りしなり。此日正午に於て余等は子午線の位置を計りしに、バンヤは呎の高さ五尺、一哩平の距離に於て、七十度五十四分四十秒なると、而して此中「指日上」の錯誤三分十五秒あるとを知れり。

二十二日午前九時頃、蒸船ケイダイブ丼にナイアンザの二艘、一艘の荷船を率きて到着、第二大隊の少佐、副官の下に、八十の兵士、丼にモートの種屬なる一百三十の人夫を上陸せしめたり。余等は他に十ギャロンの「クキ」と稱する酒類、丼に許多の密柑、水瓜、葱、六頭の羊、四頭の山羊、又余とドクター、バークとの飛用に供せん爲め、二頭の强健なる騾馬を贈られたり。ナイアンザ號は小形なるものにて長さ六十尺に幅十二尺なり。是に於て余は明後日を以て、再び後隊扶助遠征の旅に向つて、アルバルト、ナイアンザを出發するとに決せり。

余はパレヤの爲めにロエフソン氏を留むると爲し、又三人のメーダン人、ドクター、ウヤンカーの他僕なるビンザ并にマブルキを以て彼の手に托せり。荷物は已にパレヤに與へたる三十一箱の外に、更にウルンチエスターの彈藥二箱、四錨片を容れたる一箱、鋼鐵舟アドヴェンス號を數に遺し置くことせり。

パレヤの備めに從ひ、ロエフソンをして軍卒の前に則讃せしめんが爲に、余は左の文字を草せり—

軍卒諸子、余は今數月間、非常なる困難の旅行を通じて漸くナイアンザに達するとを得たり。余は埃及王ケイダイブ、チユーフィックの命令を帶びて、汝等を此地に扶助し、而して又汝等を埃及に送れ歸らんが爲に來りしものなり。已に汝等も知るが如く、エル、アビアッド河は遮斷せられ、カートームはモハメッド、アチメットの爲に蹂躪せられ、ゴルドン、パレヤ并に其人衆は盡く彼等の虐殺する所と爲り、ベルベー并にバー、ル、ギヤザー間の凡ての瀧船、小舟等は奪はれ、而して汝等に尤も近き埃及政府の屯營は數百哩を離る所のアダー、ハルフワゐるのみ。ケイダイブ并に汝等の友人は、汝等を救はんが爲に四度遠征隊を派出したり。第一はゴルドン、パレヤにして汝等を盡く家に送れ歸るの目的を以てカートームに赴きしもの、彼れは十箇月間の苦戰の後、カートームは陷り、彼れ并に彼等の人衆は慨ね該市内に於て敵人の爲に虐殺せられたり。次に英國の兵卒は、ロ

ールド、ウスレーの下に、ゴルドン、パレヤを救助せんとの目的を以て來りしが、彼等はカートームを去ると四日行程の所に於てゴルドン死去の凶報に接し、其儘にして止みたり。次に有名なる探檢家ドクター、レンツは、コンゴーの道に由て汝等の狀況を觀察せんが爲に出發せしが、彼れは其旅行に必要なる人衆を得る能はざるの故を以て歸れり。及ドクター、ウヤンカーの兄弟に由て送られたるドクター、フォフチヤーは、途上許多の敵對を蒙つて其歩を進むると能はず、止むを得ずして遂に其足を廻らすに及びぬ。

余は埃及政府并に汝等の友人等が、斯くの如く汝等の安否を思ふとを汝等に向つて知らしめんが爲に以上の事を記述せしなり。ケイダイブ并に彼れの主相メーバー、パレヤは遂も汝等の事を恐れず。彼等は、汝等がウガンダに於て如何に大勝に敵人に當り、如何に誠實に軍人たるの義務を盡ふせしかを知れり。此故に彼等は今余を汝等に送り、汝等に向つて彼等の厚意を傳へ、而して彼等は汝等に向つて、汝等が埃及に來る以上は、直に從來汝等に約したる俸給と、賞與とを與ふべきとを述べしむ。併し同時にケイダイブは汝等に傳へて曰く「汝等にして若し道遠く、旅行に困難なる爲めに此地に留まらんとを欲する以上は、彼れは最早や汝等を以て彼れの兵卒と爲さず、汝等の俸給も直に停止すべく、而して將來如何なる事ありとも、汝等は自ら其責に任ぜざるべからず」。汝等にして

埃及に歸るとを決する以上は、余は喜んで汝等をサンサーベルに導き、北れより流船に由てスエズに至り、而して直にカイロに向ふべし。汝等は彼處に於て必ず、數年來高まり來りたる工賃の俸給を受くるを得べく、又汝等の功勞と技倆とに鑑み、相當の賞與を受け、若くは職役に就くことを得べし。

余は余の皮圍の一人なるウエフンン氏を遣はし、余に代つて此事を汝等の前に讀ましむ。余は今余の人衆并に荷物の後に殘りたるものを集め來らんが爲に出發す。思ふに數月を出でずして再び茲に歸り、以て汝等の所存を問ふべし。若し汝等にして埃及に歸らんと欲せば、余は之れが橋渡を爲すべし。又汝等にして此地に留まらんことを決せば、余は直に汝等に暇を告げて、余の人衆を率ひて埃及に歸らんのみ。

上帝は汝等をして無事安全ならしむべし。

汝等の親友なる

ヘンリー、エム、スタンレー

五月二十三日滯在。

サンサーベル人は此夜留別の爲に舞踏を催ふしてバンヤ并に彼れの皮圍を慰せり。彼等は明朝出發して再び長途の遠征を爲すの、非常の困難なるべきことを知らざるに非らざれども、何れも皆丈夫の風采を缺ふて敢て怯惰の狀を見はすものなかりし。併し此旅行の爲に再びバンヤの顏を見ることはざるに至るもの又決して少ならざるべきなり。

二十四日、ベツワ村に至る迄、十哩の旅行を四時間に成し遂けたり。

此日挑曉エミン、パシヤは自ら余等の新道に沿ふて二哩許を進み、以て余等の行を送れり。セーダの人尖等も已に各其所を得ければ、前部は余營より出發し、以て道を西方に進む、時恰も午前六時十五分なり。半時間許を經て、余等はバシヤのソーダン兵一隊、路側に併列するの所に來る、彼等は余等の通道に對して敬禮を行ひ、バシヤは頻りに余等の厚意を謝して以て送別の袖を分てり。

新道の端に於て、二十一のセーダ人は、突然隊を離れて北方に逃げ去れり。依て余は此事をバンヤに通ぜんが爲め、歩をベツワに止めて、十四の使者をバンヤに送りしに、ベツワの村より一哩許の所に於て又更に他の紛擾を醸し、八十九のセーダ人は相率ひて隊を脫するに至れり。始め之が部將たるドクター、パークは紛擾の樣を見て彼等が叛逆を企てしものならんと思ひ銃を取つて一人を殺せしが、是れ或は許多の人衆をして逃散せしむるに至りしものならんか。凡て一百三十のセーダ人中殺るものは僅かに十九人を見るのみ。

余輩は此事を報知せんが爲に、パンヤに向つて第二回の使者を派出したり。

ウンサベの倉庫を離るゝと五哩許の所に於て、余は去月の山來事を考へながら、南東の方を打ち見やるの間に、余の目は、尤も美麗なる銀白色の雲を以て蔽へるが如き、一の高嶺を認めしに、同時に余の使僕は是れ雲を以て蔽へる山なりと言へり。次第に進むに從つて其地位愈よ明かなるに至りしが、見る所滿山雪を以て蔽ひしに過ならず。須臾にして余は其山の麓に當つて、一時に綠色を帶ぶるとを認めければ、山上のものは暴風雨を導き來るべき白雲なるべきとを推し、以て之れが心待を爲して進みしに、更に東西兩方の岡陵の間より、正面に彼の山を望むに及んで、其雪の如きものは全く雲に非らずして實林なるべきとを知り得たり。是れ則ち雪ならざるべからず、併し如何にして雪が此熱帶地方に斯く堆積するの理やわるべき。余は暫ばらく歩を止め、望遠鏡を取つて之を望み、又磁石を以て之れを檢するに、其中央の部分は二百十五度を示せり。余は昔てカバヤの土人よりして、此方位にルウエンゾリの連わり、滿山銀を以て蔽ふものなりとの事を聽きしが、此山は正しく是れならざるべからず。

此大なる山は、二時間の行程に於て絶へず明に之を認むるを得たり。然るに余輩高原の麓なるベツタに入るに及んで全林は岡陵の爲に隔てられて其形を失ふに至れり。

余は更に又使者をパンヤに送つて、此奇異なる現象を發見せしとを告げたり。是れ迄にペーカト。ヴエン。メンン幷にエミン、パンヤ等が此地を見物ひしに拘はらず、一人も之を發見するなかりしは又奇なりと言ふべし。

ヴエン、パンヤは最始にアルバルト湖を一週せる人にて、彼れは西岸より南岸に向ひ、其れより東岸に沿ふて以て北端に歸りしものなり。

メンン、ペーは第二の遍歴者にして、千八百七十七年に來り、ヴエン、パンヤの爲したる道に沿ひ、天文上の觀察に由つて此地位を明にすると勉めたり、個はヴエン、パンヤの爲す能はざる所のものなりしなり。

エミン、パンヤは是れより十一年を經て、余等の此地に來りしとを聽きて始めて北端より南端に航行せしもの。

已に此平原よりして彼の山を見得る以上は、湖上に於ては其眺望一層明かなるべきの理なり。ペーカーは此方位に向つて「晴天の時には一望眺限りなきの湖水を見るのみ」と言ひ、而して遂に彼の山を見ると得ざりしは如何なる故にや。

ヴエンゾン幷にパークの二氏は、鋼鐵舟をカバヤより運び來るに際し、余に報ずるに、彼等がウンヤ、

カバリの力に當て雪山を見し事を以てし、併せて斯かる熱帶地に能く雪を止むることを得べきや否やの事を問へり。余は此邊一帯の山々を見るに、其尤も高きものも海面を拔くこと五千五百尺に過ぎざるを以て、直に消極的の答を爲せしが、仲しレックターは頗りに、明らかに彼れが雪山を視しことを主張せり。依て余は更に辨明を爲し、熱帶地方に在つては一萬五千尺の高所に於てすらに非らざれば、水の結晶すべき理なきを示し、假令一時氣候の工合に由つて雪或は霰を降すことありとも須臾にして融け去るを以て、斯くの如きものは永く山頂を蔽ふに至るべからずと答へ、更にペンヲの倉營よりして、高原の頂を望みしが、ウンヤ、カバリ其他の方位に於ても、海面を拔くこと六千尺を越ゆるものは一も之れなかりし。

是等の事實に由て考ふるに、彼の山—則ち余の見積にて、七十哩許の距離ある彼の山は、特に空氣の傳導を見はせし場合に非らざれば、余等の視線に達せざるものなるべし。十哩乃至二十哩の間は、通常の氣候に於て識別し得べきも、此邊は全体に、假令天晴れ氣朗かなる時も、尚ほ許多の濕發氣を上騰せしむるを以て、三十哩の距離に至ては最早や肉眼の達し得べきに非らず。併し或る時に於ては風の工合にて其方位一体の霧を吹き拂ひ、以て彼の實体を示すに至るものと見えたり。余は他の例に於て、則ち去歳十二月余等がナイアンザより北東に向ふに際し、確に二個の併列せる峯あるを認め、之をウェアンン氏にも示し、又余が記錄に留めしことなるが、奇偶にも其後此地を通過すること二回に及びしも、又再び之を見ることを得ざりし。

此日午後、カバリの酋長は四百の人衆を率ひて余等の倉營に過り、エミン、バンヤの方に向つて進み行けり。是れ則ちカバ、ンガの襲來に向つてバンヤを護衛せんが爲に派出せるものなりと云ふ。カトンザ幷にナイアムサンの如きも同樣力を併する筈なり。

余は此日バンヤよりして左の書翰を受けたり、彼れは余等と共に在りしことを深く喜べりと云ふ、余等も又等しく彼れと共に愉快なる月日を分ちしことを喜ぶものなり。

千八百八十八年五月廿五日午後五時ウンサベの倉營に於て

スタンレー君足下、余は實に部下のセーデ人が隊中より逃散せしことを聞きて驚き且つ悲めり。余は直に四方に向つて觀察隊を派遣せしが、其功を奏する能はず、サクリ、アヤヤは一隊を以てカハナヤの方に赴きしも、未だ歸らず。

恰もドクター、パークの來りし時、余の船ムスタの屯營より到着し、ダッフルより更に一百二十の人夫を率ひ來りしことを告げたり。依て余は直に流船ティディブ號を遣りて彼等を迎へしめたれば、今夜の中に歸り來るべし。さすれば余は是等を部下の兵士に擁護せしめて以て速に足下の前に致さ

んとを勉むべし。

足下が途上に於て聖山を發見せると、是れ實に靴致すべきの事なり。以て余等が將來ゞ井タトリア湖の方に移るべき好機の前徴と爲すべし。余は今明日を期し、足下の賜なる此一大發見を賜盃せんが爲に出發せん。

余は君の厚意に對して、將來永く君が爲に盡すことを怠たらざるべし。余は永く光榮と喜悅とを以て過去十數日の間君と共に談を交へしことを記憶すべきなり。

足下の親實なる

ドクター、エム、エミン

千八百八十八年五月二十六日午前二時三十分ウンザベの倉營に於て

スタンレー君足下、足下の尤も愉快なる書翰は、足下の部下に由て正しく余の手に達せり。恰も此時に於て蒸船ケイダイブは歸り來りしが、其人夫は僅に八十二に過ぎず、他はタンガル丼にムスタ間の道に於て逃亡せりと言へり。余は由て、止むを得ず、此の人員を卸するに一人の士官、二十五の軍卒を以てせしめ、聊か足下の用に供せんことを図む。彼等の武器は一同集めて之を士官に托し置きたれば、足下は彼れの手よりして之を受取られよ。余は昨日に至り、足下の許より逃散したるゼーグ人等は一同ムガンガの方に赴き、村人に向つて、余の命を受けて來りしものなりと告げたりとの事を知れり。

君の厚意を以て送り越されたる十人のものは、人夫を伴ひ、カベッ丼に其部下と共に來着せり。昨日カベ、レガの部將なるクビ、ドンゴの斥候を、カトンザの倉營に於て捕へしを以て、余は彼れをしてクビ、ドンゴに意を傳へ、其地位を退くべきことを以てせしに、彼れは之に從へり。依て余はカベッに說き勸めて、此際に於て彼れと紛擾を釀すに至らざらんことを求め、更にクビ、ドンゴに向つて是非とも足下に面謁すべきことを說せしに、彼れも直に同意を爲し、或る贈り物を携へて今此使者と共に出發することに決せり。彼れは又余に需むるに、願くは足下の人を以て、當時ツウヒッと共に留る所の、彼れの兄弟なるカドンゴを補め來らんことを図むと言へり。

余は聖山の摸樣を種々の方位より視察せんことを期す。足下が之を發見せしの事實は遠からずして全世界に知らるゝに至るべし。

余は再び足下が余の爲に盡されたる、一樣ならざるの厚意に向つて感謝す。又余は深く足下が、余との交際上に於て忍耐と許容を旨とせしの廣量を欣慕す。余は今君に對し、適當の言辭を以て余の

意見を述ぶると能はず、亞弗利加に棲むの久しき、已に熟に、余の心は熱人の如くに遲鈍のものと爲れり。

上帝は足下の道を急がしめ、足下の事業を助くべきなり。

足下の光も眩實なる

ドクター、エム、エミン

二十五、二十六の兩日はイツワに滯在。

カペッ等はパシャを助けてウンヨロに當らんとを謀みしが、パシャは之を爲すとを好まざりしにや、彼等をして各々其土に就かしめたり。

午後に至り、パシャはパンダ、ヒルの村より山を下り來り、私かに、彼の驍勇を以て聞えたるカドンゴ并にムシッ等、彼等の兵卒を召集し、カビラ并にマザンボーの間に於て余等を襲撃せんとを圖り居るとの旨を告げたり。余等は彼等が敵人より厚意を受けしと言ふの外は、彼等よりして敢て襲撃を受くべき理あるものに非らず。余は僅か一百十一挺の施條銃に、十箱の彈藥を有するに過ぎず、之を以て是非とも一百二十五哩の距離あるボドー地方に達せざるべからず。若し彼等にして、平野に在り、十分の準備を爲して余等を襲ひ來らんには、忽ちに、余等は如何ともする能はざるの境遇に迫るべし。

是に由て此行余は他の計策を選らさいるべからず、カーライルの如きも、必要は能く爲すべきとを命ず、之れを知つて之れに乘ずるは則ち策の上なるものなりと言へり。余は今止むを得ざるの策を執らざるべからざるの必要に會せり。依て余は今先んじて之を制するの道に出で、第一にカドンゴを打ち、其れより直に進んでムシッに向ひ、以て五の運命を決すべき事と爲せり。大膽なる挙動は恐くは彼等をして一驚を喫せしむるに足るべきか。

パシャは尤も敏捷の所爲に出で、八十二の人夫は強固なる掩護の下に、正午に於て來着し、而して兵卒の中三人は旅行を通じて余等に從ふべきの旨を誓ひ來れり。是に於て余等は方法を定め、各ザンゾーバル人をして各モーデ人を掩護せしむるとと爲しぬ。

午後三時に至り、余等は燒くが如きの大陽に向つて嶮岐なる坂路を上り、午後六時三十分、則ち日沒後半時間許にして、頂上なるパンダの倉營に達せり。

倉營の周圍には嚴重に警兵を配置し、更に余は四十の强勇なるものを撰拔して二重圍の下に樹がはしめ、彼等をして夜に於てカドンゴの倉營を襲撃せしめんとを圖れり。時に數人の土人等は進み出て、自ら之れが嚮導を爲すべしと言へり。

半夜一時に至て準備調ひ、彼等は共に目的に向て出發せり。

二十七日朝八時に於て彼等は歸り來り、其成功の狀を告げたり。酋長カドンゴは逃げながら「我れは敵には非らず、アラ、マタヤの友人なり」と呼びしとか。茲には家畜等の戰勝者を勞ふべきものとてはなかりし、蓋しカドンゴが一時の滯在に宛てしものに過ぎざりければなり。

余等は各荷物を肩にしてガビラの方に向つて進行を爲せり。余等の出發するや、間もなく、前方より巨多の人數の進み來るを得る。四先に一人の人ありて之れを指揮し、其が赤色の旅は、遠隔の距離に於て、ザンバール若しくは埃及の旅かと疑はるゝばかり。余等は暫らく歩を止めて其何物の軍勢なるやを檢せしに、須臾にして彼れはマザンボニの兄弟なるカトーにして、其軍勢は則ち余等を歓迎せんが爲に來りしものなるとを知れり。余等は彼等が速に此事を知りて茲に至りしとを喜ぶ、併し若し彼の赤色の旅にして余等の眼に止まらざりしならんには、余等は之を以てムンリの余等に對する軍勢と爲し、直に戰端を開くに至りしやも知るべからず。

彼等の中數人をして余等と共に止まらしめ、余はカトーに命じ、速に書をマザンボニに傳へて、ムンリの軍勢、余等を襲撃せんとの企謀を爲せし由なれば、マザンボニは余等に應援を爲さんが爲め、明日を期し、部下の人衆を率ゐて來會すべきとを以てせしむ。事急なり、余は遠隔の距離に於て彼れ果して能く之を爲し得べきかを氣遣ひしが、カトーは之れを諾して去れり。此時に於て余等はガビラの村より六哩の所に在り、而してマザンボニは其れより更に十三哩なれば、ガビラの村にて會合するとするも、カトー等は往復二十六哩の旅行を爲し、且つ許多の人衆を集め來らざるを得ず、又此人衆に向つて數日間の糧食を供へざるを得ず、之れを今明日の間に爲し遂げんとは決して容易の業に非るなり。

余等は正午頃にガビラの部落に達せり。茲に余は又ガビラをして余の軍に結合せしめんことを命ぜしに、彼れは直に承諾の書を以て答へたり。

二十八日は滯在す。余等は四方よりして許多の糧食を贈與せられたり、現在余等の人員は左の如し—

ザンバール人	百十一人
白人	三人
料理人并に使僕	六人
セーブ人	百卷一人
合計	二百廿四人

此他に土人の義勇隊又五六十を以て數ふべし。

日没後一時間を經て、マザンボニは約の如く、弓と槍とを以て鎧ふたる一千の兵士を率ゐて來れり、一同はガビラとムレリの境界なる茅畝の中に會集せり。

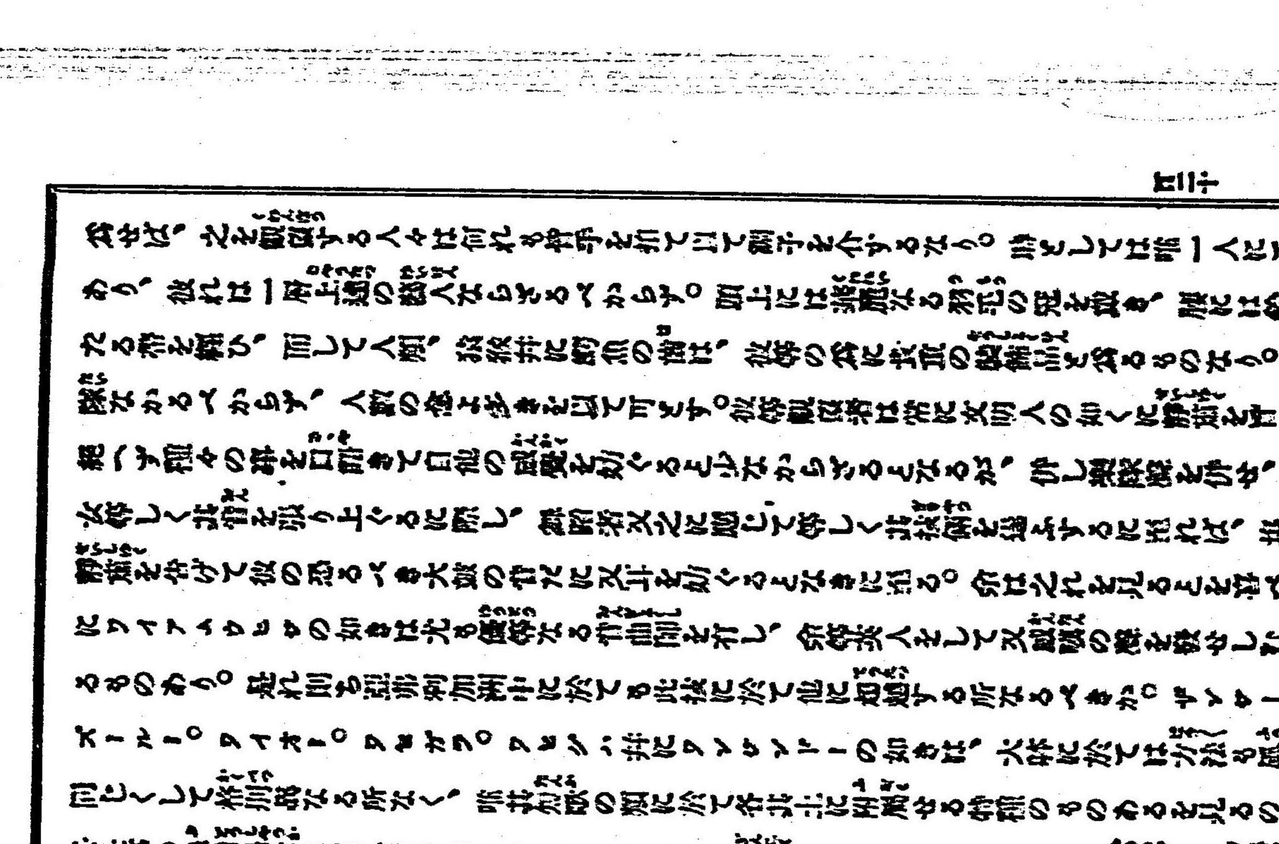
五月二十九日午前三時、余等は月光に乘じて道を北西に取り、ウレリの方に向つて出發せり。マザンボニの隊中、强勇を以て任ずるもの一百人、余等の先鋒を爲し、他は皆後部を構成す。ガビラの軍勢五百人、又來つて後部に接せり。余は人衆を戒め、目的に對して沈靜を旨とせしむ。

午前六時に於て、余等はウレリの境に達し、須臾にして余は各部將に向つて方針を示せり。ドタボー、バークは六十の施條銃を以て中堅を構成し、カトーはマザンボニの勇士を率ゐて左翼を形造り、又ムビンガ幷にガビラの隊をして右翼を張らしめ、以て後驅軍は一同其歩を早むるに至れり。

結果は實に笑ふべき事共なりし。ムビンガの牧畜は事をムレリの牧畜に告げ、マザンボニの牧畜も同じく、其秘屬を共にする所のムレリの牧畜に告げ、斯くて彼等は已に間道に由つて殘らず家畜を、ガビラ幷にマザンボニの方に送り、又其酋長の如きも、余等が恰も同盟軍を迎むるの朝に於て、早く此事を探知し、カドンゴの失敗を聽きしの餘、斯かる大軍に對して到底敵し難きを悟りけん、私かに人衆を集め、部落を捨つて立ち去れり。故に土地は殆ど空虛にして人もなく、家畜もなく、鶏類だに見出す能はざりしが、唯穀倉は尚ほ穀物を以て滿たし、畝地は馬鈴薯、豆類、唐黍、野菜幷に烟草等を以て滿へり。余は徒に過大の準備を爲せしことを悔ひしにも拘はらず、私かに血を流すに至らずして事の止みたるを喜べり。余の目的は遂せしなり。余は火に彈丸の欠乏を恐れしが、幸に一丸を放つに及ばずして道は全く開通するに至れり。マザンボニ幷にガビラは非に「張合」を失ひしが如き有様なりしが、此結果は必竟彼等の爲にも幸福なりしに相違なし。

此村の小屋の中に於て一個の銃身幷に銃機を見出せしが、此銃機には「サロン、ククイプ第三、五百三十」の文字を鑄たり。是れ此地の人衆が一年前に、カパ、レガと戰ひし際、奪ひ取つて保存し置きたるものなりと言へり。

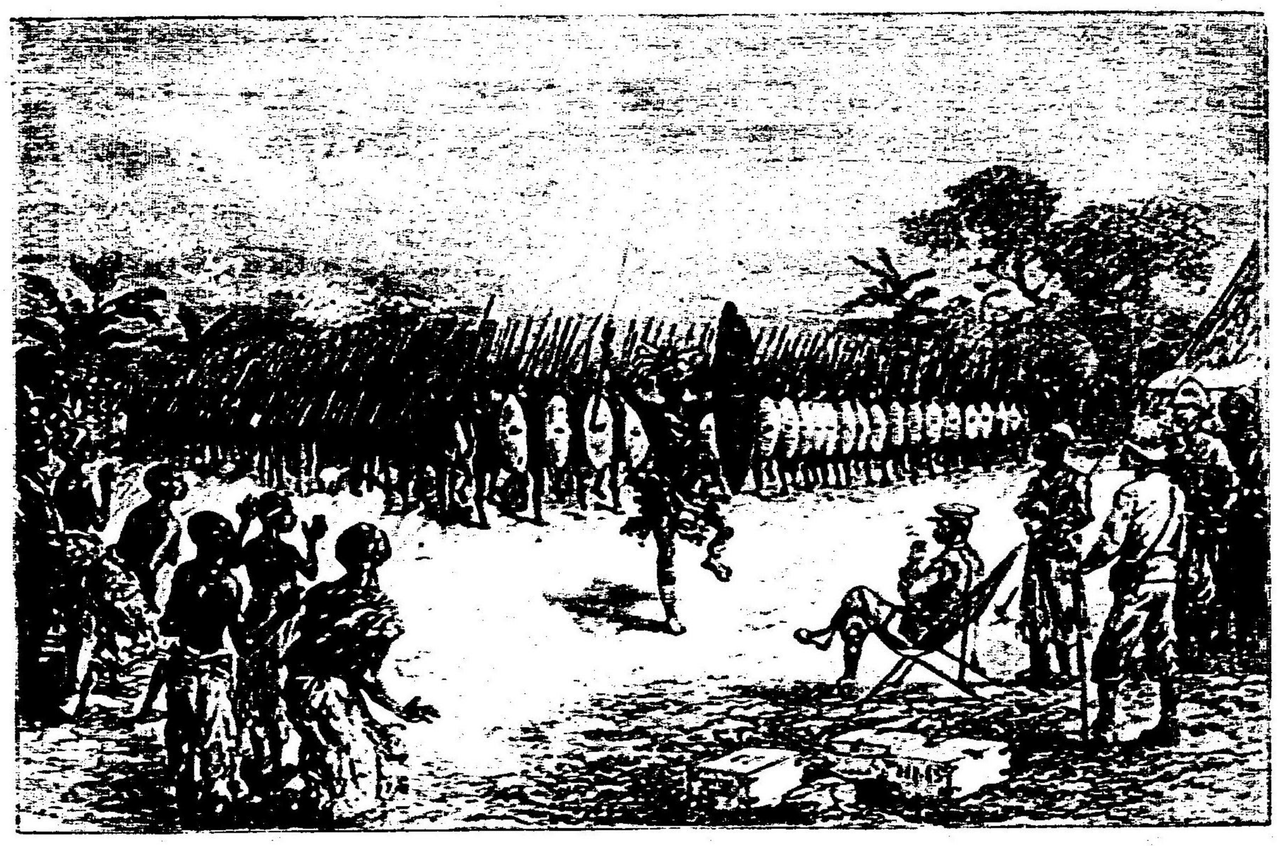
午後に於て、マザンボニの勇士一千人は、余等がムレリに對し、戰はずして勝を占めしの果を祝せんが爲に、方陣踊を催ふせり。亞弗利加の舞踊は多くは是れ、手兒き滑稽、激烈なる身振を爲し、或は飛び廻はり、或は身体を屈折して以て大敵に應ずるを常とす。唱歌の調は高くして寧ろ、怒鳴るが如く、人衆の笑聲は荒らくして寧ろ、叫號するに似たる程なるが、彼等が之れを見て以て樂むの狀は恰も文明人士が彼の指頭琴、轉々踊等に對するに劣ならず。彼等の將に踊を始めんとするや、人衆等は一同半圓形に集合し、大鼓の音に乘じて此中より二人の戦人飛び出で、戦槍の歌を歌ひながら踊を



マデソキニ勇士の方陣

代は、之を留守する人々は何れも年手を折て以て到着を待つなり。時としては能く人に勝るとあり、彼れは一年半頃の後人ならざるべからず。面上には清潔なる彩色の足を設け、腰には給を巻かたる布を纏ひ、四人一組、後後共に約束の地は、彼等の食に我国の蕎麦に似て食するものなり。勿論彼が既に知るべからず、人数の多きを以て可とす。彼等獣皮布は能く人の如くに動物を生じかず、果て予種々の詩を口唱きて口祝の歌を初めることなるべからざるべし、仮し乗船を作り、遠近所水等しく共に成り上らるに際し、最新新文之に関して等しく共に祝賀を捧ずるに出れば、共に口ら酔を作りて彼の恐るべき大敵の有に対抗を初めることなきに出る。余は之れを見ることなれり、然にワイアイウヒの知るは光も遠く大なる有に同を有し、余等来人をして文明開の意を教ゆしむるに足るものなり。彼れ回を冠所利加洲に於ても此様に於て他に如何する所なるべきか。サンタ一ベルヒー。タイホー。タヌカ。タヌ、共にタンタンドーの知るは、大体に於ては少なく彼等も利同じくして彼川略なる所なり、所共知識の類に於て各共に相異なる物種のものなるを見るのみ。凡て彼等の義勇は所二様の所に心を用ゐ、非常に敏捷なる一彼等の体にて以て防禦なる義勇と称す所のものを故なるに出れば、回ら非常に必要なる義勇の状を示すに過ぎず。彼れ武勇人の性質に自つて尤も強く頑強を成すものなるに出るなるべきか。シルクトリア洲に於てタンタンが。タヌカ

彼等は、之を獲たるべき人々は何れも軍手を拾て以て剛手を今ならん。時としては唯一人にて無ることあり、彼れは一年中の最も人なきときなり。頃上には無数なる鳥の足を載せ、腰には鉛を充たせる袋を帯び、而して人頭、故殺共に酋長の徴は、彼等の我に武器の徴証と為るものなり。別論彼隊なかりせば、人数の多きを以て可しとす。彼等獣類等は常に文明人の如くに敵を甚しとせず、絶へず相々の非を口説きて口他の敵を効へることなからんとするが、仮し敵隊を作り、更幼別次第しく戦を渡り上ゝるに際し、蓋敵者又之に倣ひ、次第しく戦を渡りするに至れば、故に口ら敵を作りて彼の恐るべき大敵の前に文明を効へることなきに到る。余は之れを見ることなく、殊に「アイ、ウ」の如きは尤も優等なる戦争を行し、余等人をして文明人の敵を使しむるに止るものあり。是れ国を滅亡利用計に於ても此様に於て他に超越する所なるべきか。サンターズ。スール。タイオー。タルガ。クルー、非にクントーの如きは、次第に於ては少なく無数なる利用しくして終に滅亡する所なり、唯北海の頃に於て各共土に用ゆる物品のものあるを以るのみ。凡て彼等の敵対は唯二様の計に心を用る、非常に敵対なる一般の行じて以て所謂なる外国と為す所のものを頃するに非れば、国を非常に敵対なる敵の恐を示すに過ぎず。是れ酋長の性に回つて尤も多く頃を或るものなるに出るなるべきか。シカゴ、ツ、ア、ル、ボ、ル、ニ、ア、ク、ス、カ。タ、ン、ダ。タ、ム、ム



マデンゴ＝勇士の方陣

エレ等の種族は一層沈静なるものを好み、其有様は幾分か東洋風の趣あるに似たり。余は從來數々是等の舞踊を見しも、意を止むるに足るべきものは唯ワンヤムサンのものゝみなりしが、今此マザンボの舞踊を見るに及んで更に壯快なるものあるを覺えたり。彼の酋長の兄弟なるカトーは則ち此方陣踊の主人公なりし。大鼓の數は大小併せて凡そ十個許り、十人の熟練なる手に由て、久しくの間打ち續けしが、其樂は確かに一唱四方に逸するを得べきなり。此間カトー幷に彼れの從弟なるカレンゲは壮麗なる白色鶴の羽毛を以て其頭を飾ひ、三十三人宛を三十三列に列せしめ、各人をして嚴正なる方形の地位を保たしむ。是等人數の多數は唯一筋の槍を持ちしが、中には雙手に二筋を持ち、更に首より背に掛けて盾、箭等を負ふものも是れありし。是れ彼等が凡ての軍裝を示す所以のものなるべし。」方陣は其列を正たし、槍を手にして以て大鼓よりの合圖を待ちしが、カトーの大にして朗かなる聲、茲に勇しき戰勝の歌を歌ふて其時に佳境に入らんとするや、千餘の槍手は等しく其槍を上げたり。個々彼等の頭の上に輝きて、恰も朝の林に、月の映ずるが如く然り。數十の樂隊は之れに應じて樂を奏せり、此時方陣は前方に進み出づるよと見しが、地鳴り、樹動き、一大地震の起りしが如き感あり、其等よ彼等は彼等が進行の際、力を極めて土を踏み付け、二千の强足等しく六寸許の距離を計つて歩を移すよ故、四方數十ヤードの間は地も爲に踊らんばかりの勢を呈せり。彼等が見をも取り拉しがん

とするの足並と容貌とを以て次第に迫み來るの間に、唱歌の聲は或は高く、或は低く、怒波の海面を沙るにも似て、而して之に應じて千餘の槍或は隱れ、或は見はるゝの樣は、時に銅鐵の林に對するが如し。千餘の人は等しく足並を揃へたり、其槍を振ふに際し、身軀を屈折するに際し、七十圍の重さあるべき一隊、其足を地上に陷み落くるに際し、其樣一樣にして亳も調子を失ふもの之れあるなし。此千餘の頭は忽にして上り、忽にして下る、其上るや恰も干軍を叱するが如く、其下るや、一時に屈して更に氣力を奮ふものなるに似たり。彼等が頭を背にし、顏を空にして其滿腔の聲を張り上るや、其勇氣は天をも呑まんずるの有樣を示し、聽く人、見る人をして思はず又之に感じて心を決する所あらしむ。彼等の眼は時に一層の怒火を含み、其右腕は何れも振りつめたる槍を取つて、高く之を突出せば、大蛇の群は之を助けて其餘恰も空間を貫ぬかんばかりなり。然れども彼等が徐ろに此勢を收めて、一同頭を伏するの時に當てや、戰爭の害毒、苦痛、寡婦の涙、孤兒の叫を思ふものゝ如く、天地は寂寞として蛙聲、唱聲又沈靜に歸し、共に興に荒廢慘憺の狀を嘆ずるものゝ如し。已にして一隊は又其列を正せり。爲すべきとは飽く迄も爲さゞるべからずとの意氣を以て、落膽阻喪の念を一掃し、毛冠は直立し、其鄙迫、突擊を爲すの間には風に靡きて一層の光彩を添へ、遂に恰も其目的を全ふして、一同勢よく凱歌を奏するに至る。

凱歌を續けて彼等は一同、余の占め居たる椅子に近寄り來り、而して前列は一樣に彼等の槍を下げて地上に迫て、三度頭を下げて伏拜を爲し、須臾にして第二列來り、又第三列來り、此時前列は已に隊を破りて彈放し、第二列之に從ひ、第三列又之に從ふて順次に槍を振り、聲を擧げて彼方に向ふ。忽ち見る場內は三重の渦線を爲して人衆の馳せ廻るとを。其樣は更に新奇の依觀を添へたり。此時プリンス、カトーは中央の小高き所に見はれ出で、以て其處を占むるに至りしに、人衆は次第に其步を止めて、忽ちにして圓形の列を作れり。已にして彼等は又元の形に歸るとを命ぜられ、三十三の人各相携へて以て一列二列と爲り、一半は一面より來り、一半は他の側より來つて以て方陣を作るの狀、其敏捷にして整頓せるとに實に稱賛するに餘あり。此間彼等は尙は其歌を續け、自他悠悠として相去來し、而して遂も其列を亂すとあらざるなり。斯くの如くして彼等の方陣師は終を告げたり。是れ恐く亞弗利加に於ける尤も壯快なる餘興の一にして、他の文明國に於ても又容易に見る能はざるの非なるべし。

五月三十日、三時間の旅行を以てウンセク、カムの間に達せり。

ザンザーバル人は此岡を呼んでチョンゴーと名付けたり。是れ去歲以來、余等の數々會遇せし所にして、又其出來事の故を以て永く余等の記憶に存すべきものなり。ザンボは今回の戰備に於て益せ

る所少からず、途上幾多の家畜はムレッの方より移り來りしとを見聞けたり。須臾にして余等は一面の草原に數百の家畜、余等の通行にも意を止めずして繁草を噛むものあるの所に來りしに、ザンザーバル人は馳りに之を捷んとを欲して飛び立ち始めたり。依て余はマザンボニに對し、ムレッより移り來りたる是等の家畜は如何に處分すべきものなりやと問ひしに、彼れは卒直に之れに答へて、個はワヒニマと名づくる一種の牧畜族に屬するものにて、去歳マザンボニが余等と戰爭を爲せし時、相率ひて彼の地に去り、彼の地今回の擧あるを聞くに及んで又此地に歸り來りしものなれば、今敢て之を劫ぐるに忍びず、との事、依て余はザンザーバル人を制止して直に其歩を進めぬ。

三十一日滞在。マザンボニは余等に三頭の牡牛を與へ、酋多の馬鈴薯、芭蕉の實の外に、二日間の糧食に足るべき粉類を人衆に供給せり。周圍に散在せる各部落の小酋長等、相携へて余等の倉庫に來り、山羊、雞、粟粉等を贈る。ウクマンジワ。ブウエサ幷にガンダ等又曾余等と交誼を結ぶに至りしが、是等の村は則ち去歳十二月に於て、其繁榮と勢餌との爲に、余等をして一驚を喫せしめしの所なり。」

夜に入りて、余はムレッよりの書翰に接せり。彼れは凡ての部落曾余と交誼を結ぶに至りしを以て、彼れも又之を爲さんとを願み、次回に余の再び歸り來るの時には相當の贈物を供へて余等を迎ふべしと言へり。

余は今少閑を得たるを以てエミン、バレヤに關し、知る所、聞きし所を記述せんとを決せり。

第十七章　エミン、パシヤの人と爲り

エミン、パシヤの年齡并に其幼時○ゴルドン并にエミン、パシヤの給料○一千八百七十七年に於けるゴルドン、パシヤとの最後の接見○彈藥并に糧食に就てエミンが最後の供給○五年間の孤立○ウガンダに於けるマケイの宣教館○彼れの地位に對するエミンの才能并に技倆○彼れの語學并に其他の智識○エミンの勤勉○彼れの立派なる日記○エミンがキダよりムスリに逃れたる事に關してシャクヰ、アギヤの話○エミン此話を確む○エミンが余に告げたる博物學上の事實○パシヤ并にデンカ種屬○獅子の話○エミン并に鳥類の研究。

余は今玆に、エミン、パシヤの傳を記述せんと欲するものに非らず、唯余が彼れと共に湖畔に止まりし間、時々彼れの口より聽きし所のもの、則ち彼れが今日の境遇に立つに至りし所以に就て、又彼れと、我が有名なる、而も不幸なる勇將ゴルドンとの關係等に就て一二記述する所あらんと欲するなり。」

彼れは獨逸に於て產れたるものなれども、其父母は獨人なりとも言ひ、又猶人なりと言ふものもありて詳ならず。又彼れの產れたる村落等に就ても余は今之れを知ることを得ず。彼れは今年四十八歲なりと言ふ、さすれば千八百四十年に生れたるものなり。彼れのコンスタンチノープルに移りしは極めて幼少の時ならざるべからず、而して或る有力家は彼れを助けて醫學を研究せしめ、其力に依て以て土耳其政府の用ゆる所と爲り、イスメール、ハキ、パシヤの侍醫を務めたり。彼れにして自ら明言せる

が如く、三十年間埃及政府の下に在りしものとすれば、彼れが土耳其に在つて職に就きしは千八百五十八年の頃にして、其年齡は十八歲未滿なりしならん。時に彼れは、土耳其に於て改革黨を以て自ら任ずる「ロンゲ、トルコ」の主義を贊助し、之れが機關新聞に向つて激烈なる論說を寄することを勉めしが、該新聞は政府の忌諱に觸れて三度發行停止を命せられ、其の最後の場合に於て、彼れは國內より放逐せられたり。

彼れは又、彼れがコンスタンチノープルに在るの時、ソルタン、アブダル、アヂツの殺害せられしとを知りしが、其嫌疑者の審問を受くるに及んでは、已に彼處には居らざりしと言へり。千八百七十五年十二月に於て、彼れは埃及に來り、直に其政府の下に職に就くことを得て、カートームに向ひしなり。

、、、、、、、、、、、、、、、、

「ゴルドンは最初に、余を外科醫として一箇月二十五磅の給料を以て雇ひ上げたり。次で彼れは余の給料を上げて三十磅と爲し、而して余のウガンダに使して歸り來るや、彼れは兩个余に支拂ふに四十磅を以てすべきとを條へ、遂に此地方の州令に任せらるゝに及んで、余は他の州令と同じく五十磅の月俸を受くるに至れり。武將の地位は幾許の給料を受くるものなるや、余は知らざりしも、余は今唯、

一の行政長に過ぎざるを以て、職に在るの間は給料を受くるを得べきも之を止むれば直に無給俸となると故、余は成るべく兵事上の地位を占めて其地位を堅固にせんとを図めり」。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

「斯くてゴルドンはカートームに於ける領邦の副領事を余の代理人と定め、以て數月の間余の給料を彼れに渡せしが、併し余は来た自ら此事を知らざりしなり。然るに其後に至り、ゴルドンは又彼れを扱擁してダルフオーアの州令と爲せしに、須臾にして彼れは死去するに及べり。依て彼れの遺産を集め、諸種の支拂を爲し、殘る所は至て少額なりければ、中五百磅を彼れの妻に與へてカイロに歸らしめ、而して余の分前は、其重なる債主として五十磅を送り越せり。是れより數月を經てカートームは陥り、ゴルドンも死せしかば、此間余の俸給は如何なり行きしや知ると能はず。故に余は爾後八年間に渉つて毫も給料を埃及政府より受取りしことなきなり」。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

「余がゴルドン、パシャに對する最後の面會は千八百七十七年なりし。此以前に二個の遠征隊—則ち一は大佐ブラウトの下に、他は同じくベルデー、メンソンの下に、探檢事業に向つて、遠征隊をダルソオーアに派遣せられたる事ありしが、ゴルドンがソーダン全州の總督と爲りし時に、彼れは、カイロなるストーン、パシャに向つて、イクエトリアの諸州に探檢を爲さしめんが爲に、是等の士員を派遣せられたき旨を要求したり。サエド、パシャは已にアルバルト湖を一週したれども、彼れの觀察は唯羅針盤のみに由て爲せしものなり。ブラウト、ベーも、メンソン、ベーも共に是等の事業に練熟せるものなるが、先づ到着せしはブラウト、ベーなり。彼れはクドーよりフユラロに來り、其れよりムルダ。ヴ并クトリア、ナイルを經て、マシンゴに出で、アルベルト、ナイアンザに到着したりしが、不幸にも、間もなく病に罹り、クドーなる余の屯營に於て熱病を加へざるを得ざるに至れり。恰も此時に當つてメンソン、ベーは汽船を以て、アルベルト湖を吟味せんが爲に來る。余は此汽船に依て、直にカートームに至り、其れより紅海の海岸なるマソワの州令たるべきの命を受けたり。其地、從來の州令と佛國領事との間に交渉を生じ、少しく自他の間に誤解を生ぜしとありしに、佛國領事は埃及政府に對し、若し將來此土の州令を任用せんと欲せば成るべく佛國を了解するものを以て充てられたしとの事を請求するに至り、ゴルドンは余が嘗て佛國に熟するとを知り居たるを以て、偖ては余を任用するに至りしものなるべし。

斯くて余のカートームに達するや、ゴルドンは厚意と熱情とを以て余を迎へられ、彼れと共に住み、彼れと共に食せんとを請めらる、斯くの如きは彼れに在つて實に特別の事にて、彼れは容易に他人を

招待して食卓を共にすることを為さゞりし。併し余は彼れの官宅に於て住むとは辭退し、朝飯を除くの外、晝飯と晩餐とは彼れと共に之れを食することゝ為せり。彼れは余の此行に向つて托する所あらんが為に、埃及政府の上將等并に各地方の下將等に與ふべき書翰、ゴンドコロの諸教々會に宛つる書翰、羅馬法皇への書翰、タイダイブへの書状等を、イタリアン。ジャーマン。并にアラビックを以て認めたり。斯の如くして暫らく止まるの間に、彼れは遂に要用ありとて余を派してウンヨロに使者たらしむ。依て余は之れに從ひ、直に河を上るに至りしが、是れ即ちゴルドンに對する一生の別れなりしなり」。

、、、、、、、、、、、、、、、

「千八百八十二年六月に至り、アブダル、タイダー、パシャは、余に書を送つて、彼れは二箇月内に彈藥と糧食とを供へて、余に蒸滊船を送り越すべき旨を傳へられしが、是れより九箇月を經て、則ち千八百八十三年三月に至り、余は僅かに十五箱の彈藥を受け取りしのみ。是れ則ち余が受けたる最後の供給にして、爾來千八百八十八年四月、君の到着に至る迄、都合五箇年の間、毫も外界との交通を得ざりしなり」。

、、、、、、、、、、、、、、、

「余が此地に在るの間、余は敢て徒に歳月を送りしものに非らず。余は余の領内の事に向つて心を傾け、是等を處理するの間に僅に快樂を覺ゆるを得たり。然れども文明世界よりして全く其道を杜絶せられたることは、余をして時に生存の價値なきを思はしめ、為に月より歳に渉つて終始晴るゝことなき陰天の下に住むの心地を為せり。余にして若し二月目なり三月目なり、定時に、文明世界との交信を為すを得、又書物、雜誌、新聞等を得るの便ありたらんには、安んじて此地に斯生を終ふるを得べし。余は常にウガンダに於ける宣教師等を羨む、彼等は月々に、書状、新聞并に書冊等を英國より受取ることを得るなり。現にマケイ氏の如きは彼の地に於て大なる書籍部を有せりとぞ傳ふ。余が君に送りたる彼の「ハチー、ドユー」の如き、則ち彼れの手より得たるものなり。余は又彼れよりして少許の酒類、衣服類、紙類并にスペクテーター。タイムス等を請取れり。余は實に之を得て何よりの愉快と為す。併し斯く他人の書物を假るゝのみにては意の如くならざるものあるを如何にせん。則ち余は此種の書物を見んことを欲するも見ること能はず、此事を通信せんと欲するも通信すること能はず又一々是等を以て他人に委托せんとは此地に於て為し得べきに非らず。此故に余は是非とも自ら自己の通路を開かんとを期せしが、而も又實際容易に行はるべきに非らず。嗚呼此八年間の蟄居思ひ出すだに恐ろしき事なりし」。

余は已に彼れの年齢と人と爲りとに關し、又其會話よりして觀察し得たる彼れの性質の一斑を示せり。

彼れの技倆と能力と、又彼れが彼れの地位に對する適不適は、能く彼れが久しきに渉つて彼れの人衆を制御し來り、是等をして亞弗利加内地に比類なき生活を爲さしめ來りしの結果を以て證すべきなり。

彼れが余等に與へたる物品中には、彼れが部下に由て織られたる、粗なれども而も丈夫なる木綿あり、帆あり、上靴あり、彼れの汽船并に小舟は久しきの間、使用し來りたるものなるにも拘はらず、今尚は破損を告げし所あらず、其機關に用ゆる油の如きも彼れの發明に由つて供給を欠かず、空氣の流通は至て好くして、其船内の清潔なると實に驚くべき程のものあり。彼れの諸屯營は秩序を以て一貫し、彼れの人民等は年に二回の貢租を怠ることなく、以て今日に至りしもの、凡て皆彼れの人と爲りを知るに足るべし。彼れは疑もなく、亞弗利加事業の途に於て他に比類稀れなるの技倆と能力とを有するもの、ナイルよりコンゴーに渉り、文明の光輝を、野蠻の境界に輝かさんことを勉めたるもの丶中、余の知る所に由れば、彼れと相並ぶに足るべきものは實に唯、一二あるのみ。彼れは其學問に於て、皆に數個國の言語に熟達するのみならず、彼れは博物學者、植物學者なり。而して特に外科術は彼れの本職とせし所のものにて、三十年間斯の如き地に、冒險の事業を取りしの經驗は更に彼れをして是れに熟達せしむるに至りしものあらん。彼れの英語は殆ど自由にして且つ高尚に、毫も卑俗の言辭を用ゆることなく、而して其發音は外音を存する所あるにも拘はらず、其言ふ所は尤も愉快の響を放つ。

彼れは五年間全く外界より閉鎖されたりと稱すと雖ども、時々新聞雜誌を見るの便あるが爲にや、一々世上の出來事を知悉して又正當の見解を附することを忘れず。彼れの擧動は高潔にして風雅に、恐く中央亞弗利加には不相應の觀あれども、州介としては尤も適當の風采にして自から他の尊敬を受くるに足るものあり。

彼れは尤も勤勉の人なり、其の事に當るに忍耐を以てして而して他人の爲に其勞を厭はざることは、以て廣く世の模範と爲すに足る。彼れ會餐を爲すや、第一に室内の諸物を秩序的に整ふるを以て常とす。テーブルと椅子とは各其場所を占め、日記簿は必ずテーブルの上に在り、晴雨計と寒暖計とは必ず其所を失ふことなし。記録は正確の文字を以て之れを認め、精密細小にして一も書き損じたる所あるなく、恰も書法の試驗に應じて及第を望むもの丶認めたるものなるに似たり。元來獨逸人は是等の點に注意するもの多く、余の知る所のものは概ね其觀察に富んで書法に明かなるものなり。然るに英語を用ゆる旅人等は之に反して、多くは其記録を認むるに粗雜の文字を以てし、之れを出版せんとするに際しては二重の手數を要し、或は活字工をして一方ならざるの煩勞を覺えしむるなり。

以下の事實はエミン、パシャがカートームより遣斷せられて後、五箇年の禍居間に於て起りたる一珍事なりしなり。

ムスタ屯營の守衛長なるレヤクリ、アギヤは五月十九日の夜に於て余の倉營に來り、左の事を告げたり。「殆ど一年以前に、第一大隊の銃手一百九十八、彼等の屯營なるレヤヤフを出發し、パシヤをキリ、に圍んで彼れを虜にし、以て彼れを彼等の中に留め置かんとを圖れり。是れより先きカイロ府なるドクター、ヤヤンカーよりの書翰到着し、パシヤの爲に遠征隊を派遣するとに決せりとの事を報じ越せしが、第一大隊の兵士等は之を聽いて、パシヤは獨り此地を立ち去り、彼等をして助けなきの地位に立たしむるに至るべしとの推想より、斯くは彼れを奪つて己等の屯營内に留め置かんと企てしなり。此大隊が守衛する所の屯營レヤヤフは則ちパシヤの領土内に於て最北端に位するものなり。彼等は曰く「余等は、パシヤの去るべき道路一路あるを知るのみ、ナイルに出てカートームに向ふもの則ち是れなり」と。パシヤは第二大隊の定員よりして此事を告げられし時に叫んで曰く「彼等にして余を殺さんと欲せば、余は死を恐れざるべきなり。彼等をして來らしむべし、余は唯之れを待たんのみ」。併し第二大隊の定員等は之れを聽かず、彼れを速に、來た逆徒等の來らざる前に、他の地に遣れしめんと

を勉めたり。蓋し其一部の部下が兵力を以て州令を捕せんとするが如きは、其意思の如何に係はらず、全領土の側覈を滅却するに至るものなればなり。暫ばらくの間、彼れは此議を拒みしが、遂に定員等の要求を容れ、ムスタの屯營に向て逃れたり。

彼れの出立するや、間もなく第一大隊の兵士等は來着し、緩重に屯營を圍みしの後、直に州令エミンの自ら出で來らんとを求めたり。營内の人之に答ふるに、パシヤは已に南部なるムギ并にリデーンに向つて出發せしとを以てせしに、暴徒等は忽ち營内に闖入し來つて、守衛長并に其部下を捕へ、幾多鞭撻を加へしの後、一同囚虜を引き連れて以てレヤヤフの屯營に歸り去れり。

レヤクリ、アギヤは尚ほ言を續て曰く「第一大隊は已に述べしが如く、最北端の屯營を守護するものにて、彼等は曾退却を嫌ひ、レヤヤフの屯營を轉覆するとだも尚ほ彼等の激怒を促すに足るなり。彼等は常に意を留めてクバーに蒸氣船の到着せんとを待ち、早晩カートームのパシヤより扶助隊の來るべきとを信ずるものなり。パシヤは曾て彼等に向つてゴルドンは已に死し、カートームは同時に陥りしとを告げしかども、彼等は惑ひ之を信ぜざりし。

君は今ナイルに出らず、反對の方向よりして此地に到着せり。余の知人なるリナント、ベーは千八百七十五年に於て君をウガンダに見しとありと言ひ、又余等の多くは嘗て君の名を聞知せるものなるを

以て、必ず君の旨を信ずるに至るべし。彼等は又彼等が埃及に達するの道は、啻にナイルに出るのみに非らず、此他に於て君の通過し來りたる道あることを了解するに至るべし。彼等は君の立閃に接し、君のソーダン人を見、而して君が遠征の趣旨を明にするに至らば必ず此命に從ふべし。是れ則ち余の意見なり、併し當時に於て彼の荒漠なる第一大隊の人衆が如何なる意見を懷き居るやは、是れ余の推測し得べき所に非ず」。

、、、、、、、、、、、、、、

翌日余はパシヤに告ぐるに、レヤクリ、アキヤの話を以てせしに、彼れは左の言を爲せり—

「レヤクリ、アキヤは至て機敏にして且つ強剛なる佐官なり。彼れは、偽聖ゼーブの部將なるオクマラが、數千の大軍を率ひて余等を襲撃せしに際し、殊勳を見はせしの故を以て現時の地位に進みしものなり。

彼れの君に告げたる所は多くは眞なり。但し第一大隊は一百九十の銃手の外に九百の黒奴兵を有せり。後に至て余の聞きし所に由れば、彼等は先づ余を捕へてゴンドコロに至り、其間タデーン。ダンジル并にムスタ等の弊兵を集め、而して一同ナイルの右岸に沿ふてカートームに向ふの心算なりしといふ。彼等にして假令能く此目的を遂し、カートームに至りたりとするも、其已に敵手に在ることを知るに至

らば、一同余等を棄て、彼等の家に歸るの外又道なかりしならん。

、、、、、、、、、、、、、、

左の事柄はパシヤが親しく余に告げし所のもの、以て博物學者の參考に供するを得べし。

「ウンシクの森は許多の猩々族を棲はしむ。夏季には時として夜間、ムスタ屯營の耕作地に向つて菓物を竊まんが爲に來ることあり。之れに就て尤も奇偶なることは彼等猩族が道を照らすに、松火を用ゆると、是れなり。余は自ら此事を目撃せしに非れば、斯かる獸類が發火の法を知り得べしとは信ぜざりしならん。

或る時此間一の獸類は屯營よりして土人の大鼓を竊み、面白げに之れを打ちながら立ち去れり。彼等は大に此大鼓を珍重せるものと見え、爾後夜間に於て數々彼等が之れを弄するの音を耳にしたりき」。

彼れはアルベルト湖邊に於て未だ曾て駝鳥の類を見しとなしと言へり。北緯二度の所則ちウンヨロ邊迄は之を見るを得しも、湖畔の人衆等は到底「汝は駝鳥の如し」との諺を解する能はざるなり。

余等の部下、一對の「モンシース」の兒を捕へて之をパシヤに贈りしに、彼れは之を受けて牛乳を以て養はしめたり。彼れは後に、余に告げて曰く「モンシースは至て能く馴るゝ獸なれども、其遊戯は老猾に過ぎて害を來すと少なからず、或は器具或はインキ等を弄び、紙にても書物にても爲に破損を受く

ると多し。彼等は殊に卵子を弄するとを好む、恰も頑是なき兒童の如くに、始めは之を大切にすれども、忽ちに前足を以て之を投げ出し、以て之れを破るに至る」。

バレヤはアンカの種族に關して種々の話を爲せり。彼等は牧畜を以て其生を營むものにて、各自三百頭より千五百頭を有す。彼等は殆ど之れを殺すとなし、專ら乳と血を得るとに向つて之を頼ふなり。血は家畜の側腹を刺して之れを得、胡麻の油に加へて之を啜るを常とす。其家の主人死去するとあるときは、其遺族のもの葬式の馳走に向つて一二の牛を殺すとあれども、他の場合に於ては殆ど決して之を爲すとなし。併し其家畜にして死する時は彼等は喜んで之れを喰ふを以て見る時は、彼等が常に之を喰はざるは、他に深き理由あるに非らずして唯之れを吝むの情に出づるに過ぎざるべきか。

此アンカは又種々の蛇類を崇拜するなり。昔てバレヤの部下なるメーダンの吏員が一匹の蛇を殺せしに、彼れは之れが賠償として四頭の山羊を要求されたりと言ふ。彼等は又此蛇類と同居を爲し、而して蛇は同居者中尤も自由を有するものにて、日夜とも何れの所へも徘徊し得るの權利あるなり。彼等は時に蛇を洗ふに牛乳を以てし、又之に油塗るにバタを以てす。如何なる家に至るとも、許多の蛇は諸所に其躰を見はし、眞、小鼠等を得んが爲に地を沙るの音、殷と喧しき程なりと。

ナイル河の東岸に於て、バレヤは非常に獅子を錬磨するの部屬あるとを發見せり。此土の住民は假令

獅子の爲に殺さるゝとも、敢て獅子を殺すとを爲さず。昔て是等の土人、水牛或は他の鹿類を捕んが爲に陷穽を掘り設きしに、不幸にも第一着に獅子が此中に落ちたり。恰もメーダン人は此事を知りしかば自ら之を殺さんとせしに、該地の酋長は駆りに彼れに向つて此獅子を與ふべきとを請へり。依てメーダン人は之を諾し、其如何にするかを打ち觀り居りしに、酋長は長き二本の樹を伐り來り、之を斜に穽中に架して恰も階子の用に供しければ須臾にして獅子は之に由て突出し勢ひ他く森の方に飛び行きたりと言ふ。

鳥獸の研究はバレヤの最も好む所にして、彼れは餘暇ある毎には種々の鳥類獸類に對して、之を吟味し、之を配述するとを勉むるよしなれば今は積んで立派なる書冊を爲すに至りしなるべし。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

以上の記事に由て觀察せば、バレヤは各家庭に向つて十分の快樂を分つに足るべき、種々の性情と風慣とを有するものなるとを知り得べし。偶日彼れが亞細亞に於て又亞弗利加に於て、遭遇し來りし所の事物幷に其の驚くべく又喜ぶべきの話を、彼れが正確詳密の筆を以て世に頒つに至らば、世は其彌益を受くると決して鮮少ならざるべきなり。

第十八章　後隊の扶助に向て出發す

隊長の報酬を得てムカンガに向ふ○ウクバ村の會議○ボドー蠻將に制裁○ウガロッパに後輩したる余等の所隊者○ボドー蠻將に煙草を取らんが爲に赴きたるスチーアス中尉の報告○危險なる婦人の夜襲○迅發の處置○余ロ扶助隊を呼ゆるに決す○チルッン大財の不時襲○余の鐵物「ウンゲー」蠻將の記事○ヴンロールル人○ヤンヂヤに使信日數の費算○高船スタンレー號に關してスチーアス中尉の意見○バーテラット少佐非に後隊に關してスチーアス中尉との對話○スチーアス中尉に與へたる命令書。

六月一日に於て、余等は二十のマザンボニ嚮導の下に、西方に進み、一時間半を經て、ウラマンゲワに達せり。此地の人又余等が爲に一百の人夫を派出せしかば、マザンボニの人衆は是れより彼等の家に歸らしめ、而して二時間許の旅行を爲せし後、ウンヤボンゴに達せしに、此地の人又直に嚮導を爲すと爲り、彼の一百の人に代つて余等を導き、一時間半の旅行を爲してムカンヤに至り、茲に安全に舍營を爲すを得たり。此所に達する前、少許の處に於て、余等の部下と土人との間に紛擾を醸し、將に戰爭を爲さんとするの勢に迫りしが、幸に彼の酋長能く事を了解するの明わりければ、敢て事を發するに至らずして止みたり。

此地方全部の土人等は何れも皆平和と慈情とを以て余等に接するに至れり。ウオンボラ井にカメラの酋長の如きも來つて余等を訪ひ、而して翌日余等が彼等の地を通行するに際し、何人も余等に對するに敵人の狀を以てするものゝ之れなかりし。此夜余等は、去る四月十二日に於て少接戰を爲せし所の、ベッムなるウクバに於て舍營を爲せしに、日沒に至り、五六の土人等は武器をも持たずして余等の舍營に來り、而して翌朝更に山羊、雞并に芭蕉實等を持ち來つて余等の人衆に供せり。

三日、余等は旅行を急ぎてイチュリ河に至り、小舟を求めて之れを渡りしが、過日來唯少許の降雨ありしにも拘はらず、河水は恰も四月の降雨期に於けるが如く然り。

翌日余等は道上に於て、マンダの婦人を所にせしが、余は彼の女に書を托して、余等は平和に此地を通行せんとするの外、他に意思なきことを土人に傳へしめたり。

五日、余等はペブルに舍營し、翌日は西部インダンドルの村に達せり。七日に於て、余等は七時間の旅行の後、ミワンと呼ぶ所の一小流に達し、翌日は無事にボドー蠻將に達することを得たり。余等が送に持ち來せしものは、六頭の牛、羊并に山羊の一群、烟草の數斤、バンヤの賜なる「フォイスケイ」酒四ギャロン并に他の珍奇なる品物にて、何れも舍營中の人々をして喜悅せしむるに足るものなり。

亞弗利加に在つては已に一度非扶を分ちし以上は、又自他の安否を知るに由なし。此六十七日の間彼等の間に如何なる事の生出せしや、風の便りだに聞くと能はず。余等は今ボドー蠻將を去る僅かに四

百ヤードの所に來れり。嗚呼スチーアス中尉—スチーアス中尉、彼れは如何なりしか。彼れは二月十六日に於てウガローダの屯營に向ひしもの、遂に歸り來りしならん、無事にか將た健全にか。彼等蠻中に在るものも恐くは、余等が今回の旅行に於て如何なる幸運に際會せしやを知る能はざるべし。余等は發砲せり、發砲して以て久しき間、互に相夢みしの夢を破るや、彼等も之に應じて發砲せり。然に於てか余等はボドー蠻酋の尚は存在するとを知り、彼等も又余等がナイアンザより無事に歸り來りしとを知れるならん。

スチーアス中尉は眞先きに見はれ出でゝ余等を歡呼し、之に次でチルソン大尉出で來りしが、彼等の容貌は少しく青白色を帶びたれども、共に健全の狀況なり。彼等が部下の人衆も又列を爲して出で來り、喜悅を以て滿たしたる、眼に輝き、顏は熱し、以て何れも手の舞ひ、足の蹈む所を知らざるが如くなりし。是等自然の見象は其感情を放發することを知つて來たゝ之れを隱蔽するの魔術を學ばざるなり。

スチーアス中尉の旅行は余の見積に對して非常の相違を來せり。實に森林間の旅行は難め叫る能はざるものあるか。余が先きに精密に計算せし所に據れば、凡ての障害と錯誤とを見積り、三十九日間に於てウガローダより歸り來るを期べしと思ひしなり。斯くて余等は彼れの功勞を思ひ、是罪とも共に

エミン、パシャに面會の榮を獲たんとを期し、四十七日間此蠻中に待ち居りしも、彼れは歸り來らざりしを以て余等は先づ湖畔に向ひしなり。今聽く所に據れば、彼れは七十一日目に於て歸り來りしものなりと、是れ已に余等がエミンと交信を始めしの頃なりしなり。

余は又余等がウガローダに留め置きたる五十六の病人中、少くとも四十人は回復して彼れと共に旅行を爲すに適するならんと思へり。併しスチーアス中尉は實地に於て、更に悲慘の狀況に於て彼等を見出せり。凡てのシーマリ人は一人の外は盡く死去し、而して其一人もイボトに來りて病れたりと云ふ。彼れが旅行の有樣は則ち左の報告に由て見るべし—

中央亞弗利加、イブウィリなるボドー蠻酋に於て、千八百八十八年六月六日

スタンレー粘足下、余は今足下に對して余が足下の命を帶びてウガローダに旅行せしの事實を報告するの榮を得たり。余は千八百八十八年二月十五日に足下の命令に接し、同じく十六日、往路には少佐バークラットの許に遣すべき二十の使者を伴ひ、歸路にはウガローダの下より病氣回復者を伴ひ來るべきの目的を以て出發せり。

十六日に於て此地を出發し、十七日に余等はキリマニ、ヒルの村に達せり。翌日余等は此村の西方二哩許に當つて一大道路あるとを知りければ、之に出て以てイボトに達せんとを期し、午前十一時

に及ぶ迄之れが旅行を續けたり。然るに茲に至て、余は道の方向甚しく北東の方に向ふを悟りければ、余はイヒユルの方に進し得べきの道を見出さんとを期し、種々之れを探檢せしに、茲に一路を發見するとを得たり。依て以て余等の歩を進むると凡そ三哩許、忽ち道は茲に盡きて飛早や四方に人跡なきを見る。止むを得ず再び元の道に歸りて、心を留めて北四の道を探がし、夜に入りて遂く余等は「皮剝ぎたる刑場」ある一路を發見して其側に舍營し、翌十九日に此道をたどりて歩を進めしが、十時頃に至て一村落に到着し、道は又盡きたり。人を分つて四方を捜索せしも他に一路あるを見ず。依て再び元の所に引き返へし、南東に渉れる大路に從ひ、再三進行を試みたれども、遂からずして路は何れも盡きたり。

余は他に考慮を巡らせしの後、昨日舍營せし所に歸り、今回はマブンシの方に導く所の道を取り、而して間道を通じてイヒユルの方に向はんとに決し、以て其歩を早めしに、忽にしてタンブチの村に進し、驚いて再び歸り來るに至る。

茲に於て余は諸頭領の意見を聽き、皆て余等が通行せし路に歸つて、二人の懷嚮者と求め、而してウンブの村に馳せ、イヒユルを渡つて後、其北岸に沿ふて下るとに決せり。余が斯くの如き方法を取るに至りし所以は、若し余にして新路を見出し、見出して進む以上は、遂もなく是れより尚は四五日の時を徒消せざるを得ず、怠遅を要する旅行に於て再び斯くの如きとあるべからず。第二には又斯くの如くにして森林を切り開き、伐り開きて進む以上は、之れが爲に又五六日間を失ふに至るべく、必覺知悉したる故の道に出て進むの勝れるに加かずと信ぜしを以てなり。斯くて二十二日にキロンガ、ロンガの所に進し、余等は余等をイチユリの南方に導くべきの案内者を得て、同じく二十四日に出發せり。三月一日に、レンダ河を横切り、同じく九日に至てウガロータの上部の屯營なるアハリンに進し、十四日早朝にイチユリに於けるウガロータの屯營に到れり。過日來數日の間、余等降雨の中に旅行せしを以て、余は爲に熱病を惹き起し、ウガロータに進ずるに及んで二日間病床に就けり。

ウガロータの下に於て殆ど十人許のもの集粗に出掛けて來らず、是等を集めんが爲に三日半を費す。

余等の曾て殘し置きたる五十六人、則ち五人のソーマリ人、五人のタビアン人四十六のザンジーバル人中、二十六人は死せり。此他に二人のものは余の山發迄に歸り來らず。尚ほ他に一人はウガロータの下に、一人はイボトに遣せり。

此生存者の中にも健全なるものは至て少なく、余は其中七人の殆ど歩行に堪へざるものを尚ほ茲に

留め置かんと欲せしも、ウガローワは斷然之を拒めり。故を以て余は其の途に於て斃るゝに至るべきことを豫知しながら、是等を遂れ歸らざるを得ざるに至れり。

十六日に於て早く、アブダラ並に十九の使者は、後隊に向つて河を馳せ下れり。十七日に、余はウガローワよりして四十四の施條銃を受け取り、此中二挺並に四十二個のリミントン彈藥を彼れに贈れり。

十八日に、余はウガローワに支拂ふに、二十九人、三十弗の制令を以て八百七十弗を以てし、彼れの證書と引き換へ、又足下の書翰を渡せり。

同日余は直に歸途に上り、左の割を以てイブウヒッに歸る。

十九日より二十三日に沙て、余はフハリレに遣せしが連日の雨は余等の行路を隔てゝ、沼澤を沙るに、一方ならざるの困難を感ぜり。是れよりイボトに達するの間、余は絶へず熱病の襲る所と爲り、人夫等も余を運ぶに堪ゆべきもののあらざりければ、余は常に病を勉めて少みしも、日に五哩乃至七哩を旅するに過ぎず。斯くの如き狀況は實に余の一身に止まらず、何れも皆身心に衰廢を告げて前途の安否を疑ふに至れり。四月十一日に、イボトに遣し、同じく十三日に蚊を離れて、又他の困難を重ねし後、四月二十六日に、一回盤背に遣せしとを報べり。

余が此盤背に遣せし時に於て、余は足下は已に久しき以前にナィアンザに向つて出發せしことを知り、又余は少時の銃手を以てして足下の跡を追ふの危險なるべきを思ひ、更に足下の指揮に接する迄此盤背に留るとに決し、次第は一先づ、足下が此盤背の總督たらしめし所の、チルンン大尉に報告せり。

降雨の爲め、滿水の爲め、熱病其他の病氣は、余等の旅行に向つて非常の妨害を與へしなり。余等の中、健全なるものは何れも速に足下の下に到着せんとを熱望して止まざりき。

足下の親愛なる使僕

中尉ダブリュー、ヂー、メアーアス

ボドー盤背の有樣は依然昔に比して格別變りしとなし。或る病人は來た回復の運に至らずと雖とも、取て危險に迫りしと言ふにもあらず、サルンンは著しく健全を加へ、又飢餓の爲に衰廢せしものは十分なる休養の下に、五六磅の体量を加ふるに至りければ、全体に於ては何れも多少其好の方なり。余等は今新たにヤンブヤに向つて、往復一千哩七十哩の旅行を爲さんとす、是れ決して之れを好まざるものゝ爲し得べきものに非らず。雄勇隊ならざるべからず、智識を以て照らし、情誼の爲に熱する所の忠士ならざるべからず。彼等は途上の困難—飢餓、降雨、渇喝、疲倦、瘴根、木實の毒性、蛭、虫、蚊等

を換拠するものならざるべからず、而して又同時に此旅行を完成して再び此地に歸りなば、彼の天高く地厚く、風暖にして、滿面綠草を以て彼等の身心に無限の愉快を與せしめ、且つ己等の仲間に對して殊勳を擅ふの榮を示さんと欲するものならざるべからず。嗚呼上帝よ願くは余等をして此行を急がしめよ。

併し黑人等の意思は如何あるべき、果して能く進んで此時に應ずべきや否や。

余等の圍繞に於ける麻黎の實は已に一回收穫せられて、密に穀倉の中に貯へられ、其跡には更に新しき種を施せり。椰蔭の林は依然として限りなきの供給を爲し、甘藷は諸所に發生して自由に之を集むるを得べく、豆類も又可なりの收穫を與へたり。

余の留守中、タンナイよりの矮人等、余等の穀畝に侵入して、私に麻麥を窃み去らんとしけるを、スターアス中尉の發見する所と爲り、激しく追逐を蒙るに至りしかば、彼等は之れに懲りて非手を收むるに至れり。但し之れか爲に部下の一人は其生命を失ひたりと云ふ。

現在邊内に在る所の人員は、ザンザーバル人、一百十九人。エミン、バレヤの兵卒四人。モーダの人夫九十八人。アルバルト、ナイアンザよりの白人三人。此他に此處に留り居りたるザンザーバル人、ソーダン人五十七人。白人二人を併せて合計二百八十三人なり。余は則ち此中よりして後隊なる少佐パーククット（の扶助隊を拵成すべきの都合なり。

二日間休息の後、余は人員全体の點檢を爲せり。終りて今回後隊扶助の爲に出發するの珊山を彼等に開陳して曰く「諸子試に思へ、少佐パーククット並に汝等の兄弟等は今將た何れの邊に彷徨せるかを。上帝の外は—彼等が如何なる困難に遭ひ、如何なる境遇に立つかを知るもの、何人も之れなかるべし。而して更に之を思へ、彼等は始めての旅行なり、余等は再度の旅行なり、共に困難を免れざるには相違なしと雖ども、余等は已に滿腔の希望と、進進の智識とを有せり。故に余等は今進んで以て四顧茫々たる森林の中に彼等を助けざるべからず、彼等に相遭ふて以て之に告ぐるに余等が成功の結果を以てせば、彼等甚に欣喜抃躍せざらんや。此他に余は後隊に托するに、許多の寶貨と、珍奇なる飾玉等を以てせり。余等は斯行之を携て以て、部下功勞の人衆に頒たんとを期す。汝等にして此迎に由り、余等に從はんと欲するものは晴ふ迎つて余の側に來れ」。

彼等は今何れも肥滿にして健全なり、此意を了して余の側に飛び出でしもの凡て一百七人（ザンザーバル人）叫んで曰く「少佐に從、少佐に從」。後に殘りたる六人のものは、全く病の爲に之れに應ずる氣力なかりしなり。

余は此結果を見て大に喜べり、彼等の心情が此際に於て、如何に鮮麗なる光輝を放てるかを見たり。

見にも角にも是れ則ち人生性情の完全なる點に逃せしの時、勇あり識ある彼等の挙止は決して一黒奴として侮るべきに非らず。嗚呼余は詩人の筆を假りて北氣と北風とを寫さんとを思へり、然らざれば彼の畜工の筆を假りて、彼等が黑色粗大なる身体の上に、如何に美麗なる衣服を纏ひたるかを寫さしめたきものに思へり。

余は尙ほ此他に五六の健全なるものを、蠻背中より攫拔し、彼等に與ふるに各二十五日分の糧食を以てせり。彼等は、運搬に便にせんが爲に、唐黍、西瓜實等を粉にして以て出立の準備を爲せり。余は一般人衆の爲に必要なるものを供へ、又余が一己の衣服ズボン、靴、椅子、傘、雨衣等を修復するに於て怠はしかりし。

余が今回、後隊扶助の旅行は、敢て他衆員の手を煩はさずして、獨り自ら之に當らんとを決せり。其理由は、白人と旅行を共にする時は從つて種々の荷物を增加するを以て、急速を要する場合には人衆の遲滯と爲ると少なからず。且つ又スターアス中尉の如きは、已にイボトより銅鑛舟を此地に運び來り、又ウガロークに使して病氣回復者を迎れ來りしものなるを以て、よろしく此際十分の休養を要すべきもの、チルソン大尉は去歲九月下旬よりして病に罹り、爾來今日に至る迄未だ全く愈ゆるに至らず、一時は殆ど生命も危かりしとなれば、再び斯くの如き長途の旅行を爲さば、疑もなく彼の一命を尖ふに至るべし。ドクター、パークは獨り健全にして能く非に堪え得るも、ボドー蠻背中には許多の病人ありて何れも皆彼れの手を待つものなれば、ムゾに之れを引き放すに忍びざるの事情あるなり。」

イボトに於て尙ほ荷物を殘し置きたるものありければ、余はチルソン大尉をして十四の人を率ひ、之を運び來らしめんと欲せしに、出發に際し、大尉は又復た熱病の襲ふ所と爲り、動く能はざるに至りければ、止むを得ずドクター、パークをして彼れに代らしむるとと爲しぬ。

余の驅狗ランデーは、旅行中常に余に伴ひ來りて、未だ曾て相失せしとなく、困難の場合にも、立派に一廉の役目を勉めて忘たらざりしが、余は今回の旅行に更に千哩を通じて彼れを苦しむるとを遺憾に思ひければ、彼れを留めてスターアス中尉に托するとと爲せり。彼に聽く所に由れば、彼れは余と相離るゝに至りしを終生の怨と爲し、以て斷然食を斷つと三日にして遂に斃死するに至りしと云ふ。」

ボドー蠻背の狀況に就ては余亦も憂慮を懷くを要せず、已にスターアス中尉の技倆を以て之れを纏理し、之を助くるにチルソン大尉とドクター、パークとを以てし、六十の施條銃を有して許多の彈藥を供ふ、假令林間の種族等が相連合して四方より攻め寄するとありとも、又一歩も其歩を蠻内に容れ得べきに非らず。且つや此蠻背は疑もなく此邊に在つて尤も堅固なる所のもの、深くして又廣き堀は全体の三分の二を圍繞し、其四方の隅には小高き楼閣を供へて嚴重に障柵を列ね、各支柱は深く地中に

入りて容易に動かすべきに非らず、敵人幾多の弓矢を以てするとも又如何ともすべからざるなり。此蟲砦に通ずる街路は何れも諸所に障柵を供へて以て防禦の便を與へ、而して其堀を繞らさゝるの邊に在つては、道をV形に造りて一時に許多の人衆をして侵入すること能はざらしむ。日中は如何に敵人の計策を逞らすものありとも、蟲内一百五十ヤードの所に達すること能はず、夜に在つては十人の番兵必ず能く土人等をして何事をも爲す能はざらしむるに足るべし。

元來此蟲砦の築造は啻に土人の襲撃に供へんが爲のみに造りしに非らず、彼のマンユエマ人に就ても慮る所ありしなり。亞非利加内地に在つては意外の事常に少なからず、故に余は他來市場を築造する事には、心を意外の邊に配り、以て堅固に堅固を加ふることを旨とせり、是れ必竟萬金の策なるを以てなり。

今やボドー蟲砦の有様は平和なり、土人若しくはマンユエマ人の來襲するとあるべしとも思はれず、且つ又吏員とザンザーバル人との間に紛擾を醸すべきとありとも思はれず。吏員等は已に彼等人衆の計ふ所を解し、且つ又彼等が種々の習慣、氣質、儀式等をも知悉し得て、無理の指揮命令を下すべきともなく、人衆等又能く吏員等の人となりを知悉して、其當の命令の下に、違背するが如きは萬之れなかるべし。彼等は又此地に在つて無事に暮しむることなかるべし、是れよりして二箇月餘を經なば、

エミン、パシャは此蟲砦を見棄ふべしとの事なれば、彼等も定めて彼れとの交際に由て利益の中に愉快の時日を送るを得るなるべく、又パシャがナィアンザに歸るに際し、彼等にして此蟲砦を棄て、彼れに伴はんことを欲せば、個も又容易に爲し得べきの事なればなり。

ザンザーバル人の誠實なることに就ては、固より一點の疑を容れざるなり。又彼等の境遇は彼等をして動くことを得せしめず。逃れて以て廣漠無邊の密林に彷徨せんか、遂に猛獸の餌と爲るに過ぎず、去つてマンユエマ人に歸せんか、彼等が之を恐るゝことは已に蛇蝎も啻ならざるなり。タンブチの部落に向つて哀を請はんか、彼等は忽ちにして彼等の羅中に入らんのみ。彼等の經驗は已に深に是等の事を知了せしむるに足るなり。

余は之れと同一の信用を、後隊なるパークット等に向つて屬するを得べきか。殘餘の日月は余をして轉た心の苦惱をして增さしめたり。日は過ぎたり、月は過ぎたり、余は彼等の安全なるべきやを信ぜんと欲するも、能はざるに至れり。余は時として之れを疑へり。此疑問は獨り推理を以て解剖し得べからざるの事、彼等は今那邊に來りしにや、此久しき歳月の間一の無聞だに接することなきは如何。彼等は何はヤンブヤに留るなるべきか、よもや〳〵殘餘の時日を渡つて活潑有爲の人士が、爲すべき道を撰ぶ能はずして一所に停滯し居るの迂やあるべき。併し余等は今ヤン

ナヤに向つて出發せざるべからず、各人成るべく輕裝を爲し、成るべく不必要の荷物を省きて、成るべく速に彼等に追着し、而して又成るべく速にアルバルト、ナイアンザに歸り來ることを勉むべきなり。

余は今回の旅行に關し、左の見積りを爲し、之れを蟲將の總督に渡せり。

ボドー蟲將よりナイアンザ迄の距離は一百二十五哩にして、余等は滯在日數をも併せ、七十四日を以て之を旅行し得たり。

又余等はヤンナヤよりウガローワ迄の間を七十四日を以て旅行したり。

而してスクーアス中尉は、ウガローワよりボドー蟲將迄を二十六日を以て旅行せり。

此合計一百日なり。

左すれば余等がヤンナヤへの往復日數は二百日と見積らざるを得ず。千八百八十八年六月十六日よりして二百日を數ふれば、千八百八十九年一月二日に至る。尙は旅行の都合に由り、多少の遲延を來すとあるとも、來年一月初旬にはボドー蟲將に達し、而して同月二十二日頃には湖畔に着するとを得べし。

千八百八十八年六月十六日出立の事と定め、其詳細なる日取は概略左の如くなるべし。

ボドー蟲將よりウガローワに達す	七月	五日
是れよりアビレバに達す	同	廿五日
同ムペに達す	八月	十四日
同ヤンナヤに達す	九月	三日
十日間の滯在	同	十三日
ムペに歸る	十月	三日
バッガの池に歸る	同	廿三日
ボドー蟲將に歸る	十二月廿二日	
五日間の滯在	同	廿七日
是れよりアルバルト湖迄	千八百八十九年一月十六日	

余がボドー蟲將に留る最終の夜に於て、スクーアス中尉は種々余の告げたる事共を質問することあり、終りて談、少佐パークットの身の上に及び、後隊が折く遊獵期を告ぐるに至りし所以は、ヤンナヤに瀕船スタンレー號の歸航せざるが爲なるべしと彼れは言へり。

余は之に答へて曰く「君の言恐らくは事實を得たるものに非らず、余の考にては個は滅も憂を要せざるとにて其歸航は尤も確實なるべきものあるを信ず。スタンレー號は君の知れる如く去歳六月二十八日を以てヤンブヤを出發せしものにて、余は隊船長に托するに種々の書翰を以てせり、一は余の親友にしてスタンレー、プール區の總理なるレーブレット中尉に宛てたるものにて、成るべく速にスタンレー號をして、余等の荷物と彈藥とを積み、ヤンブヤに歸航すべきと盡力あらんことを求めたり。他は、余が以前の書記生にして尤も誠實の信憑を有するスウヤンバルン氏に宛てたるものなり。余は中に、若しスタンレー號にしてヤンブヤに歸航する能はざるの事情起りたる場合に在ては、彼れの商會に屬する汽船フロリダ號を代用せんことを求め、又余は其持主は象牙買賣を爲すの商人なるを知るを以て、何程にても之れに相當するの金額を支拂ふべきことを約せり。

第三の書翰は和蘭商館の支店長なるアントーイン、シレッレヤッフ氏に宛てたるものにして、若しスタンレー號幷にフロリダ號ともヤンブヤに廻航する能はざるに於ては、彼れは是非とも一般の船を雇して、スタンレー、プールよりの荷物幷にボロボより一百二十八人の人衆を、ヤンブヤに輸送せんことを求め、報酬は求めに從つて何程にても支出すべきことを告げぬ。

第四の書翰は則ちスタンレー、プールに於ける我が隊の吏員ウヨン、ロース、トルーブ氏に宛てたるもの、中に、若しスタンレー號、フロリダ號幷にシレッレヤッフ共其力を致す能はざる場合に於ては、彼れは力を盡して舟、小舟等を集め、又事をボロボなるクード。ポーターの二氏に告げて同樣の準備を爲さしめ、以て一同靜にヤンブヤに向ふことに盡力せられたき旨を委托せり。蓋し此最後の手段の如きは固と不用の注意たるに過ぎず、一千八百八十七年六月二十八日より翌年六月十六日に至る迄、殆ど一箇年の間に於てスタンレー號も、フロリダ號も又シレッレヤッフの汽船も、余の依托に應じ得ざるの理由なければなり。

此他に余はスタンレー號の船長幷に機關手に對して、彼等が回航の時を待つて五十磅宛を贈與せんことを約せしなり。貧人に向つて二百五十弗の金は決して輕んずべきに非らず、余は信ず彼等は萬止むを得ざるの障害に由て隔てられたるに非る以上は、必ず相當の時期に於て、凡ての人と荷物とを以てヤンブヤに到着するに至りしことを」。

スクーアス曰く「然らば君は此遲引の原因は少佐パーシクットの上に關するものと爲すか」。

「勿論彼れは其責任を免るゝ能はざるべし。思ふに此遲引の原因は彼れ幷にクブクブとの關係なるべきか。クブクブは彼れの約束を破りしものならん、疑もなく少佐は之れが爲に處理に苦しむに至りしものならん。若しクブクブにして六百人—或は其半ばなる三百人を以て、後隊に供給したりとするも、

余は久しき以前に、即ち君が側鉞舟に向つてイポトに赴きし時、假令何程遲くとも、君が今年三月十六日ウガローヲに遣せし時に於て、彼等の所在を明知するを得しならん。余は千八百八十七年九月十七日に於て、即ちヤンブヤを出でしより八十一日に於て、書をウガローヲの部下に托して少佐に送りたり、若し少佐にして疾くにヤンブヤを出立せし以上は遲くとも今日に於て之れが返答に接せざるべからず。又君と共に本年三月十六日に於て、ウガローヲの許に遣し、其れより河を渡つて少佐に使したる二十の壯夫は、已に少佐に面會して歸り來らざるべからざるの時、一年の歲月に、唯數週日の旅行をる爲さじと言はゝ、其實時た離れの頃にか落つべき、假令其事情は如何あるにもせよ。中尉は少しく少佐を辯護する如き口吻にて「併し余は君が少佐の所爲を以て不忠に出でしものと……」。

「不忠、誰れに對して。余は君が斯くの如き言を爲すなからんを欲む。我が遠征隊中には固より此種の事あるべき筈なし」。

不忠には非るべし、恐ふに少佐も其爲し得べきの事は爲せしならん、然れども彼れは多少の懶惰若しくは偏見を免れざるべし。

彼れは勇猛にして且つ率直の人なり、固より事に當て躊躇するが如きものには非れど、余が彼れに就て恐るゝ所は、已にウガローヲの使者に托して送りたる書中にも記せし如く「經驗に乏しきと、忍堪に乏しきと」との二點なり。余は恐る、彼れが一時の怒に乘じて、人衆を過酷に處刑し、以て周圍のものースタンレー、ファオールス近邊のアラブをして乘ずる所あらしめしには非るなきかを。今假令余等の背徳は不幸にして一も彼れに遣せずとするも、自他此間に歩を進むるに於ては此長日月間風說傳聞の耳を打つものなしと言ふべからず。又假令アラブは一人も彼れに人衆を送らずとするも、ボロボのザンザーバル人到着せし以上は、彼れは二百の人尖を有するなり。此人尖を以てして荷物の爲に一日に同一の道を二回三回往復するとも、彼れは已にバンガの池に來らざるべからず。又勞働の激しきが爲に、若しくは飢餓の爲に、其人衆の一半を失ひしとするも、ムベ若しくはベナルヤに來らざるべからず。恐ふに彼れは尙はヤンブヤに留るものならん、余は已に種々の想像を爲せしも、此他に確たる考案を得る能はず。

中尉曰く「如何にして君は後隊が其人衆の一半を失ひしと思ふや、何か危險の事ありしと思ふか」。

「尙は唯余が推察のみ。余等の旅行に於ても已に五割を失へり。余等がヤンブヤを出立せし時は三百八十九人なりしも、今は僅に二百卷三人を餘すのみ。即ちナイアンザに在るもの四人、ボドー蟲内に在るもの六十人、余と共に行くべきもの百十九人、外に二十人の人尖あるなり」。

「併し後隊は余等前隊の如くに、飢餓に遭遇せざりしならん」。

「彼等も又余等が過去七箇月間の如き、粗食の十分を得る能はざりしならん、故に折算すれば殆ど間欠の結果なるべし。併し個は唯一片の想像に過ぎざれば、深く論ずるも益なかるべし。

余が強め用したる所の成功は種々の障害に山つて遮引されたり。余はパンヤに向つて、サンヤーバルより特に使者を送りしにも拘はらず、彼れはアルバルト湖の南端を見舞ふに過ぎず、爲に四箇月の時日を空ふせり。而してベーククットの方は歳除に及んで来た一片の書信に接せず。余等の人衆は途上に於て續々斃れ、四顧寂寞を告げて心に希望の光を留めざるもの、其幾度なりしやを知らず。此森林間は不吉の夢を以て滿せり、之れに入るものは何人も悪夢の襲ふ所と爲るを免るゝと能はず。余等は此間に在つて何事も爲む能はず、唯一片の赤心に山つて、正義なる目的の爲に盡すべきのみ。報酬を得んとを欲する勿れ、困難に遭遇するは是れ余等の義務のみ。獻身犧牲的の心を以て事に當り、結果は唯宇内の人をして之を收めしめんのみ今日は今日の事、又明朝の困難を思ふと勿れ。唯此際余の心に盡む所は、君が君の務を全ふして、余をして又後顧の憂なからしむるに在り。余に向つて十分の時を與へよ、十二月二十二日迄。然る後若し余にして歸るとなくんば、君は君の朋友と物議して以て、爲し得べきの範圍内に最上の策を取れ。余等はバーククットの爲に、途上相會ふとなくんばヤンブヤ

迄進むべし。併し是れより先きには行かざるべし、假令彼等は凡ての荷物を以て海岸に立ち去りしとするも、余は之れを問はざるべし。唯彼等にしてヤンブヤを離れ、東方の道を誤つて南東の方に赴きたる形跡ありとせば、余は之れが後を追ふて彼の隊を捜し出し、直線に森林を渉つてボドー盤特に向ふべし。若し十二月中に、余等の歸着するとなかりせば、君は是等の事をも計算に加へ、以て臨機の處置に出でらるべし」。

左の書は則ち余が出立に際してスチーアス中尉に與へたる指揮書なり。

中央亞弗利加、ボドー盤特に於て、千八百八十八年六月十三日

スチーアス中尉足下、余は今後隊扶助の旅行に向つて出發するに際し、君を挙げてボドー盤特の總督と爲すものなり。余は君に委するに、盤内の人衆―病人をも併せ幷に六十の施條銃を以てす。盤内の人多くは健全なりと雖ふべからず、固より危險なる旅行を爲して強敵に當るに足らずと雖とも、彼等は多くは尚は能く銃を取つて防禦を爲すに足れり。彈藥糧食の如きは決して空乏を告ぐるの憂なし。余の專ら依頼する所は總督其人の身に於て存す。若し總督にして活潑機敏なりとせんか、余等の盤特は安全にして、假令數千の土人等は周圍に襲ひ來るとも又其目的を遂する能はざるべし。唯油斷は大敵なり、余は此點に於て君に十分の信用を屬するものなり。

此蠻野擴張の事に關しては余は已に口香を以て君に告ぐる所ありしが其落成の上は余は別に二十乃至三十の敏活なるものを選んで本營内に住はしめ、他の目的に向つて欠くるとなきやう、準備を爲すべし—

第一、然かせば、君は君の敵に由つて、君の部下より離斷せらるゝの憂わるなし。

第二、君が部下の三分の一は、常に一呼の下に門内に集まらしむるとを得べし。

第三、斯くせば本營内を密塞に委することなきを以て、常に乾燥にして健全を保たしむるを得べし。

廣黍に就ては、七月一日頃より地を鋤き、草を除き、同じく十五日頃に至つて種を蒔すべし。

豆蔻實に就ては、一週間に二度宛視察隊を派遣し、土人或は象を防ぐべし。象に向つては常に五六の松火を焚き燈くを以て足れりとす。

視察隊の中には常に吏員として作はしめ、若し豆蔻實にして密乏を告ぐるに到らば、人象をして之を喫ふとを節せしめ、又常に實を集るには嬉沙の距離より始むべし。蠻野の近物に在る所の豆蔻實は成るべく保存するとを勉むべし、廣黍も同樣なるべし、又街路の兩側に在る所のものも。其十分に甘熟する迄は之を取るとを禁止すべし。

余はチルソン大尉をして君に副たらしむべし。君が病氣或は事變あるの場合に向つて代理を爲さしむ。

ドクター、パークも又此所に在る病人を治療せしめんが爲に留め置くべし。

余等が何月何日に歸り來るべきやは後隊の進行に比例するものなるを以て豫め計り難し。併し少佐にして尚はヤンブヤに留るものとすれば、余等の歸者は十二月下旬なるべし。

エミン、パシヤ并にサエフソン氏は、今より二箇月即ち八月中旬に此處に來るべき筈なり。

サエフソンにして十分の人夫を以て來りたる上は、君は蠻野を撤して、彼れと共にナイアンザに赴き、而して余の歸者迄パシヤの保護の下に立つべし。余は仮て東方の道を取りしを以て、今回はサボコより北東の道を取り、イチュリの渡場に向ふべし。

君は余に向て君が此蠻野を去りしや否やを知るの便に供せんが爲め、イチュリの渡場に近く、有岸に於て大木に符號を存せんとを望む、則ち矢を以て明かに、君が出立せしや否やを木皮に書き付けられんとを望む。又非日附をも記せよ。是れ余に向つて次に心を安んぜしむるに足るものあるを以て矢なり。

少佐に對する二十の使者が此地を出發せしより已に四箇月に及べり。若夫にして八月中旬にサエフ

ソンの來る遠鼓に聞るとせば、其經過六箇月と雖るを以て、彼等は此間に少佐の話を聞き得て歸るともあらんか。

余は君等が凡て健全の躰を保つてナイアンザに向はれんとを希望す、余も又國機の方法に由て速に此目的を遂せんとを期すべし。

足下の誠實なる遠征隊總督

ヘンリー、エム、スタンレー

闇黑亞弗利加第三編 終

明治廿九年十月十五日印刷
明治廿九年十月十八日發行

（スタンレー探險記上卷）
定價金三拾五錢

編輯兼發行者　大橋新太郎　東京日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　愛敬利世　東京京橋區西紺屋町廿六番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京京橋區西紺屋町廿六番地

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

版權所有

幸田露伴君新作　篠岡水淡畫

●ひげ男　全一冊
正價金三拾五錢　郵稅六錢

諸名家著作　樹崎入

●太陽小說　第一編　第二編
正價第一編金三拾錢　郵稅六錢
第二編金三拾五錢　郵稅八錢

山岸敷窩君譯

●空中軍艦　全一冊
正價金廿五錢　郵稅六錢

幸堂得知翁著　簡井年峯畫

●幸堂滑稽談　全一冊
正價金三拾錢　郵稅六錢

飛野房次郎君著　牧梅庵、小山正太郎畫

●平壤包圍攻擊　全二冊
正價一冊金三拾五錢　郵稅八錢

三宅雪嶺君著　三島雄峯畫

●戰爭小說　金鵄勳章　全一冊
正價金三拾錢　郵稅六錢

江見水蔭君著　武內桂舟畫

●戰爭小說　水雷艇　全一冊
正價金三拾錢　郵稅六錢

江見水蔭君著　水野年方畫

●戰爭小說　速射砲　全一冊
正價金三拾錢　郵稅六錢

帝國文庫　四拾三編　校訂　大岡政談

全壹冊　上製背皮金文字入　特製戰爭百餘頁
正價金五拾錢　郵稅十六錢　通運料十錢

本書目次

越前守山世の事　直助權兵衛一件
天一坊一件　傳吉一件
白木屋お熊一件　雲切仁左衛門一件
煙草屋喜八一件　松田お花一件
村井長庵一件　後藤半四郎一件
小間物屋彦兵衛一件　鈴川源十郎一件
水谷村九助一件　嘉川主税一件
以上十六冊合本

幕府時代の明法官大岡越前守が、判斷せし事件を蒐集し、孝子、節婦、姦入、投毒の事跡、奇にして怪なるもの、悲にして順なるもの、數十種を編輯す。事實の奇は却て架空小說の非なるより優るのみならず、兼て當世の人情世態をも併せ察するを得べし。幸ひに御愛讀あらんことを。

帝國文庫全部總目次

●第一編　白第四編　眞書太閤記　朝鮮軍記
●第五編　源平盛衰記
●第八編　白第六編　南總里見八犬傳
●第九編　東海、木曾、奥羽、江島道中膝栗毛
●第十編　梅暦春告鳥
●第十一編　第十二編　通俗三國志
●第十三編　三馬傑作集
●第十四編　柳樂、越後、鼠田、加賀、伊達　騷動實記
●第十五編　京傳傑作集
●第十六編　種彦傑作集
●第十七編　星月夜鎌倉顯晦錄
●北條九代記

1999

第十八編 道俗十二朝軍談
第十九編 甲越軍記談
第二十編 道俗吳漢越楚軍談
第二十一編 楠廷尉秘鑑
第二十二編 風來山人傑作集
第二十三編 西鶴全集（發賣禁止）
第二十四編 滑稽名作集
第二十五編 其磧自笑全集
第二十六編 人情本傑作集
第二十七編 氣質全集
第二十八編 珍本全集
第二十九編 赤穗復讎全集

第三十編 水滸傳
第三十一編 忠臣藏淨瑠璃集
第三十二編 四大奇書
第三十三編 續氣質全集
第三十四編 近松時代淨瑠璃
第三十五編 大岡政談
第三十六編 高僧實傳（佛教各宗）
第三十七編 馬琴傑作集
第三十八編 近松世話淨瑠璃
第三十九編 仇討小說集
第四十編 淨瑠璃名作集
第四十一編 俠客傳全集
第四十二編 續珍本全集

帝國文庫正價一冊金五拾錢●十冊前金四圓六拾錢●廿冊前金拾參圓●五十冊前金弐拾四●郵稅一冊拾六錢通運料一冊拾錢

31.

1999

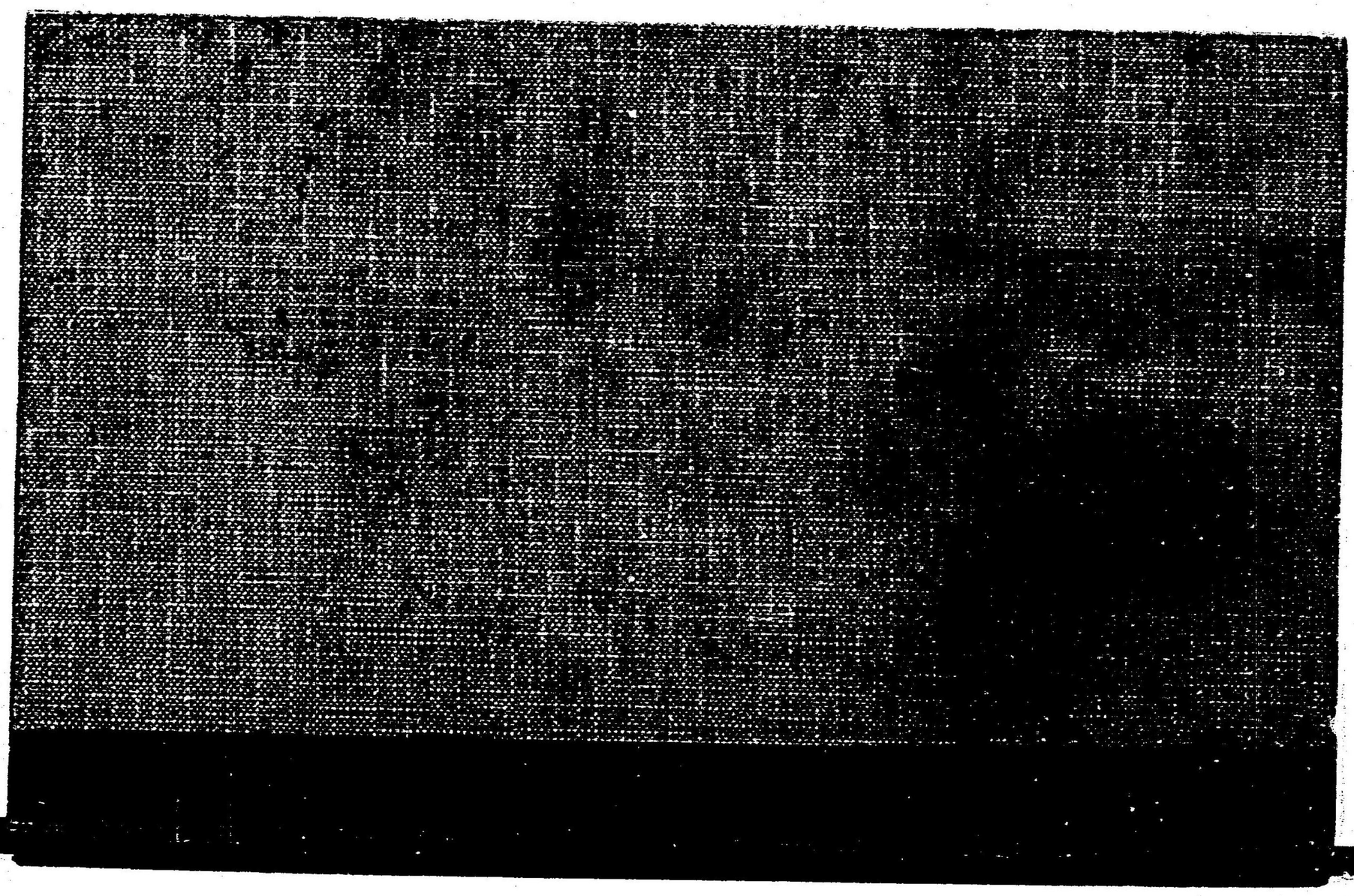
第十八編 通俗十二朝軍談
第十九編 通俗明清軍談
第二十編 通俗武王軍記
第二十一編 通俗吳漢越楚軍談
第二十二編 楠廷尉秘鑑
第二十三編 風來山人傑作集
第二十四編 西鶴全集（發賣禁止）
第二十五編 滑稽名作集
第二十六編 其磧自笑全集
第二十七編 人情本傑作集
第二十八編 氣質全集
第二十九編 珍本全集
第三十編 赤穗復讎全集

●帝國文庫正價一冊金五拾錢●十冊前金四圓六拾錢●廿冊前金拾參圓●五十冊前金貳拾四圓●郵稅一冊拾六錢通運料一冊拾錢

第三十六編 水滸傳
第三十七編 忠臣藏淨瑠璃集
第三十八編 四大奇書
第三十九編 續氣質全集
第四十編 近松時代淨瑠璃
第四十二編 大岡政談
第四十三編 高僧實傳（佛教各宗）
第四十四編 馬琴傑作集
第四十五編 近松世話淨瑠璃集
第四十六編 仇討小說集
第四十七編 淨瑠璃名作集
第四十八編 俠客傳全集
第四十九編 續珍本全集

31.

74
7



74
7

026818-001-5

74-7

スタンレー探検実記　一名，闇黒亜非利加

大橋　新太郎／編

上

M29

ADE-0010